

福岡市埋蔵文化財調査報告書第652集

い る
入 部 X

－東入部遺跡群第2次調査報告(2)－

2000

福岡市教育委員会

IRU BE
入 部 X

—東入部遺跡群第2次調査報告(2)—



2000

福岡市教育委員会

序

福岡県の北西部、玄界灘に面して広がる福岡市には、豊かな自然と先人によって育まれてきた歴史が残されています。これらを活用するとともに、保護し未来に伝えていくことは、現代に生きる我々の重要な務めです。しかし近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存に努めています。

本書は、昭和62年度から平成7年度にかけて実施された早良区入部地区の県営圃場整備に伴う発掘調査のうち、平成3年度の東入部遺跡群第2次調査の成果を報告するものです。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、地元改良区をはじめ多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対しまして、心からの謝意を表します。

平成12年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 西憲一郎

例　　言

- 1 本書は、福岡市教育委員会が福岡市早良区東入部地内で県営圃場整備に伴い実施した発掘調査のうち、東入部遺跡群第2次調査（1991年度）8区の報告である。8区は調査面積が広く、遺構も多岐にわたったため、今回の報告は弥生時代の掘立柱建物、竪穴住居についてのみである。
- 1 県営入部地区圃場整備に伴う発掘調査の報告としてはこれまで以下の9冊が刊行されている。本書はこれを引き継ぎ、10冊目にあたることから書名を『入部X』とした。この入部という地名は遺跡名を示すものではない。

『入部I』福岡市埋蔵文化財調査報告書第235集 1990
『入部II』福岡市埋蔵文化財調査報告書第269集 1991
『入部III』福岡市埋蔵文化財調査報告書第310集 1992
『入部IV』福岡市埋蔵文化財調査報告書第343集 1993
『入部V』福岡市埋蔵文化財調査報告書第424集 1995
『入部VI』福岡市埋蔵文化財調査報告書第485集 1996
『入部VII』福岡市埋蔵文化財調査報告書第516集 1997
『入部VIII』福岡市埋蔵文化財調査報告書第557集 1998
『入部IX』福岡市埋蔵文化財調査報告書第613集 1999

- 1 本報告に用いた遺構実測図は濱石哲也、池田祐司、長家伸、榎本義嗣、屋山洋、英豪之、黒田和生が作成し、他に作業員の方々の協力を得た。現場写真は濱石、長家が撮影した。なお空中写真は有限会社空中写真企画（権藤夫）による。
- 1 出土遺物の実測は濱石、林田憲三、高橋健治が行った。写真撮影は林田が行った。
- 1 本書に関わる製図は濱石があたったが、一部林田、菅波正人の協力を得た。
- 1 本書の作成には他に樋口久子、星野明子が関わった。
- 1 本書に用いた方位は磁北である。
- 1 遺構番号は東入部遺跡群第2次調査全体での4桁の通し番号で、8区は0021～0240、0411～0550、0616～0700、0901～1099、1140～2379が相当する（欠番あり）。遺構の種類に応じて頭に次の略号をつけた。S B（掘立柱建物）、S C（竪穴住居）、S D（溝）、S K（土坑）、S X（祭祀）。なお甕棺墓はK、土壙墓・木棺墓はDを略号とする。
- 1 出土遺物は1から443までの通し番号とした。図版の遺物番号も挿図の番号と一致する。
- 1 出土遺物の縮尺は土器類を1/3、石器・鉄器・玉類・土製品を1/2とした。ただし一部の石器を縮尺1/3とし、それについては本文中に明記した。
- 1 本書に關わる図面、写真、遺物など一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。
- 1 本書の作成作業は国庫補助を受けて行った。また、作成事業は埋蔵文化財課（課長 山崎純男、第1係長 山口謙治、第2係長 力武卓治）が担当した。
- 1 執筆・編集は長家の協力を受け濱石が行った。

本文目次

	本文頁
I はじめに	5
II 遺跡の立地と歴史的環境	6
III 東入部遺跡群第2次調査	9
1. 調査の概要	9
2. 調査組織	9
3. 8区の調査	10
1) 概要	10
2) 堀立柱建物	12
3) 積穴住居	22
(1)円形住居	22
(2)方形住居	42
4) 小結	64

挿図目次

	本文頁
第1図 入部園場整備事業地の位置と早良平野の遺跡 (縮尺1/50,000)	7
第2図 入部園場整備年次測量事業地と周辺の遺跡群 (縮尺1/10,000)	8
第3図 東入部遺跡群および第2次調査地点 (縮尺1/3,000)	折り込み
第4図 第2次調査グリッド配置図 (縮尺1/2,000)	11
第5図 S B0211・0212実測図 (縮尺1/40, 1/100)	13
第6図 S B0211・0212出土遺物実測図 (縮尺1/2, 1/3)	14
第7図 S B0213・0214・0215実測図 (縮尺1/40, 1/100)	15
第8図 S B0213・0214出土遺物実測図 (縮尺1/2, 1/3)	16
第9図 S B0215・0216出土遺物実測図 (縮尺1/2, 1/3)	17
第10図 S B0217・0218・0219・0220・0222実測図 (縮尺1/100)	19
第11図 S B0223実測図 (縮尺1/100)	20
第12図 S B0217・0218・0219・0220・0221・0222・0223出土遺物実測図 (縮尺1/2, 1/3)	21
第13図 S C0952実測図 (縮尺1/80)	23
第14図 S C0538・0952出土遺物実測図 (縮尺1/2, 1/3)	24
第15図 S C0983実測図 (縮尺1/80)	25
第16図 S C0983出土遺物実測図1 (縮尺1/3)	26
第17図 S C0983出土遺物実測図2 (縮尺1/3)	27
第18図 S C0983出土遺物実測図3 (縮尺1/2)	28
第19図 S C1140・1140A実測図 (縮尺1/80)	29
第20図 S C1140・1140A出土遺物実測図 (縮尺1/2, 1/3)	30
第21図 S C0538・1155・1156・1200・1221実測図 (縮尺1/80)	32
第22図 S C1155・1156出土遺物実測図 (縮尺1/2, 1/3)	33
第23図 S C1200出土遺物実測図 (縮尺1/2, 1/3)	35
第24図 S C1220・1360実測図 (縮尺1/80)	36
第25図 S C1220出土遺物実測図 (縮尺1/2, 1/3)	37
第26図 S C1221・1360出土遺物実測図 (縮尺1/2, 1/3)	38
第27図 S C1500・1520実測図 (縮尺1/80)	39
第28図 S C2051実測図 (縮尺1/80)	40

第29回	S C1500・1520・2051出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）	41
第30回	S C0527・0529・0540・0546実測図（縮尺1/60）	43
第31回	S C0527・0529出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）	44
第32回	S C0540・0546出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）	45
第33回	S C0547・0640・0662・0963・0964実測図（縮尺1/60）	47
第34回	S C0547・0662・0963出土遺物実測図（縮尺1/3）	48
第35回	S C0965・1157・1222・1240・1332・1361・1362実測図（縮尺1/60）	49
第36回	S C0965・1157出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）	50
第37回	S C1222・1240・1332出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）	51
第38回	S C1362出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）	52
第39回	S C1363・1368・1369・1370・1373・1700実測図（縮尺1/60）	54
第40回	S C1363・1368・1369出土遺物実測図（縮尺1/3）	55
第41回	S C1370・1373・1700出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）	56
第42回	S C1792・1800・1836・1972・2020実測図（縮尺1/60）	58
第43回	S C1792・1800・1836・1972出土遺物実測図（縮尺1/3）	59
第44回	S C2020出土遺物実測図（縮尺1/3）	60
第45回	S C2047・2120・2122実測図（縮尺1/60）	61
第46回	S C2047・2120出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）	62
第47回	S C2122出土遺物実測図（縮尺1/3）	63

図版目次

図版 1	8区全景（西から）	
図版 2	1 8区南西側（北東から）	2 8区南西側（北から）
図版 3	1 8区北西側（南から）	2 S B0213（南から）
図版 4	1 S C0538（南から）	2 S C0952（北から）
図版 5	1 S C0983（北から）	2 S C1140・1140A（北西から）
図版 6	1 S C1155（北東から）	2 S C1200（東から）
図版 7	1 S C1220・1360（南東から）	2 S C1221（東から）
図版 8	1 S C1500（南から）	2 S C1520（南から）
図版 9	1 S C2051（南から）	2 S C0527（東から）
図版10	1 S C0529（南から）	2 S C0540（南から）
図版11	1 S C0546（北から）	2 S C0547（北から）
図版12	1 S C0640（北から）	2 S C0662（西から）
図版13	1 S C0964（西から）	2 S C0965（西から）
図版14	1 S C1157（西から）	2 S C1332（南から）
図版15	1 S C1362（北から）	2 S C1368（南から）
図版16	1 S C1369・1370（東から）	2 S C1700（西から）
図版17	1 S C1792（南から）	2 S C1800（南から）
図版18	1 S C1836・2122（東から）	2 S C1972（南から）
図版19	1 S C2020（北から）	2 S C2120（北から）
図版20	出土遺物 1	
図版21	出土遺物 2	
図版22	出土遺物 3	

表 目 次

本文頁		
第1表	東部地区調査整備事業地区内発掘調査年度別一覧	5
第2表	東部人跡群調査一覧	6
第3表	東部人跡群第2次調査地区一覧	10

付 図

東部遺跡群第2次調査8区遺構配置図（縮尺1/200）

I はじめに

福岡市の西南部に広がる早良平野は、江戸時代、貝原益軒（1630～1714年）によって「北に海ありて、三方に高山あり。広平の地に、村里多く、水田多し。中に早良川（室見川）流る、故に、山林河海そなはりて、薪材ともしからず。魚、塩多し。河水多けれ共、漲なくして、水旱の患稀也」（『筑前国統風土記』1703年）と記された旧早良郡に属する。さらに益軒の文は「されとも平田は肥饒ならずして、種植豊ならず」と続く。住み良い環境の割には、田畠の収穫は豊富でなかったことが知られる。益軒がこう記した早良郡は、1975年その全域が福岡市に編入され、以後四半世紀の都市化の波に押され、その姿を大きく変えてきた。

1985年（昭和60年）、福岡市早良区大字重留および東入部一帯の県営圃場整備事業計画が、福岡県農林事務所などから福岡市教育委員会埋蔵文化財課（当時文化課）に示された。それは約100ヘクタールの耕地を対象に、1987年度から8ヶ年にわたって圃場整備を行うという大規模な計画であった。

埋蔵文化財課で事業計画地内を確認したところ、重留、四箇船石、四箇古川、四箇東、清末、岩本、安通、東入部の8遺跡群と坪塚古墳があることが明らかになった。その時点で発掘調査を行っていたのは、四箇東、清末遺跡群の一部にしかすぎなかつたため、埋蔵文化財課は1986年3月に事業地内を試掘調査し、その性格・範囲などの把握を試みた。試掘調査の結果、弥生時代と中世を中心としたかなり密度の濃い遺跡群が、事業地のほぼ全域に広がっていることが改めて確認された。

課では埋蔵文化財の保存と事業の円滑化をめざして事業者と協議をもち、当該年度の対象地を詳細に試掘し、この結果に基き遺跡範囲内の新設の構造物（水路・道路）、削りが遺構面に達する田面と表土直下が即遺構面となる田面については基本的に本調査を行うこととした。ただし田面に関しては盛土などで設計変更をはかり、調査対象面積を最小にする方針をとった。発掘調査は1987年度から1994年度まで8ヶ年にわたって実施し、その後1995年度に暗渠排水に伴う調査を行った（第1表）。

本書は、平成3年度に実施した東入部遺跡群第2次調査の本報告である。ただ整理の都合上、8区の遺構・遺物の一部について報告するにとどまった。

圃場整備地内の発掘調査を無事終了できたのは、調査に従事していただいた多くの作業員の方々のご協力と、県農林事務所、市農業土木課、鍋山弥三理事長をはじめとする改良区の方々のご指導のたまものである。心から感謝したい。

次数	調査年度	事業面積	調査対象面積	本調査期間	調査対象遺跡群*
1	1987(昭和62)	5.0ha	12,500m ²	1988. 1. 6～1988. 3. 31	重留
2	1988(昭和63)	15.2ha	15,000m ²	1988. 6. 21～1989. 4. 7	重留(2次)・坪塚古墳
3	1989(平成元)	15.9ha	16,200m ²	1989. 8. 1～1990. 3. 26	重留(3次)・岩本・四箇船石
4	1990(平成2)	15.2ha	22,294m ²	1990. 7. 18～1991. 3. 8	四箇船石(2次)・四箇古川(2次)・東入部(2次)・西通
5	1991(平成3)	21.7ha	34,381m ²	1991. 5. 13～1992. 3. 5	四箇船石(3次)・四箇古川(3次)・東入部(2次)・西通
6	1992(平成4)	14.0ha	13,832m ²	1992. 5. 20～1993. 1. 31	四箇船石(4次)・四箇古川(4次)・東入部(3次)・西通
7	1993(平成5)	6.0ha	17,000m ²	1993. 5. 1～1994. 2. 28	四箇船石(5次)・四箇古川(5次)・東入部(4次)・西通
8	1994(平成6)	1.3ha	5,000m ²	1994. 7. 7～1994. 11. 25	四箇船石(6次)・四箇古川(6次)・東入部(5次)・西通
9	1995(平成7)	(暗渠排水)	2,600m ²	1995. 10. 4～1996. 2. 12	東入部(11次)

* 調査対象遺跡群のアミは本報告済み

第1表 入部地区圃場整備事業地区内発掘調査年度別一覧

II 遺跡の立地と歴史的環境

県営入部地区圃場整備事業は、福岡市の西南に広がる早良平野の南部、標高592mの油山山麓とその西を流れる室見川との間に広がる水田地帯で実施された（第1・2図）。今回報告する東入部遺跡群は、事業地内の遺跡群のなかでは最も南の福岡市早良区大字東入部地内にあり、南北に延びる低位段丘とその周囲の沖積地を占地する。東西約700m、南北約1200mの広大な遺跡群で、西は室見川、東側は小河川を越え荒平山の麓に達する。北側には安通、清末、四箇大町、四箇古川、四箇船石、岩本の各遺跡群が、川や浅い谷を隔てて分布する。南は室見川が平野に流れ出る狭隘地となる。標高は遺跡群の1次調査北端で29m、3次調査地点で33~37m、南端にあたる10次調査地点で39mをはかる。遺跡名称は大字名から採られている。

この東入部遺跡群では、今年度までに11次にわたる発掘調査が行われてきた（第2表）。その内容は縄文時代の包含層、弥生時代の集落と墳墓、古墳時代の集落と墳墓、奈良・平安時代の官衙的建物群、鎌倉・室町時代の集落と墳墓および生産跡などきわめて豊富なものであった。それはこの遺跡群が、弥生時代以降早良平野内での一大拠点であったことが判明した。

東入部遺跡群が所在する旧早良郡、すなわち早良平野およびそれを取り囲む山陵には、旧石器時代から近世にいたる様々な遺跡群が濃密に分布している（第1図）。1970年代後半以降の福岡市の著しい都市化はこの一帯にも波及し、土地開発に伴う遺跡の発掘調査も相当の件数に及んでいる。その結果、早良平野のみならず北部九州の歴史を新たに書き替える重要な考古資料が蓄積された。弥生時代では吉武遺跡群の大規模な発掘調査で、2千基を越える豪棺墓とその豊富な副葬品が出土し、その社会構成の復元に大きな手がかりを提示した。東入部遺跡群第2次調査の弥生時代墳墓も、この復元の一翼を担っている。同時に土器、青銅器、鉄器等をはじめとした弥生時代遺物の研究にも大きな寄与をなした。古墳時代では藤崎方形周溝墓群、桶渡古墳、押塚古墳、梅林古墳、クエゾノ古墳などの調査が行われ、前方後円墳の存在も明らかとなった。また群集墳の調査もかなりの数に上がっている。古代では官衙的建物群が有田、石丸、吉武、東入部等の遺跡群で確認され、その具体的な比定が要請されている。中世では平野内での土地開発の様子が集落の立地と絡んで判明しつつある。

次数	調査番号	遺跡略号	調査面積	調査期間	調査地番	調査原因	報告*
1	9074	HGI-1	5,453m ²	(1990. 7. 18~1991. 3. 8)	東入部1943他	圃場整備	557集・613集
2	9165	HGI-2	16,272m ²	(1991. 5. 13~1992. 3. 5)	東入部1378他	圃場整備	613集・本報告
3	9216	HGI-3	13,832m ²	1992. 5. 20~1993. 1. 31	東入部1274他	圃場整備	485集
4	9208	HGI-4	1,319m ²	1992. 5. 8~1992. 8. 10	東入部329-18他	公民館建設等	381集
5	9226	HGI-5	351m ²	1992. 5. 13~1992. 8. 20	東入部329-1他	下水道工事等	382集
6	9227	HGI-6	380m ²	1992. 8. 9~1992. 9. 4	東入部390-7他	道路拡幅	383集
7	9312	HGI-7	17,000m ²	1993. 5. 1~1994. 2. 28	東入部1172他	圃場整備	516集・557集
8	9348	HGI-8	175m ²	1993. 11. 9~1993. 11. 25	東入部329-21他	道路拡幅	421集
9	9418	HGI-9	145m ²	1994. 5. 25~1994. 6. 28	東入部336-2他	道路拡幅	421集
10	9427	HGI-10	5,003m ²	1994. 7. 7~1994. 11. 25	東入部1098-2他	圃場整備	485集
11	9529	HGI-11	2,600m ²	1995. 10. 4~1996. 2. 14	東入部1366他	圃場整備	
12	9722	HGI-12	30m ²	1997. 6. 5~1997. 6. 7	東入部1450-1	道路改良	

*報告一覧は64頁にあり

第2表 東入部遺跡群調査一覧



- | | | | |
|---------|----------|-------------|-------------|
| 1 吉武遺跡群 | 6 四箇遺跡群 | 11 西新町遺跡 | (○) 遺跡群 |
| 2 大田遺跡 | 7 拝環古墳 | 12 五島山古墳 | (●) 遺跡 |
| 3 羽根戸遺跡 | 8 有田遺跡群 | 13 抱六町ツイジ遺跡 | (■) 古墳 |
| 4 都地遺跡 | 9 原遺跡群 | 14 宮ノ前遺跡 | アミ部が闡場整備事業地 |
| 5 田村遺跡群 | 10 鹿崎遺跡群 | 15 野方中原遺跡 | |

第1図 入部闡場整備事業地の位置と早良平野の遺跡(縮尺1/50,000)



第2図 入部開場整備年次別事業地と周辺の遺跡群(縮尺1/10,000)



第3図 東入部遺跡群および第2次調査地点 (縮尺1/3,000)

III 東入部遺跡群第2次調査

1. 調査の概要

1991（平成3）年度の県営入部地区圃場整備事業地は総面積21.7ヘクタールに及び、前年度の南側にある大字東入部の中通工区（173,000m²）と、事業地西南側の西入部工区（44,000m²）に分かれていた。中通工区には清末遺跡群、岩本遺跡群、安通遺跡群、東入部遺跡群が知られていた。

1991年4月2日から5月10日まで対象地の発掘調査を行った。この結果、西入部工区では遺構の検出はなかったものの、中通工区では東入部遺跡群をはじめとして各遺跡群で縄文時代から近世の遺構の濃い分布をみた。また遺構のほとんどは表土直下からの検出であった。当初の計画に照らし合わせると、発掘調査をする面積は102,400m²で、工事対象地の60%にも達した。

埋蔵文化財課は県・市の農政、地元改良区と数回にわたる調整会議をもち、7月には主に田面の盛土など設計変更により、調査対象面積を34,381m²まで縮小した。また一方、これらの調整を待たず、構造物など設計変更が困難な部分について本調査を行うこととし、5月13日、東入部遺跡群（6区～15区に分けた）6区の表土剥ぎを開始した。その後、7区、安通遺跡群の調査を始め、調査面積が確定した8月から8区へと進んだ。8区では壺棺墓などから副葬品の発見が相次ぎ、11月16日には現地説明会を開催し、遺跡と出土遺物を一般に公開した。10月には職員4人の調査体制が整い、複数地区にわたって調査を展開できるようになり、年末までに安通遺跡群が終了した。また東入部遺跡群の9～15区の調査にも着手し、2月末に終了した。東入部遺跡群8区のめどがついた1992年1月、清末遺跡群の調査を開始し、3月5日に1991年度の発掘調査をすべてを完了した。なお安通遺跡群、清末遺跡群、東入部遺跡群の6区、7区、9区、10区についてはすでに本報告を行っている。

2. 調査組織

今回報告する東入部遺跡群第2次調査は1991年度（平成3年度）に実施したものである。調査面積が広く、また遺跡群の中心部分で遺構の密度が濃かったため、全体を一度に報告するに至っていない。今回も整理が済んだ8区の一部の遺構・遺物について報告するにとどまる。

以下、1991年度の発掘調査関係者、それ以後1999年度（平成11年度）に至るまでの本報告書作成の関係者について記す。

事業主体 福岡県農林事務所農地整備監修課 福岡市農林水産局農業振興部農業土木課

福岡市入部土地改良区

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

課長 柳田純孝、折尾学、荒巻輝勝（前任） 山崎純男

第1係長 飛高憲雄、横山邦継、二宮忠司（前任） 山口謙治

第2係長 柳沢一男、塩屋勝利、山崎純男、山口謙治（前任） 力武卓治

庶務 中山昭則、内野保基（前任） 谷口真由美（文化財整備課管理係）

調査担当 濱石哲也（現文化財整備課整備係長） 長家伸 池田祐司 櫻本義嗣

調査補助 尾山洋（現埋蔵文化財課） 加藤隆也（同） 英豪之 黒田和生

整理補助 林田憲三（埋蔵文化財課調査員） 井上かおり

3. 8区の調査

1) 概要

東入部遺跡群は、荒平山の西麓から西北方向に延びる舌状の丘陵上に広がる遺跡群で、第2次調査地点はその中央から北半部には相当する。調査対象が広範囲にわたったため、前述したように6～15区にわけて発掘を行った（第3表）。6区、7区、9区、10区については『入部区』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第613集 1999）すでに報告を行っている。

8区は丘陵中央の尾根線上から西側斜面にあたるが、調査時には全体に水田が営まれ、北側で標高33m、南側で33.5mとほぼ平坦な状況を呈していた。この調査区では弥生時代の集落・墓地・古墳・奈良・鎌倉時代の集落を主に確認した。弥生時代集落は中期を中心に営まれ、竪穴住居と掘立柱建物あわせて40数棟からなる。墓地は集落の東側に接し、壺棺墓・土槻墓・木棺墓あわせて160数基からなり、その一部は南北2ヶ所に方形区画墓を形成する。その時期は前期末から後期初頭に及び、銅剣、銅鏡、鉄製武器などの副葬品が出土した。また祭祀土器が区画溝などから大量に出土した。古墳は5基検出した。いずれも円墳で、主体部は木棺・小形竪穴式石室各1基、横穴式石室2基、不明1基である。古代・中世の集落は掘立柱建物を主体とするが、密度は薄い。

本報告は、遺構・遺物量が多かった8区のすべてを報告するには至らず、整理の終わった弥生時代の掘立柱建物と竪穴住居についての報告にとどまる。以下に8区の報告項目をあげ、今後の整理・報告の目安にしたい。

1 弥生時代の集落

- 1) 掘立柱建物（本報告）
- 2) 竪穴住居（本報告）
- 3) 土坑
- 4) その他

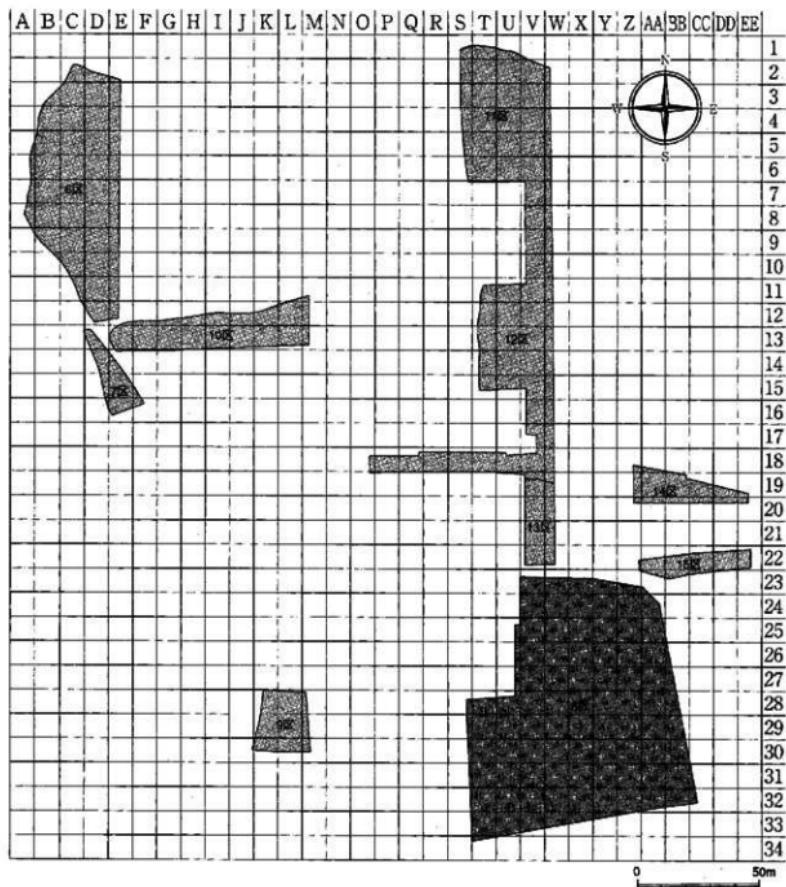
2 弥生時代の墓地

- 3 古墳および古墳時代の遺構
- 4 古代・中世の集落

今回の報告に用いた遺構番号は、東入部遺跡群第2次調査全体での4桁の通し番号で、8区では0021～0240、0411～0550、0616～0700、0901～1099、1140～2379が相当する（欠番あり）。本書では掘立

区	調査対象面積	調査面積	調査原因	備考	報告
6	3,344m ²	3,207.28m ²	排水路・田面		613集
7	240m ²	245.34m ²	排水路・田面		613集
8	6,172m ²	7,177.98m ²	用水路・排水路・道路・田面	弥生時代墓地は埋め戻し保存。	本報告
9	491m ²	505.08m ²	排水路・田面		613集
10	—	1,178.56m ²	田面		613集
11	2,410m ²	2,242.50m ²	用水路・排水路・道路・田面	上面遺構だけ調査で、下部は保存。	
12	2,268m ²	2,334.12m ²	用水路・排水路・道路・田面		
13	432m ²	401.86m ²	用水路・排水路・道路		
14	644m ²	460.30m ²	用水路・田面		
15	270m ²	316.90m ²	道路		
計	16,271m ²	18,069.92m ²			

第3表 東入部遺跡群第2次調査地区一覧



第4図 第2次調査グリッド配置図 (縮尺1/2,000)

柱建物にS B、竪穴住居にS Cの略号を用いた。また掘立柱建物・竪穴住居の柱穴については本来の4桁の遺構番号とは別に、わかりやすくするために遺構ごとにP 1からの通し番号にした。追って、対照表を作製する予定である。なお8区の遺構配置は付図に示している。

出土遺物は1から443の通し番号を付けた。出土遺物は小破片が多かったが、努めて図化した。一部遺構の時期より古い縄文時代の遺物も含んでいる。

2) 堀立柱建物

S B0211～S B0223の13棟を検出した。このうちS B0223は柱列（柵？）であるが、ここで取り扱う。堀立柱建物の多くは整理の段階で確認したものである。調査区内にはなお柱痕跡を残す柱穴をはじめ多数のビットがあり、まとめきれなかった建物がかなり存在するものと思われる。

S B0211（第5図） V-28区。1×4間の南北棟で、建物方位はN-10°-E。梁の実長は300cm、桁の実長は1500cmで、柱間は375cmの等間となる。床面積は45m²。柱穴は長方形状のものが多く、長さ65～110cm、幅55～110cmをはかる。深さは50～60cmで、標高33m前後が底面となる。第5図の下に示したが、P 8、P 9には柱痕跡が明瞭である。またP 7には壺胴部が半裁された状態で出土した。S C0640とS C1800を切る。

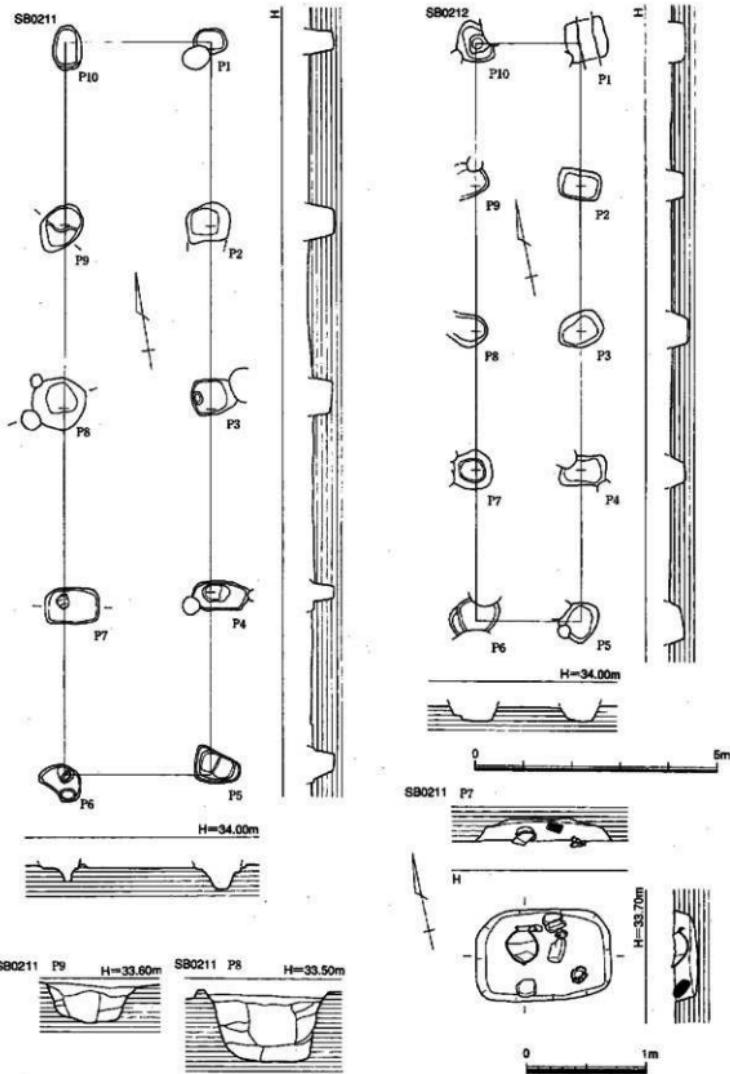
出土遺物（第6図1～9） 1・2は断面三角形の口縁をもつ壺。1は口縁端部に棒状工具で刻目を入れる。内外面ともナデ。胎土は比較的細かい。2は外面と内面上部に刷毛目調整を行う。3は壺の胴部。三角突帯にヘラ状工具で刻目を入れる。外面は細かい継刷毛目調整を行う。4は壺の底部。厚みのある上げ底で、内底は黒色となる。5～8は壺。5は頸部が外反し、口縁上面に平坦部を作る。6は口縁端部を短く外側に引き出し、肩部には三角突帯を巡らす。とともに厚みのある作りで、頸部には刷毛目調整を行う。7は三角突帯を巡らす肩部。残存部はナデで丁寧に仕上げる。8はP 7から出土した口縁部を欠く半裁された壺。頸部下端には二条の沈線が巡り、明瞭な段を作つて大きく張った胴部へと続き、底部は平底となる。外面は横方向のヘラ研磨。胎土には粗く砂粒が多い。黒塗りの可能性がある。9は黒曜石製の石器。長三角形状剥片の端部と側縁に加工を加える。

S B0212（第5図） U-30区。1×4間の南北棟で、建物方位はN-12°-E。梁の実長は215cm、桁の実長は1185cmで、柱間は北から290cm、300cm、285cm、310cmとなる。床面積は25.47m²。柱穴は長方形状のものが多く、長さ80～90cm、幅60cm前後をはかる。深さは30～35cmで、標高33.10～33.20mが底面となる。P 1は未掘である。S C1140Aを切り、S B0214とS B0222に切られる。

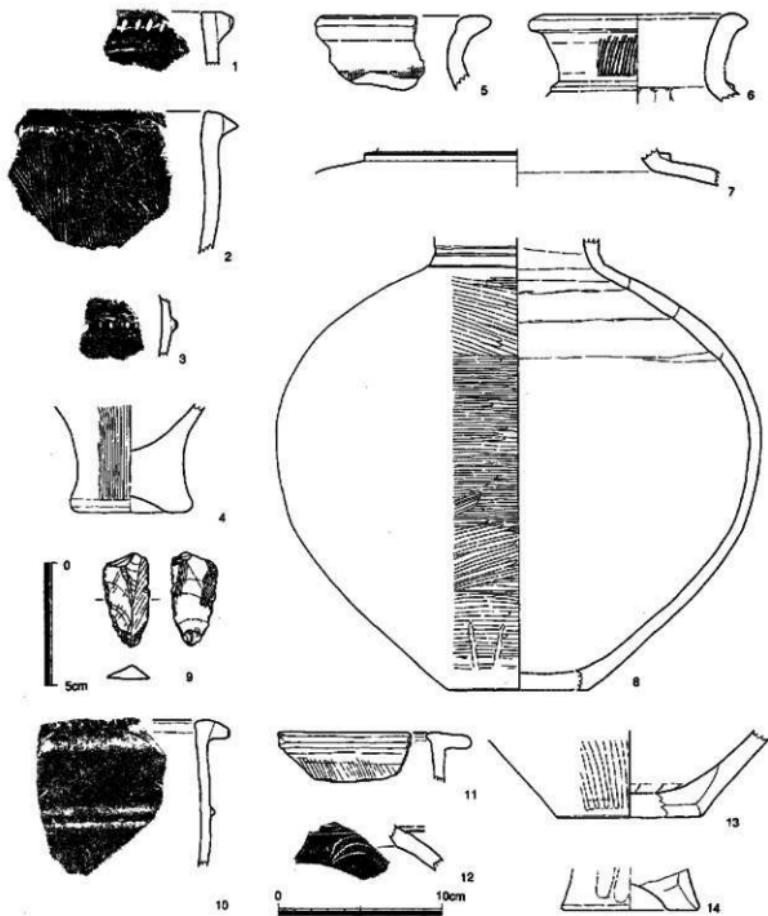
出土遺物（第6図10～14） 10・11は逆L字状口縁の壺。10は口縁部の外側への張り出しが小さく、端部には細い棒状工具で刻目を入れる。また胴部上位に三角突帯を巡らす。外面は粗い継刷毛目調整の後ナデを行ふ。11は口縁部の外側への張り出しが大きく、内側への張り出しある。外面は細かい刷毛目調整。14は壺の底部で、厚い上げ底となる。外面は指揮さえ。胎土には砂粒が多い。12は壺の肩部で、斜め方向のヘラ研磨で仕上げた後、二条の沈線を入れ、その下に二枚貝腹縁で三重の円弧を描く。黒塗りの可能性がある。13は壺の底部。外面はヘラ研磨でなめらかに仕上げる。

S B0213（第7図、図版3-2） T-30区。1×4間の南北棟で、建物方位はN-11.5°-E。梁の実長は350cm、桁の実長は805cmで、柱間は北から250cm、280cm、275cmとなる。床面積は28.17m²。柱穴は梢円形状のものが多く、長さ70～120cm、幅60～110cmをはかる。深さは70cm前後で、標高32.60～32.70mが底面となる。ただ、P 1だけが33.90mと浅い。第7図下に柱痕跡の明瞭なP 7の断面図を示した。なおP 1～P 3はS C1140床面に至って検出した。S C1140、S C1140A、S C1373を切る。

出土遺物（第8図15～33） 15・16は如意形口縁の壺で、15は口唇部全面に、また16は下端に刻目を入れる。17は短いくの字状口縁の壺。薄手の作りで、外面は刷毛目調整を行う。18～20は逆L字状口縁の壺。このうち20は外側への張り出しが大きく、また口縁下に三角突帯を巡らす。21は壺の底部。わずかに上げ底で、底は薄い。22～25は壺。22は口縁部が短く外反すもので、外面は継方向、内面は横方向のヘラ研磨で仕上げる。23は広口壺。肩部には沈線が巡る。外面は横ナデの後、ヘラで継方向の暗文を施す。内面は横方向のヘラ研磨で、黒塗りの痕が残る。24は胴部。シャープな三角突帯を貼

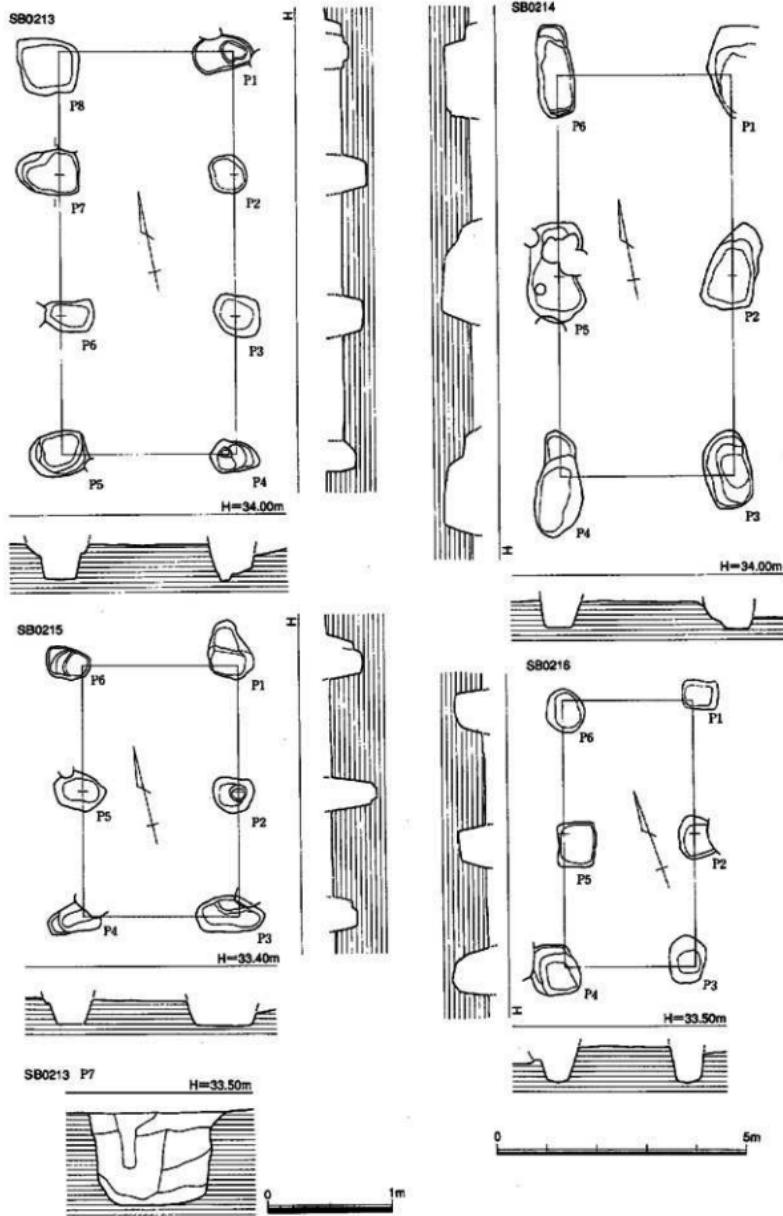


第5図 SB0211・0212実測図 (縮尺1/40,1/100)

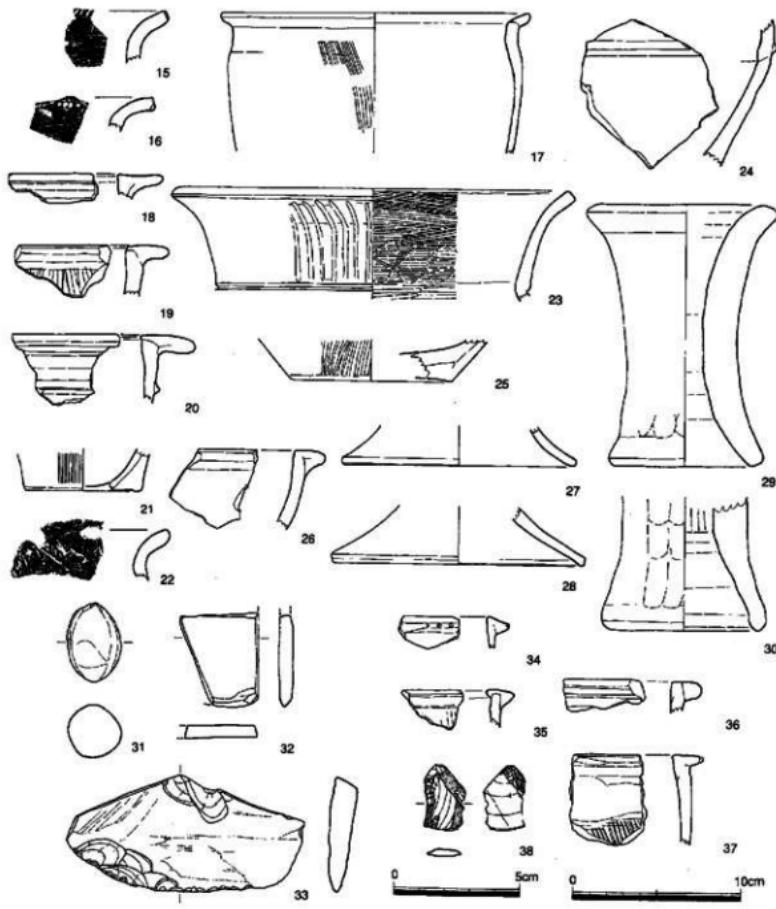


第6図 SB0211・0212出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）

り付け、外面は横方向の丁寧なヘラ研磨でなめらかに仕上げる。胎土は比較的精良。25は底部。わずかに上げ底。外面は縦方向のヘラ研磨を行う。胎土・調整・色調など24によく似る。26～28は高坏。26は杯部で、内外面ともナデ調整で仕上げる。胎土は粗く、砂粒も多い。27・28は脚据部。ともに摩滅がひどく、28の外面にヘラ研磨の痕跡がうかがえる程度である。28はきわめて精良な胎土を用いる。29・30は指ナデで仕上げた厚手の器台。29は受部・脚部とも外反して丸くおさめる。30の脚端部は小さく立つ。31は土製投弾。長さ3.1cm、厚さ2.15cm、重量13g。全体の1/2弱に黒斑が見られる。



第7図 SB0213・0214・0215・0216実測図 (縮尺1/40, 1/100)

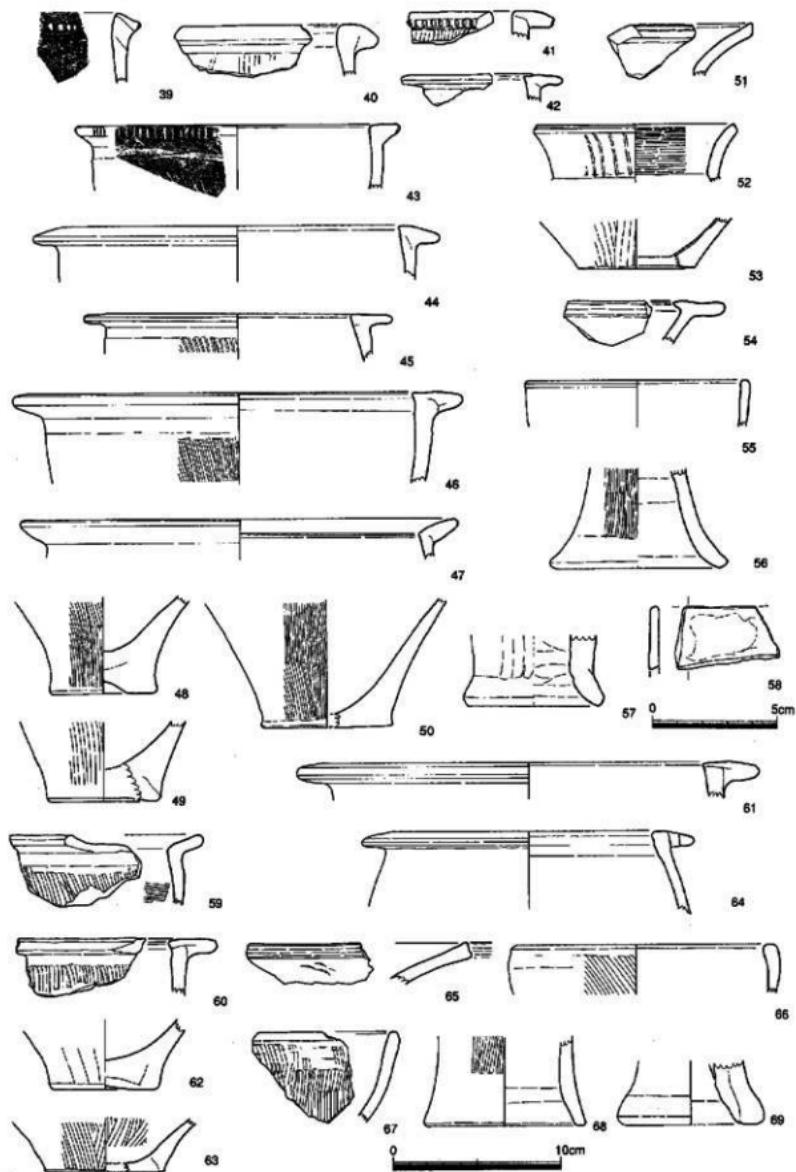


第8図 S B0213・0214出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）

32は扁平片刃石斧。上部と一側辺は欠けている。頁岩製。33は安山岩の剥片の側縁を加工したスクリーパー。

S B0214（第7図） U-30区。1×3間の南北棟で、建物方位はN-10°-E。梁の実長は350cm、桁の実長は800cmで、柱間は400cmの等間となる。床面積は28.00m²。柱穴掘方は南北に長軸をとる平面隅丸長方形状で、長さ160~200cm、幅70~110cmをはかる。深さは60cm前後で、標高32.90m前後が底面となる。P1はS K0665と切り合うが、先後関係は不明。S B0212、S C0952を切る。

出土遺物（第8図34~38） 34・35は断面三角形の口縁をもつ甕。34の口縁端部にはヘラで刻目を入れる。35の口縁部は内側へも張り出す。外面は刷毛目調整で、煤が付着する。36・37は逆L字状口



第9図 S B0215・0216出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）

の壺。ともに外側への張り出しが小さい。37の外面は刷毛目調整。38は黒曜石剥片の一側縁を加工したものである。

S B0215 (第7図) T-29区。1×2間の南北棟で、建物方位はN-13.5°-E。梁の実長は320cm、桁の実長は500cmで、柱間は250cmの等間となる。床面積は16.00m²。柱穴は東西に長い隅丸長方形のものが多く、長さ85~140cm、幅60~75cmをはかる。深さは50~90cmとばらつきがあるが、標高32.70m前後が底面となるものが多い。S C1836、S C2122を切り、S B0220に切られる。

出土遺物 (第9図39~58) 39・40は断面三角形の口縁をもつ壺。39の口縁端部には細い棒状工具で刻目を入れる。40の口縁部は厚みのある作りである。41~46は逆L字状口縁の壺。43の口縁部は外側への張り出しが小さく、44は口縁上面が垂れ下がり気味になる。41・43は口縁端部にヘラ状工具で刻目を入れる。外面は継ぎ刷毛目調整を行うものが多い。47は口縁部がくの字状に外傾する壺。48~50は壺の底部で、48が上げ底、49・50はほぼ平底である。外面は継ぎ刷毛目調整を行う。50の内底は黒色となる。51~53は壺。51は広口壺で、内面から口縁端部まで赤色顔料が残る。外面は摩滅する。52は短頸壺で、口縁端部には浅い沈線が巡る。外面はヘラで継ぎ暗文を施し、内面は横方向のヘラ研磨で仕上げる。丹塗りの可能性がある。53はやや上げ底の底部。外面は黒塗りで、縱方向のヘラ研磨を行う。54は鋤先状口縁の高壺。胎土は比較的よいが、全体に摩滅する。55は鉢。直立した口縁端部がわずかに肥厚する。胎土は精良。56・57は器台。56は薄手で、外面は細かい刷毛目調整、内面はナデをともに丁寧に行う。57は厚手で、指ナデではなく全体を仕上げている。58は頁岩製の石包丁片。もとの形を残すのは背(上部)だけである。

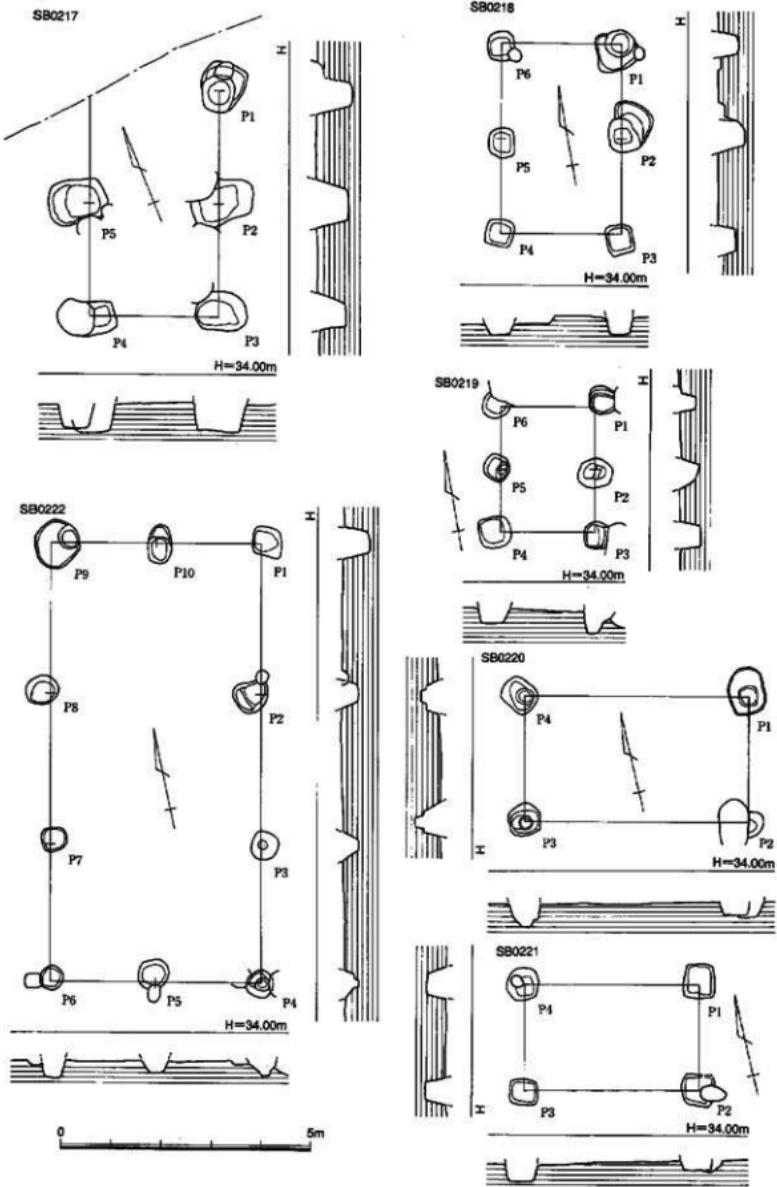
S B0216 (第7図) V-23区。1×2間の南北棟としてとらえたが、北側の調査区外にさらに延びる可能性もある。建物方位はN-19.5°-E。梁の実長は260cm、桁の実長は530cmで、柱間は265cmの等間となる。床面積は13.78m²。柱穴は方形状のものが多く、幅70~90cmをはかる。深さは50~70cmで、標高32.50m前後を底面とするものが多い。S C2200、S C2120を切る。

出土遺物 (第9図59~69) 59は短いくの字状口縁の壺。外面は継ぎ刷毛目、内面にも細かい横刷毛目調整を行う。60・61は逆L字状口縁の壺で、内側への小さな張り出しがある。ともに胎土が細かく、焼きあがりもよい。62・63は壺の底部。62はやや上げ底で厚みをもち、外面はヘラナデで仕上げる。63は薄手の平底で、内外面とも刷毛目調整を行う。64は無頸壺。口縁部は逆L字状になり、上面に2個一組の孔を穿つ。ナデで仕上げる。65は広口壺。口縁端部はナデでくぼむ。残存部はナデ。壺の蓋の可能性もある。66・67は鉢。66は口縁端部が内傾しわずかに肥厚する。外面は斜めの刷毛目調整の上に横ナデを行い仕上げる。67の外面は継ぎ刷毛目調整。ともに精良な胎土で、焼きもよい。68・69は器台。68は薄手のもので、外面に刷毛目調整を行う。69は厚手で、指ナデで全体を仕上げる。

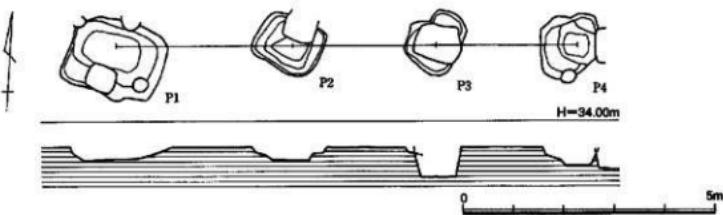
S B0217 (第10図) T-28区。1×2間の南北棟としてとらえたが、西北隅柱は確認しておらず、また北側の調査区外へさらに延びる可能性もある。建物方位はN-23°-E。梁の実長は285cm、桁の実長は450cmで、柱間は225cmの等間となる。1×2間とすれば床面積は12.82m²。柱穴は東西に長軸をとる長方形のものが多く、長さ110~130cm、幅70~90cmをはかる。深さは60~70cmで、標高32.30m前後が底面となる。

出土遺物 (第12図70~74) 70はくの字状口縁の壺で、口縁端部は厚みを増す。口縁下にはシャープな三角突帯を貼り付ける。残存部は横ナデ。71・72は逆L字状口縁の壺。72の口縁部は内側への張り出しをもつ。ともに横ナデ仕上げ、焼きがよい。73は壺の底部。わずかに上げ底で、外面は継ぎ刷毛目調整を行う。内底には炭化物が付着する。74は壺の底部。平底で、外面は刷毛目調整を行う。

S B0218 (第10図) U-28区。1×2間の南北棟で、建物方位はN-10°-E。梁の実長は240cm、



第10図 S B 0217・0218・0219・0220・0221・0222実測図（縮尺1/100）



第11図 SB 0223実測図（縮尺1/100）

桁の実長は380cmで、柱間は190cmの等間となる。床面積は9.12m²。柱穴は幅60cm前後の方形状のものが多い。深さは45~55cmで、標高33m前後が底面となる。SC 1792を切る。

出土遺物（第12図75~77） 76は断面三角形に近い口縁をもつ壺。口縁端部にはヘラで刻目を入れる。また口縁下に低い三角突帯を巡らし、ヘラで刻目を入れる。75は逆L字状口縁の壺。口縁部は中央がやや厚くなり、また内側に張り出す。77は壺の底部。平底で、外面は刷毛目調整で仕上げるが、接合部分であろうか器表の凹凸が見られる。内面には炭化物が付着する。

SB 0219（第10図） U-28区。1×2間の南北棟で、建物方位はN-10°-E。梁の実長は190cm、桁の実長は250cmで、柱間は125cmの等間となる。床面積は4.75m²。柱穴は幅50~65cmの方形状のものが多い。深さは30~45cmで、標高33m前後が底面となる。SC 1792に切られる。

出土遺物（第12図78・79） 78は断面三角形の口縁をもつ壺。口縁上面はナデでややくぼむ。残存部は横ナデで、外面には黒斑がある。79は鋸先状口縁の壺。口縁の内外への張り出しあげはさほど大きくない。口縁端部には細い棒状工具で刻目を入れる。残存部はナデで仕上げている。

SB 0220（第10図） T-29区。1×1間の東西棟で、建物方位はN-14°-E。東西長450cm、南北長250cm。床面積11.25m²。柱穴は幅65~90cmの方形あるいは長方形状である。深さは30~45cmで、標高33m前後が底面となる。SB 0215、SC 1363を切る。

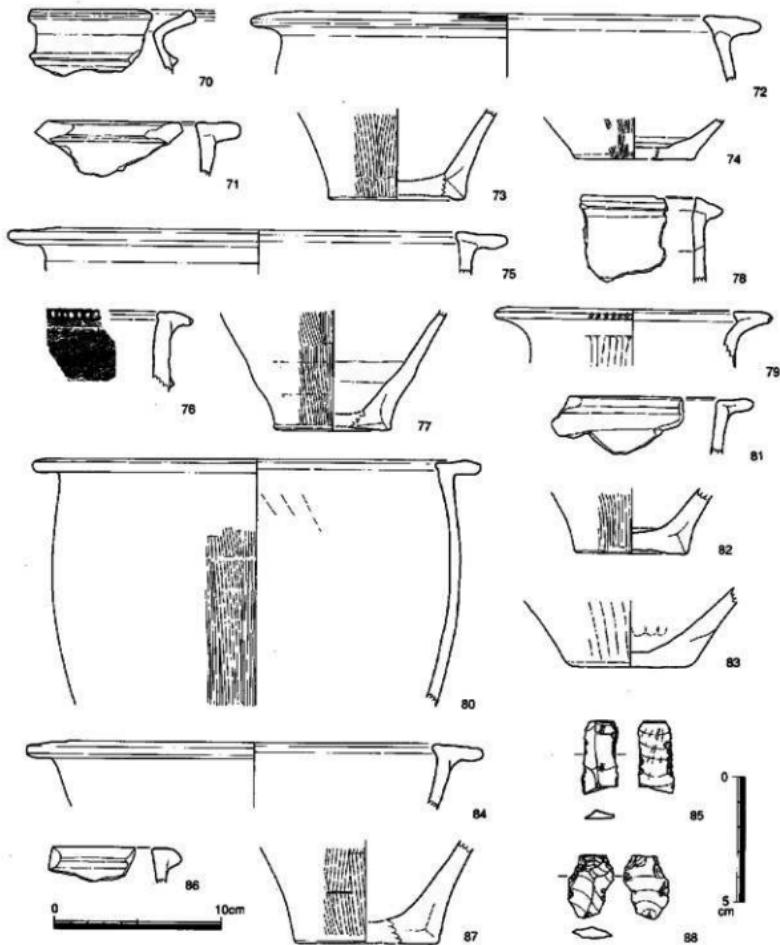
出土遺物（第12図80・81） 80・81ともに逆L字状口縁の壺である。80は口縁中央がやや膨らみ、内側にも張り出す。外面は細かい綴刷毛目調整。81は器表の摩滅が著しい。

SB 0221（第10図） U-32区。1×1間の東西棟で、建物方位はN-14°-E。東西長350cm、南北長210cm。床面積は7.35m²。柱穴は幅50~70cmの方形で、深さは20~30cmをはかる。SB 0223を切る。P 4（1652）から断面三角形の壺口縁部片など19点が出土したが、実測したものはない。

SB 0222（第10図） U-31区。2×3間の南北棟で、建物方位はN-12°-E。梁の実長は420cm、柱間は210cmの等間。桁の実長は875cmで、柱間は北から300cm、300cm、275cmとなる。床面積は36.75m²。柱穴は円形が多く、径50~100cmをはかる。深さは30~50cmで、標高33.20m前後が底面となるものが多い。SB 0212を切る。

出土遺物（第12図82~85） 82はやや上げ底の壺底部。外面は綴刷毛目調整、内面は黒変する。83は壺の底部。外面はヘラ研磨で仕上げるが、やや摩滅気味である。外底をリング状に黒斑？が巻いている。内面はナデ。84は高杯の杯部。鋸先状口縁で、口縁端部には丹塗りが残る。残存部は横ナデを行う。85は黒曜石の剥片石器。長方形の両側縁を加工する。

SB 0223（第11図） U-32区。ほぼ東西方向に延びる4つの柱穴からなる。柱筋の方位はN-86°-E。他の建物群と異なり、西にふれる。全長920cm、柱間は西から355cm、285cm、280cm。柱穴はP 1が長さ190cm、幅150cmの長方形、他は幅100~125cmの方形となる。深さは30~40cm。P 3は古代の掘立柱建物SB 0240柱穴に中央を切られる。他に、SB 0221に切られる。



第12図 S B0217・0218・0219・0220・0222・0223出土遺物実測図 (縮尺1/2, 1/3)

出土遺物（第12図86～88） 86は断面三角形の口縁をもつ甕。残存部は横ナデ。87は甕の底部。平底で、外面は綴刷毛目調査を行う。内面は黒色となる。88は黒曜石製のつまみ型石器。長さ2.5cm、幅1.8cm、厚さ0.4cm、重量2 g。

3) 積穴住居

調査区内で円形住居14基（S C0538、0952、0983、1140、1140A、1155、1156、1200、1220、1221、1360、1500、1520、2051）、方形住居31基（S C0527、0529、0539、0540、0546、0547、0640、0662、0963、0964、0965、1157、1222、1240、1332、1361、1362、1363、1368、1369、1370、1373、1700、1792、1800、1836、1972、2020、2047、2120、2122）のあわせて45基を検出した。円形住居は6基が調査区外にかかり、また1基（S C2051）は側壁が失われていた。方形住居は正方形、長方形、隅丸長方形の平面形をもつ。その多くが床面に炉や主柱穴がなく、また床面積も10m²以下となる。円形・方形住居とも床面に遺物が残された例は少なかった。

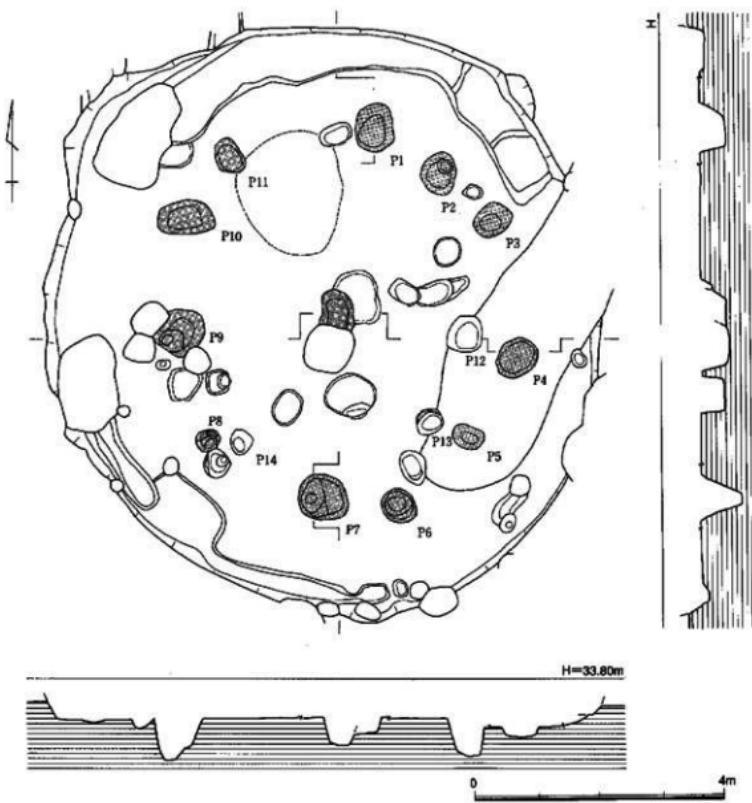
(1) 円形住居

S C0538（第21図、図版4-1） AA-24区で検出した住居で、北東部分が調査区外にかかる。復元径5.2m、床面積21m²前後。壁高は35cm。床面には径25~40cm、深さ18~24cmの円形ピットが3個ある。また南端に一段高くなる部分がある。S C0539を切る。

出土遺物（第14図89~95） 89~91は逆L字状口縁の壺である。90は口縁部の外側への張り出しが小さい。91は口縁下に低い三角突帯を巡らす。89・90の外面は刷毛目調整、内面は横ナデ。91は横ナデで仕上げている。92は鋤先状口縁の壺。口縁部の内側への張り出しあは小さく、口唇部にはヘラで浅い刻目を入れる。胎土には砂粒が多い。摩滅気味だが、残存部は横ナデと思われる。93は無頸壺。口縁上面は平坦である。外面は丹塗りで、ヘラ研磨を行う。胎土には砂粒が多い。94は薄手の器台。外側は細かい綿刷毛目調整を全面に行う。95は砂岩製の砥石。長さ10.2cmの柱状形で一部欠けるところもあるが、上下両端を除いた四面を砥面として利用する。すべて覆土からの出土である。

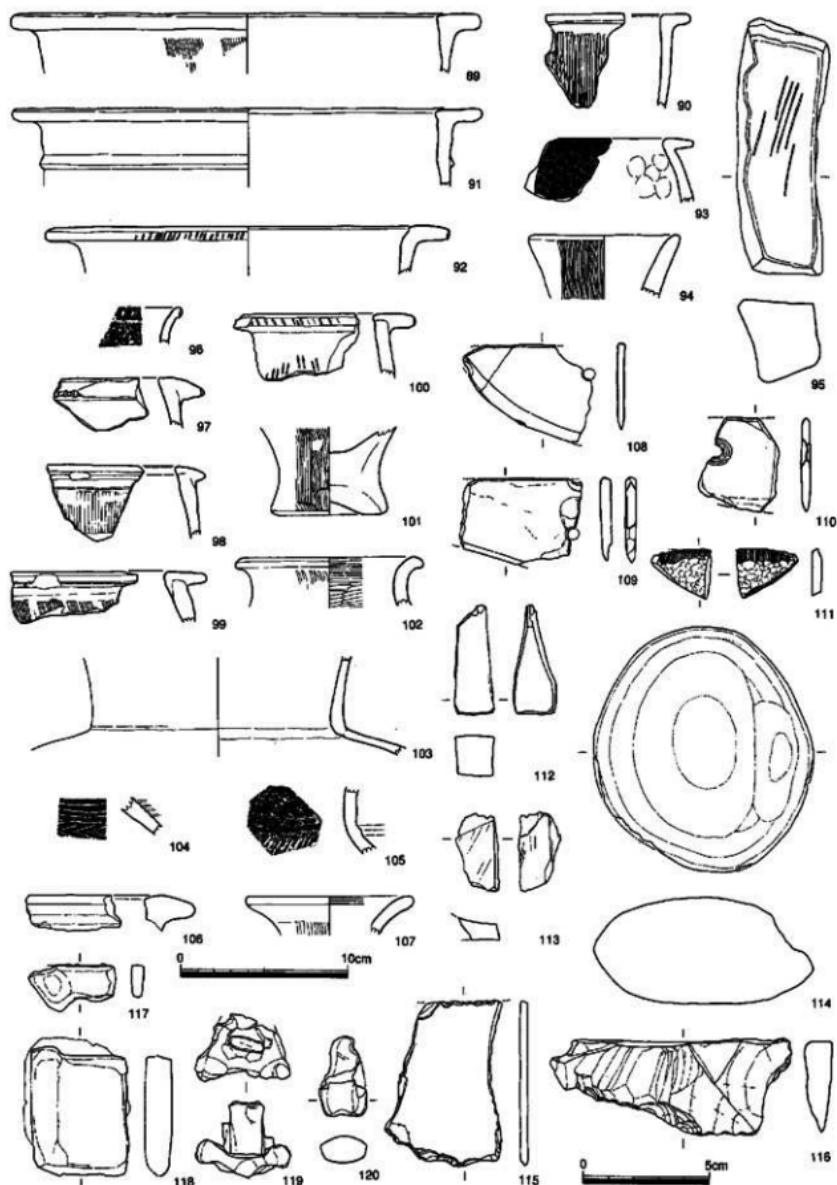
S C0952（第13図、図版4-2） V-30区で検出した。東側壁の一部を3号占墳の周溝で破壊され、また西側にはS B0214の柱穴が切り込む。南北9.3m、東西9.0mのわずかに南北にふくらむ円形で、床面積は63m²前後。壁高は20cm。覆土はやや砂質の茶褐色土一層である。床面中央に南北長50cm以上、東西幅44~55cm、深さ44cmの隅丸長方形形状の炉を設ける。炉内覆土には炭化物が混じる。炉から2.5m前後外を、P 1~P 11の11本の主柱穴がまわる。平面精円形を呈するものが多く、最大規模はP 7の長さ90cm、幅70cm、最小はP 8の長さ40cm、幅30cmである。深さはP 4が最も浅く28cm、他は42cm以上あり、P 9が68cmと最も深い。柱穴間はP 1-125cm-P 2-110cm-P 3-225cm-P 4-140cm-P 5-150cm-P 6-140cm-P 7-180cm-P 8-150cm-P 9-200cm-P 10-120cm-P 11-240cm-P 1となる。P 12~14はいずれも主柱穴の内側にあり、50~59cmの深さをもつ。建て替えられた可能性もある。側壁下の周溝は南北に分かれて設けられ、北側は幅70cm、深さ5cm、南側は一部広くなる部分あるが幅30~40cm、深さ10cmをはかる。

出土遺物（第14図96~120） 96は如意形口縁の壺で、口唇部下端にヘラで刻目を入れる。97・98は断面三角形の口縁をもつ壺。97の口縁端部にはヘラで刻目を入れる。98の外面は刷毛目調整を行う。99・100は逆L字状口縁の壺。100の口唇部にはヘラで刻目を入れる。ともに外面は刷毛目調整で仕上げる。101は壺の底部。厚手の上げ底で、外面は刷毛目調整を行う。内底は黒変する。102~105は壺である。102は口縁部が短く外反する。外面には綾の暗文を施し、内面は横方向のヘラ研磨で仕上げる。胎土は精良である。103は広口壺。肩部から明瞭な段をつけて頸部が立ち上がる。残存部は横ナデ。胎土は比較的精良である。104は肩部片で、四条の沈線の下に二枚貝腹縁で斜線（羽状文）を施す。105は肩部に低い突帯を作り、その下に二枚貝腹縁で斜線（羽状文）を施す。摩滅しているが、横ナデと思われる。106は鋤先状口縁をもつ高杯、あるいは壺。胎土は砂粒も混じるが比較的細かい。残存部は横ナデ。107は薄手の器台。外面及び受け部内面上位に刷毛目調整を行う。108~110は半月形外溝

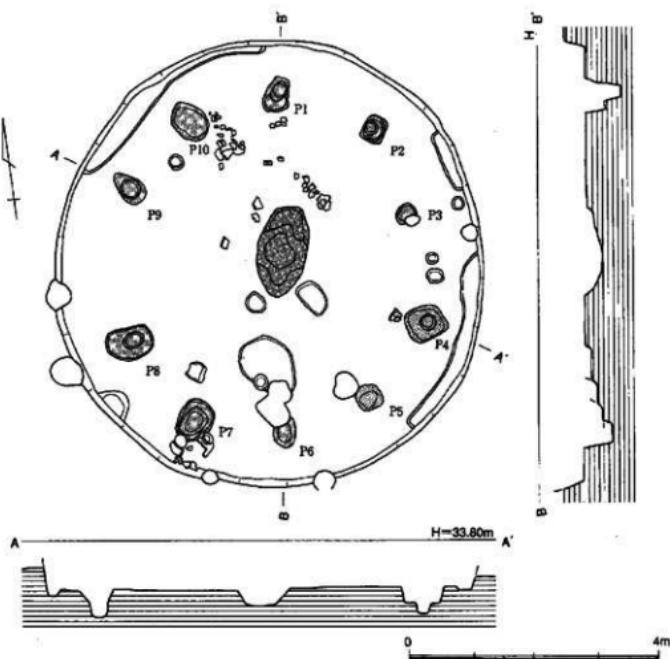


第13図 SC 0952実測図（縮尺1/80）

刃の頁岩製の石包丁片。紐かけ穴はいずれも両面穿孔で、両刃となる。111も石包丁片だが、破損後、背とその縁および反対側の側縁を研磨する。粘板岩製。112・113は日の細かい粘板岩の砥石。112は長さ3.3cm、厚さ1.5cmの手持ち砥石で、柱状形のすべての面を使用し、とくに相対する二面を頻繁に使用したためか上端部は厚さ0.5cmまで磨り減っている。113は扁平で、残存する三面を砥面として使用している。114は花崗岩の円盤を利用した磨石。重量515g。115・116はスクレーパーの類であろうか。115は扁平な頁岩の上下縁辺に、また116は玄武岩の剥片を利用しその側縁に加工を加える。117～120はいずれも覆土下部から出土した鉄器である。いずれも十分な鋸取り、また理化学的調査を経ておらず、大まかな外形だけの報告になる。117は刀子片とも考えられる。厚さ0.5cm。118は鉄斧。長さ5.0cm、幅4.8cm、厚さ1cm前後。上部の一端がやや外にでるが、鋸のせいかもしれない。119は一端を欠くが三角形でその隅々が膨らむ（鉢か）鉄器の中央に、幅1.2cm、厚さ0.5cmほどの板状の鉄器を直角に組み合わせたものである。類例を見ず、切り合った別遺構からの出土の可能性も含め、とり



第14図 S C 0538・0952出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）

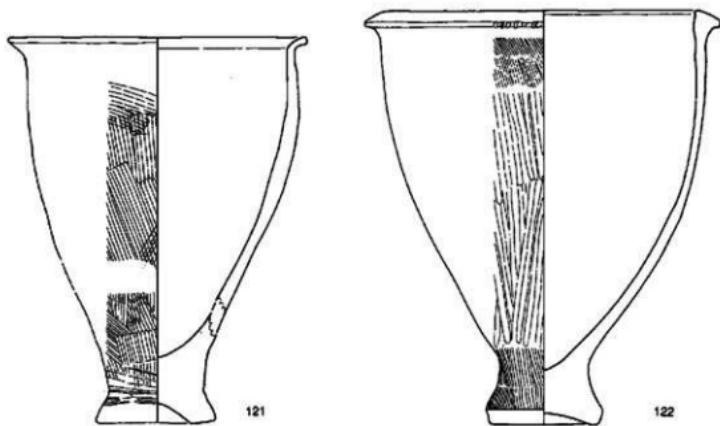


第15図 SC0983実測図 (縮尺1/80)

あえずここに報告しておく。120は長さ3.2cmの小鉄塊である。101が床面、100がP 11、109が南側周溝、他はすべて覆土からの出土である。

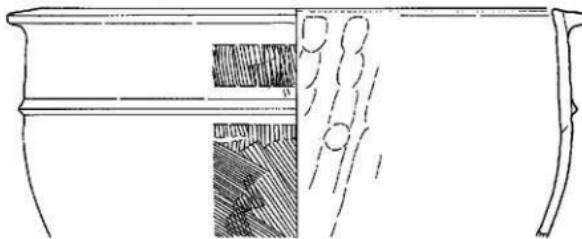
S C0983 (第15図、図版5-1) W-29区で検出した。東側を3号古墳の周溝が切り込む。南北7.15m、東西6.90mのわずかに南北にふくらむ円形で、床面積は36m²前後。壁高は34cm。覆土は二層ではほぼ水平に堆積し、上部の15cmが褐色土、下部の20cmが炭化物を若干含んだ明褐色となる。床面中央に南北長148cm、東西幅80cm、深さ44cmの二段掘りにした楕円形炉を設ける。炉内覆土は焼土・炭化物が混じった淡褐色土。炉から2.0m前後外を、P 1～P 10の10本の主柱穴がまわる。平面楕円形あるいは方形を呈し、最大規模はP 7の長さ70cm、幅56cm、最小はP 3の長さ32cm、幅26cmである。深さはP 7が最も浅く38cm、他は42cm以上あり、P 1が60cmと最も深い。柱穴間はP 1-160cm-P 2-145cm-P 3-180cm-P 4-160cm-P 5-140cm-P 6-140cm-P 7-160cm-P 8-240cm-P 9-150cm-P 10-150cm-P 1となる。側壁下の周溝は西北、東北、東南の3ヶ所に分断してあり、幅30cm前後、深さ5～10cmをはかる。覆土は灰黒色土となる。壺、壺、紡錘車などの遺物が床面の主柱穴内側を中心に出土した。柱穴、炉からの出土遺物はない。

出土遺物 (第16～18図121～138) 121～123は壺である。121は如意形口縁をもち、胴の張りはない。底部は台形状で、厚い上げ底となる。外面は継刷毛目調整、内面はナデで仕上げる。口径17.8cm、



121

122



123



124

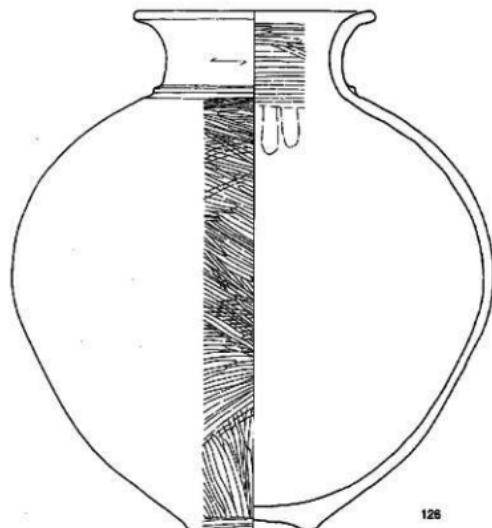
125

0

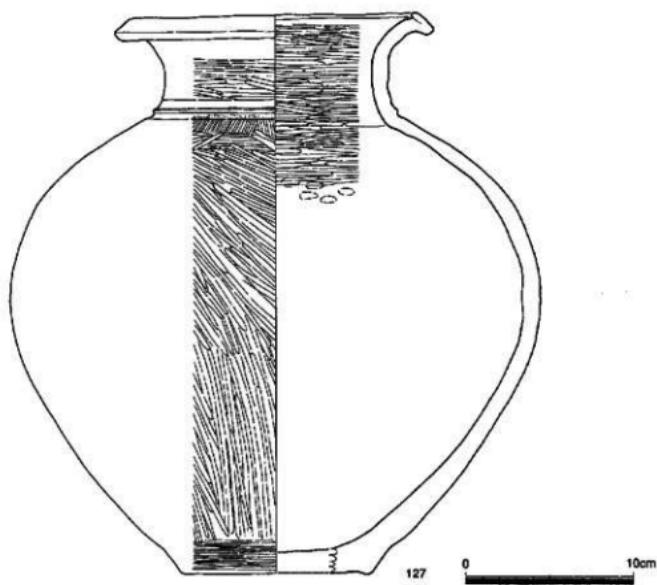
10cm

第16図 S C0983出土遺物実測図1 (縮尺1/3)

復元器高23cm前後となる。122もほぼ同様の形態をもつが、口縁部が断面三角形となり、端部にはへラで浅い刻目を入れる。外面口縁下と底部は刷毛目、その中間は比較的幅広の継のへラ研磨調整となる。内面はナデで、内底には炭化物が付着する。復元口径21.1cm、器高24.6cm。123は断面三角形に近い口縁部をもち、口縁下には三角突帯を巡らす。外面は刷毛目調整、内面は指による押さえナデを行う。124・125は金海式壺棺に相当する大型壺(壺)である。124は沈線を二条巡らせた胴部、125は厚い上げ底の底部である。ともに砂粒の多い胎土を用い、残存部はナデで仕上げている。125の外面に丹塗りが認められる。17図126・127は壺で、胴部が丸く張り、肩部には低い突帯を設け、口縁部が



126

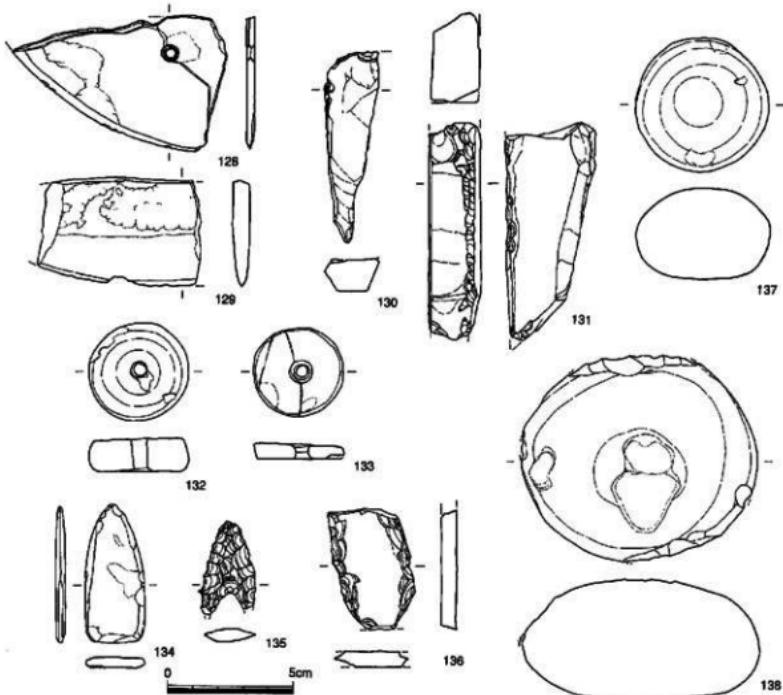


127

0

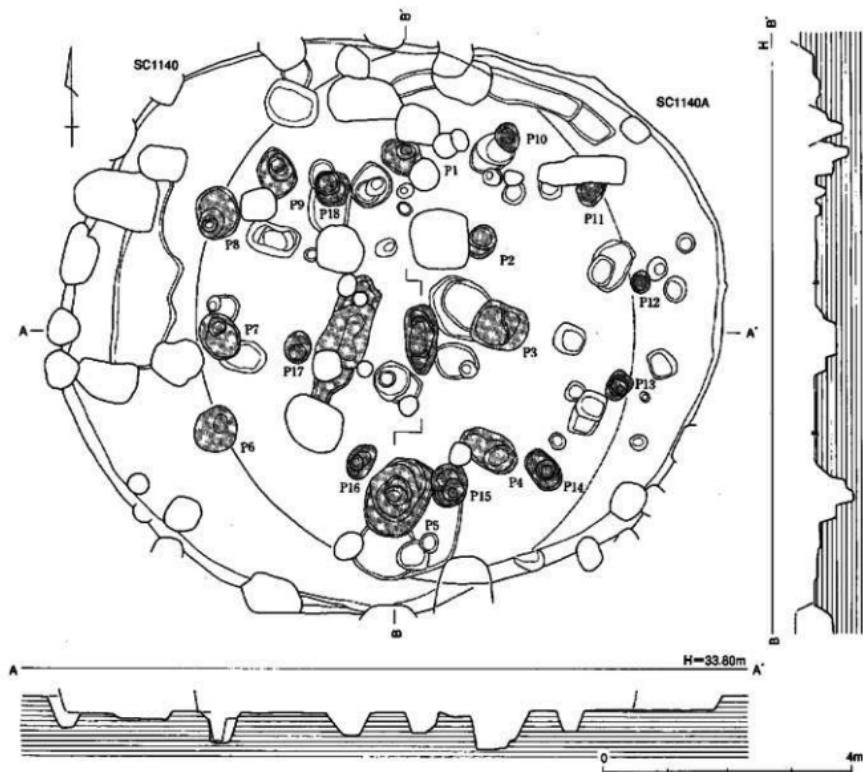
10cm

第17図 S C0983出土遺物実測図2 (縮尺1/3)



第18図 S C0983出土遺物実測図3 (縮尺1/2)

外反する。126は上げ底で、口頭部が外反し口縁端部を丸くおさめる。口頭部内面から外面にかけてヘラ研磨、胴部内面はナデを行う。胴部中位に黒斑がある。黒塗りの可能性もある。口径14.4cm、復元器高31cm前後。127は平底で、頭部が立ち上がり、その上位で外反して折り返したような口縁部を作る。肩部突帯はナデで引き出されたものである。肩部内面から外面はヘラ研磨で仕上げるが、突帯下には刷毛目調整も見られる。底部も含め外面はすべて黒塗りし、また口縁上面付近には丹塗りの痕跡も認められる。また胴部内面下半に黒斑がある。口径18.9cm、器高33.2cm。第18図は石器と土製品(132)である。128・129は外溝刃の石包丁。128は頁岩製で三角形に近い形態をもつ。紐かけ穴は両面穿孔。129は粘板岩製で長めの半月形になるものか。身上半部には敲打痕が残る。残存部に紐かけ穴は見られない。130は扁平片刃石斧、131は柱状片刃石斧の破片で、ともに安山岩ホルンフェルス製である。132・133は紡錘車である。132は土製で、径4.0cm、厚さ1.3cm、重量24g。砂粒混じりの胎土で、焼成良好、淡赤褐色を呈する。軸穴は棒状工具により図下方から穿つ。133は石製で、径3.5cm、厚さ0.6cm、重量12g。軸穴は両面からの穿孔となる。134は頁岩製の磨製石鎌。長さ5.5cm、幅2.3cm、厚さ0.4cm、重量8g。刃は身側縁先端部の約1/2に研ぎ出されている。135は古銅輝石安山岩製の打製石鎌。有脚で、脚の先端はともに折損する。136は安山岩ホルンフェルス製で、石劍の茎部片と考えられる。上面及び下端側辺には研磨が見られるが、両側辺には剥離痕が残る。137・138は花崗岩の扁

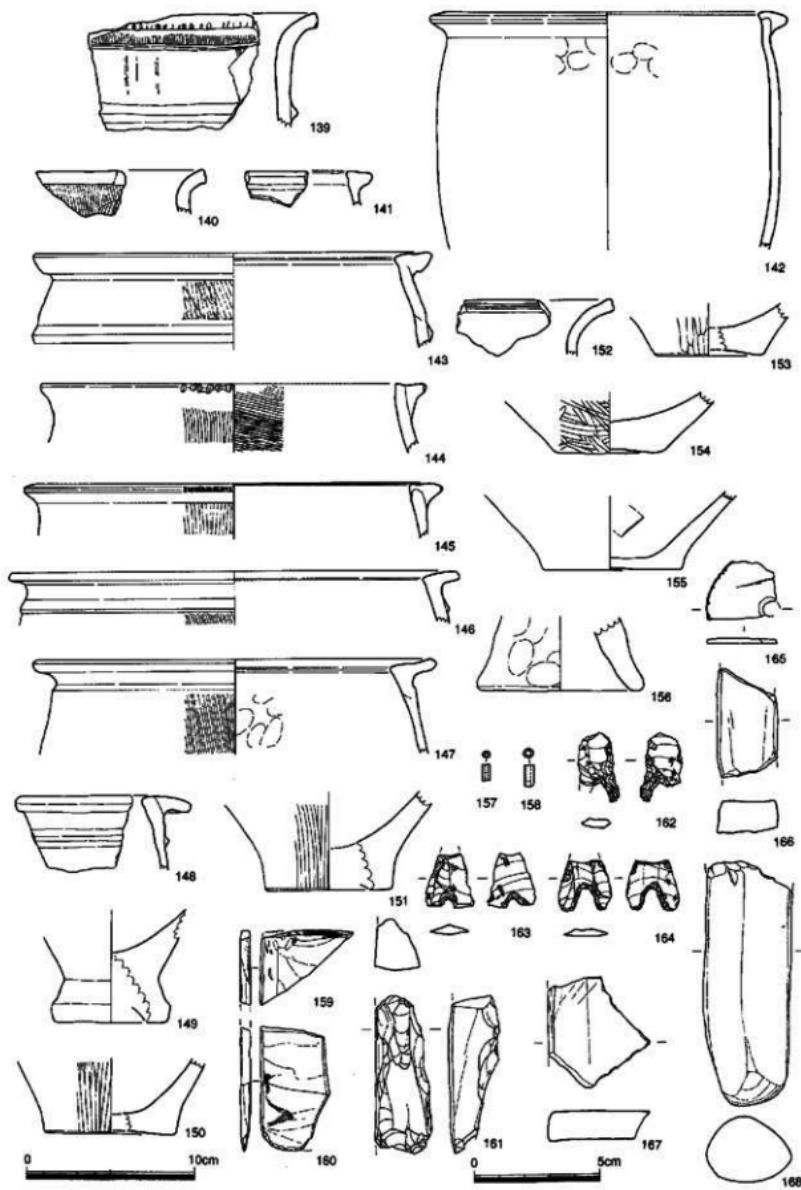


第19図 SC1140・1140A実測図（縮尺1/80）

平な円礫を利用した磨石。137は134g、138は515gで側辺及び上面に使用によると見られる剥離痕が残る。121～126・130・132・133が床面の主柱穴内側から、127が床面のP7の外側から、他は覆土から出土した。

S C1140・S C1140A（第19図、図版5-2） T-30区で検出した。当初1基の住居跡として掘り下げたが、床面で2基の炉を検出し精査したところ、東西に2基の住居が重複しており、柱穴の切り合いから西側（SC1140）が古く、東側（SC1140A）が新しいことが判明した。覆土はやや砂質の茶褐色上一層で切り合い関係は全く確認できなかった。覆土中の遺物はSC1140として一括して取り上げ区別ができないため、2基まとめて報告する。

SC1140は東半の側壁を失うが、南北径9.2mをはかり、床面積は60m²を越えると想定される。壁高は24cm。床面中央に南北長210cm以上、東西幅70cm、深さ38cmの二段掘りした長方形状の炉を設ける。炉内覆土には炭化物が混じる。炉から2.0m前後外を、P1～P9の9本の主柱穴がまわる。平面椭円形を呈するものがほとんどで、最大規模はP5の長さ123cm、幅98cm、最小はP2の長さ56cm、幅46cmである。深さはP2が最も浅く42cm、他は49～72cm、P6が82cmと最も深い。柱穴間はP1～



第20図 S C 1140・1140A出土遺物実測図 (縮尺1/2, 1/3)

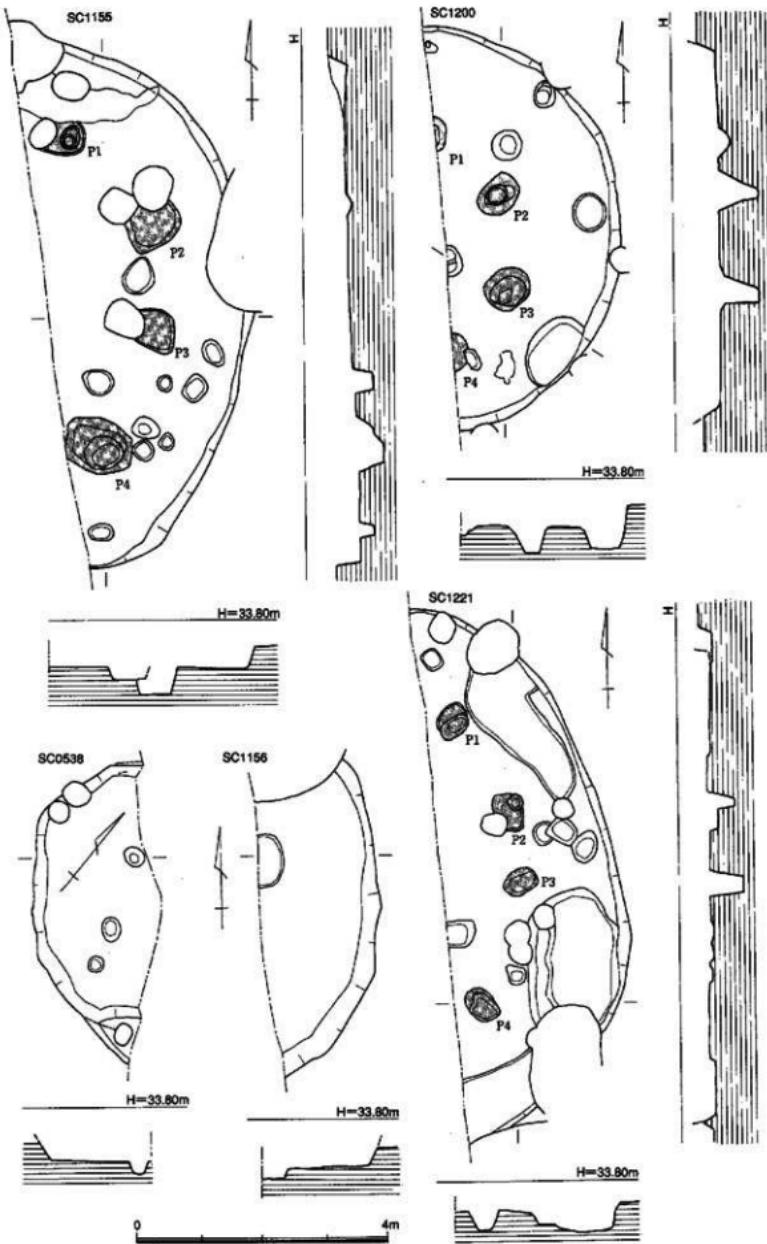
185cm-P 2-140cm-P 3-220cm-P 4-175cm-P 5-300cm-P 6-150cm-P 7-160cm-P 8-145cm-P 9-205cm-P 1となる。あるいは、P 1-300cm-P 3-315cm-P 5-300cm-P 6-310cm-P 8-330cm-P 1の5主柱穴としてとらえることもできる。西側壁下からやや内側に長さ320cm、幅92cm、深さ10cmの溝を設ける。西側をS B0213柱穴が切る。

S C1140Aは南北径8.6m、床面積は50m²前後になると想定される。壁高は24cm。床面中央やや西寄りに南北長112cm、東西幅53cm、深さ31cmの二段掘りした楕円形の炉を設ける。炉内覆土には炭化物が混じる。炉から2.0-3.0m外を、P 10-P 18の9本の主柱穴がまわる。平面円形もしくは楕円形で、最大規模はP 15の長さ72cm、幅60cm、最小はP 12の径30-34cmである。深さはP 12が最も浅く36cm、他は43-59cmで、P 16が67cmと最も深い。柱穴間はP 10-150cm-P 11-170cm-P 12-175cm-P 13-175cm-P 14-155cm-P 15-160cm-P 16-200cm-P 17-265cm-P 18-300cm-P 1となる。北側壁下からやや内側に長さ350cm、幅92cm、深さ10cmの周溝を設ける。平面規模、炉・主柱穴規模いずれもS C1140より小さい。

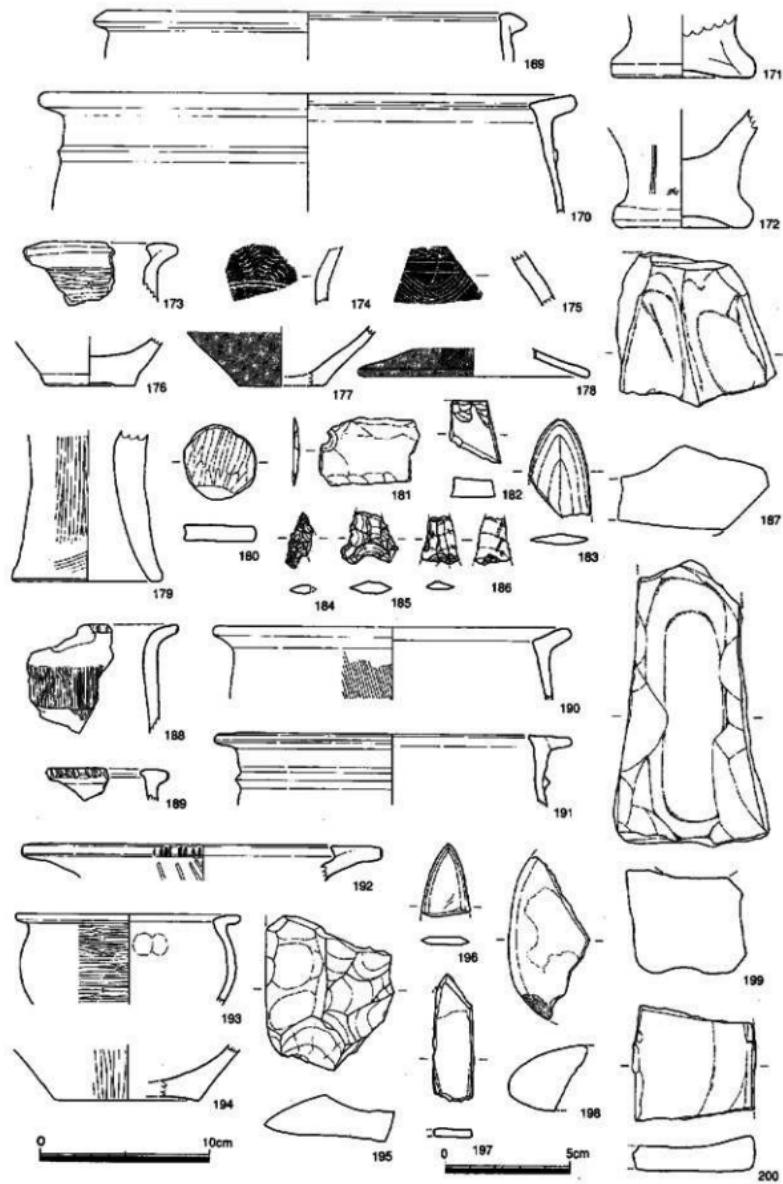
出土遺物（第20図139～168） 139・140は如意形口縁をもつ壺。139は口唇部下端にヘラで刻目を入れ、口縁下には三角突帯を巡らす。141～145は口縁部が断面三角形になる壺。143は口縁下に低い三角突帯を巡らす。144・145は口縁上面が平坦となり、口唇部にはヘラで刻目を入れる。142は内外面ともナデで仕上げるが、他は外面に刷毛目調整を行う。144は内面にも刷毛目調整を行い、色調は黒色に近い。146～148は逆L字状口縁の壺。146と148は口縁下に三角突帯を巡らし、147は口縁部への強いナデでその直下に段がつく。先に述べた壺に比べ明るい色調となる。149～151は壺の底部。149は台形状、151は底端部が直立し、ともに厚い上げ底となる。150は厚みの少ない浅い上げ底となる。いずれも内底には炭化物が付着している。152は広口壺の口縁部で、口唇部には一条の沈線が巡る。内外面ともヘラ研磨で、内面丹塗り、外面黒塗りとなる。153～155は壺の底部。153・154は厚みをもった浅い上げ底となり、外面はヘラ研磨で仕上げる。155は平底で、外面は摩滅気味だが、ヘラ研磨のようである。154・155は外底面も含め残存部の半分ほどに黒斑がかかる。156は厚手の器台。胎土は比較的精良で、内外面とも指押さえとナデで仕上げる。157・158は覆土下部出土の碧玉製管玉。157は長さ0.65cm、径0.3cm、158は一部が欠けたものを再利用しており長さ0.85cm、径0.4cm。穿孔はともに両端から行う。159・160は扁平片刃石斧で、159が頭部、160が刃部片である。ともに安山岩ホルンフェルス製で、同一個体の可能性もある。161は柱状片刃石斧。図下面と左側面を除き剥離が著しい。安山岩ホルンフェルス製。162～164は有脚の剥片鐵。黒曜石製でいずれも一部が欠ける。165は石製紡錘車の破片。軸孔は両面穿孔で、側縁には6個の刻目が残る。166・167は砂岩製の砥石。166は目がやや粗く、残存する三面すべてを砥面とする。167は166に比べ目が細く、砥面上面と側面だけで、下面は利用していない。168は敲石。断面三角形の棒状を呈し、先端部は摩滅する。安山岩製。S C1140に属するものとして141・147がP 8、166が炉から出土し、S C1140Aとして143・145がP 13、165がP 15から出土した。また143はP 3に切られたP 19から、他はすべて覆土からの出土である。

S C1155（第21図、図版6-1） S-29区で検出した。西半部が調査区外にかかる。検出した東側壁から径9.2m、床面積63m²前後に復元できる。壁高は北側で32cm、南側で38cm。覆土は茶褐色土一層である。床面には主柱穴の一部と見られるP 1～P 4がまわる。平面隅丸方形で、長さ70-106cm、幅50-86cm、深さは40-48cmである。柱穴間はP 1-180cm-P 2-180cm-P 3-210cmとなる。北側壁から床面にかけて焼土と炭化物が外から流れ込み堆積する。南側壁がS C1156を切る。

出土遺物（第22図169～187） 169は断面三角形の口縁部をもつ壺。残存部はナデを行なう。170は逆L字状口縁の壺。口縁下には低い三角突帯を巡らす。ナデで仕上げる。171・172は壺の底部。台形状



第21図 S C 0538・1155・1156・1200・1221実測図（縮尺1/80）



第22図 S C 1155 · 1156出土遺物実測図 (縮尺1/2, 1/3)

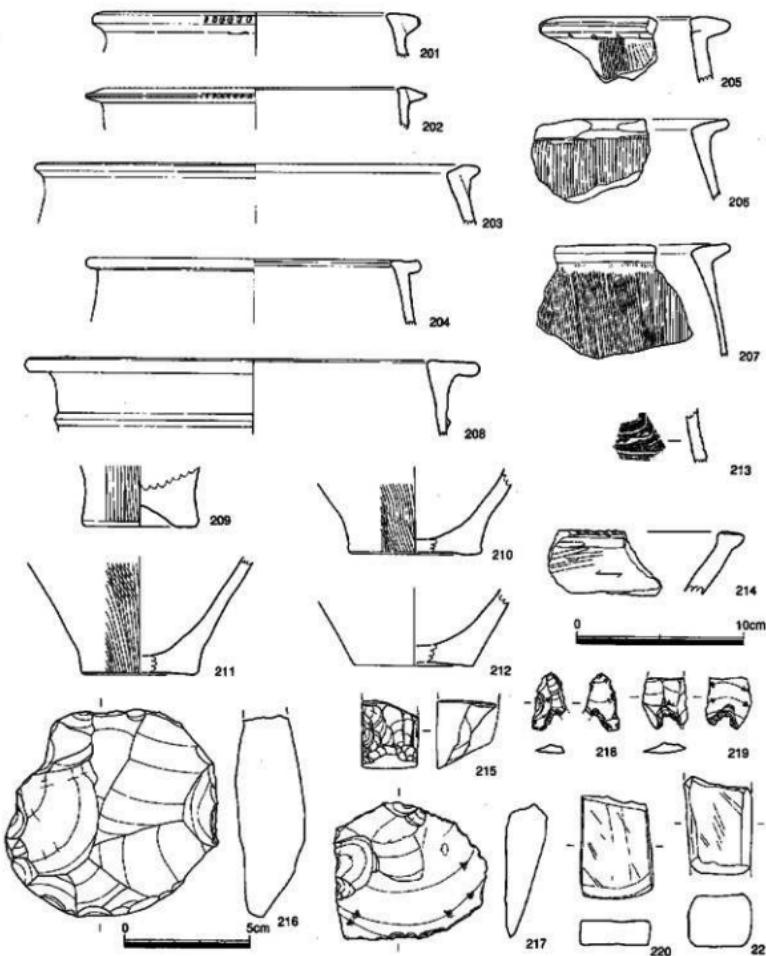
の厚い上げ底で、外面は摩滅気味だが、171には指押さえ、172には刷毛目調整がうかがわれる。172の内底には炭化物が付着する。173・175～177は壺。173は鶴先状の口縁部で、頸部外面にはヘラ研磨を行う。胎土には砂粒が多い。175は肩部片で、二枚貝腹縁による羽状文の下に2条の沈線を巡らせ、その下に六重の円弧文を施す。内外面ともヘラ研磨を行い、胎土、焼きとも良好である。176・177は壺の底部。176は厚い上げ底で、外面には指押さえが残る。177は平底で、外面は丹塗り。精良な胎土を用いる。178は高杯の脚握片。外面はヘラ研磨で丹塗り。179は厚手の器台。外面は指押さえの後粗い刷毛目調整を行う。174は繩文土器。キャリバー形深鉢の口縁部片で、二条の四線の上部に斜め方向の爪による連続文を施す。180は外面をヘラ研磨で仕上げた壺の破片を、打ち欠いて利用した土製円盤。径4.3cm前後、厚さ1cm前後。181は頁岩製の石包丁片。紐かけ穴は両面穿孔。182は扁平片刃石斧片。頁岩製。183は磨製石剣切先片。厚さ0.45cm。粘板岩製。184～186は有脚の石鐵。184は黒曜石製、185はサヌカイト製、186は剥片鐵で黒曜石製。いずれも一部が欠ける。187は砂岩製の砥石片。目は粗く、図左側面及び下面以外を砥面として利用する。172がP3、180がP5、他は覆土からの出土である。

S C 1156（第21図） T-32区。S C 1155に北側壁を切られた状態で検出した。西側大半が調査区外にかかる。検出した東側壁から径7.2m、床面積34m²前後に復元できる。壁高は30cm。覆土は茶褐色土一層である。床面には深さ19cmのピット1個だけがある。東側壁がS C 1157を切る。

出土遺物（第22図188～200） 188～191は壺。188は如意形口縁で口唇部下端に刻目を入れ、脇部には沈線を巡らす。外面は刷毛目調整。189は口縁部が内外に短く突き出るもので、口唇部にはヘラで刻目を入れる。190はくの字状口縁、191は逆し字状口縁で口縁下に三角突帯を巡らす。192～194は壺。192は鶴先状口縁をもち、頸部外面に継ぐ暗文風の研磨が見られる。193は無鶴壺で、口縁はくの字状に近い。外面はヘラ研磨で仕上げる。194は底部で、わずかに上げ底となる。外面は丁寧な縱方向のヘラ研磨を行い、黒塗りする。195は打製石斧。安山岩製で、図の右側縁部分だけが原形をとどめる。196は磨製石錐の切先片で、厚さ0.3cm。一側刃を欠くが197も磨製石錐であろう。頁岩製で厚さ0.3cm。198は安山岩製の扁平な磨石片。199・200は砂岩製の砥石。199は赤い粗目の砂岩を用いたもので、柱状形の両端を除いた面をすり窪むほどに使用している。200は目が細かく、欠損部以外の三面を使用している。すべて覆土からの出土である。

S C 1200（第21図、図版6-2） T-32区で検出した。西側が調査区外にかかる。検出した東側壁から径6.60m、床面積32m²前後に復元できる。壁高は28～30cm。覆土は茶褐色土一層である。床面には主柱穴の一部と見られるP1～P4がまわる。平面円形状で、径60～76cm、深さ61～67cmである（P4は未掘）。柱穴間はP1-140cm-P2-160cm-P3-130cm-P4となる。東南側壁下に長さ125cm、幅68cm、深さ36cmの小土坑がある。

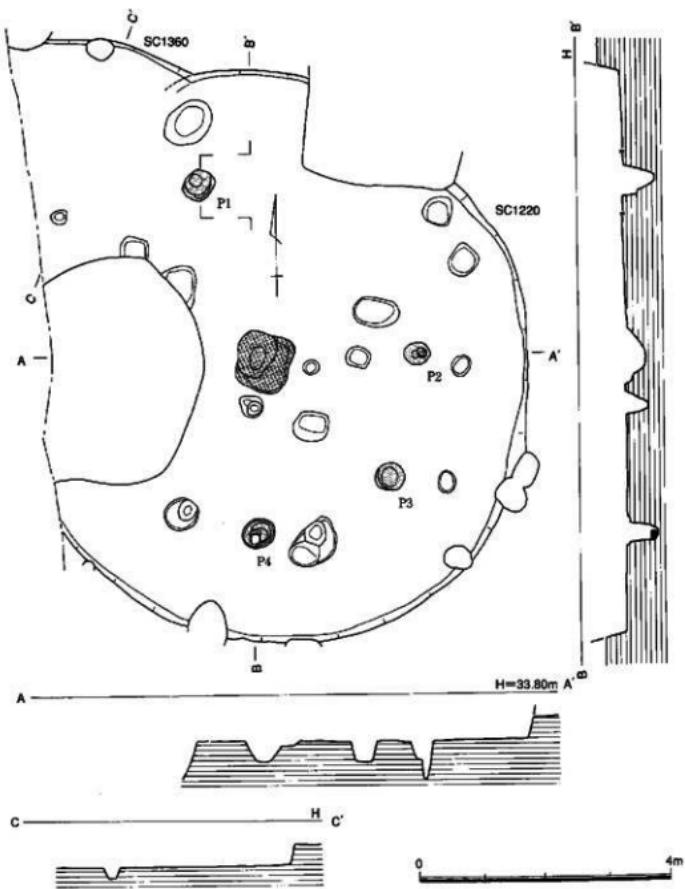
出土遺物（第23図201～221） 201～203・205は断面三角形の口縁をもつ壺である。201・202は口唇部に刻目を入れる。203は口縁が内傾し、端部が小さな平坦面を作る。205は口縁端部の外への引き出しが大きくなる。206・207はくの字状口縁の壺で、外面は刷毛目調整で仕上げる。204・208は逆し字状口縁の壺。204の口縁部は外側への引き出しが小さい。208は口縁下に三角突帯を巡らす。209～212は壺の底部。209が厚い上げ底である他は平底に近い。器表が摩滅した212以外は外面に縦刷毛目調整を行う。210～212の内底には炭化物が付着する。213・214は繩文土器。213は二条の四線の上部にヘラで文様を描く。214は深鉢で、やや肥厚した口縁上面に細い棒状工具で刻目を施す。内外面ともヘラ研磨で仕上げる。215は安山岩ホルンフェルス製の柱状片刃石斧。上面の欠損部以外はきれいに磨き上げている。216は玄武岩の剥片を加工したものである。217はサヌカイト剥片の辺縁を加工し



第23図 SC 1200出土遺物実測図 (縮尺1/2, 1/3)

たもので、スクレーバーと考えられる。218・219は黒曜石製の右脚の剥片錐。ともに一部を欠く。220・221は砂岩製の砥石。220は扁平で目が細く、221は断面方形で目がやや粗い。他に黒曜石製のつまみ型石器が出土している。203・213が床面小土坑、216がP 5、他は覆土からの出土である。

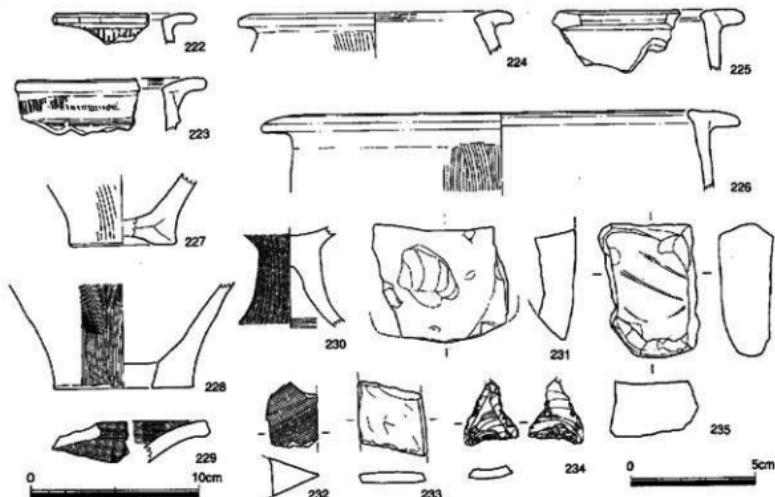
S C 1220 (第24図、図版7-1) T-31区、SC 1200の北側で検出した。西側壁が調査区外にかかり、西北側はSC 1360と重複するが先後関係は不明である。また東北をSC 1240に、西側をSK 1213 (中世土坑) に切られる。南北9.10m、東西は復元で8.6m前後をはかり、床面積は61m²前後となる。



第24図 S C1220・1360実測図（縮尺1/80）

壁高は34cm。覆土はやや砂質の茶褐色土一層である。床面中央に南北長92cm、東西幅88cm、深さ33cmの二段掘りにした方形炉を設ける。炉内覆土は焼土・炭化物が混じる。炉中心から2.5m前後外を、主柱穴のP1～P4がまわる。平面円形を呈し、径42～50cm、深さ47～57cmをはかる。P1とP2の間には主柱穴が1本あるものと考えられる。P2～P3間210cm、P3～P4間235cmをはかる。

出土遺物（第25図222～235） 222～226は逆L字状口縁の壺である。このうち223は口縁部が内傾し、口縁下にはつまみ出した突帯を巡らす。225は内外面ともナデで仕上げ、他は外面刷毛目調整、内面ナデである。227・228は壺の底部。227は上げ底、228は厚い平底で、ともに外面刷毛目調整。内底には炭化物が付着する。229は広口壺。口唇部はわずかに盛り、内外面とも丹塗りヘラ研磨を行う。

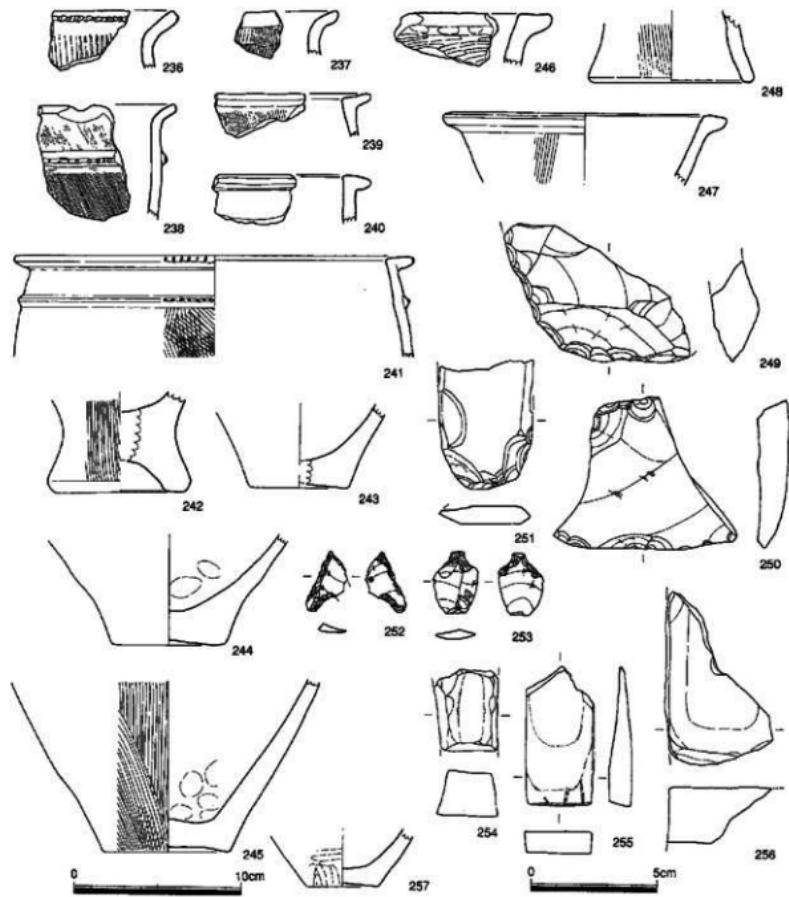


第25図 S C 1220出土遺物実割図（縮尺1/2, 1/3）

胎土、焼成ともよい。230は高杯の脚筒部片。外面は縱方向のヘラ研磨で、丹塗り。内面は横ナデ。胎土はやや粗い。231は大形鉢刃石斧の刃部片。玄武岩製。232は磨製石剣片。表面はよく研がれており、刃もシャープである。233は磨製石錐あるいは石劍の茎部片であろうか。表面の研ぎは丁寧さを欠く。頁岩製。234は凹基の石錐。先端部は少し欠ける。黒曜石製。235は底石で、図上面だけを底面として用いている。すべて覆土からの出土である。

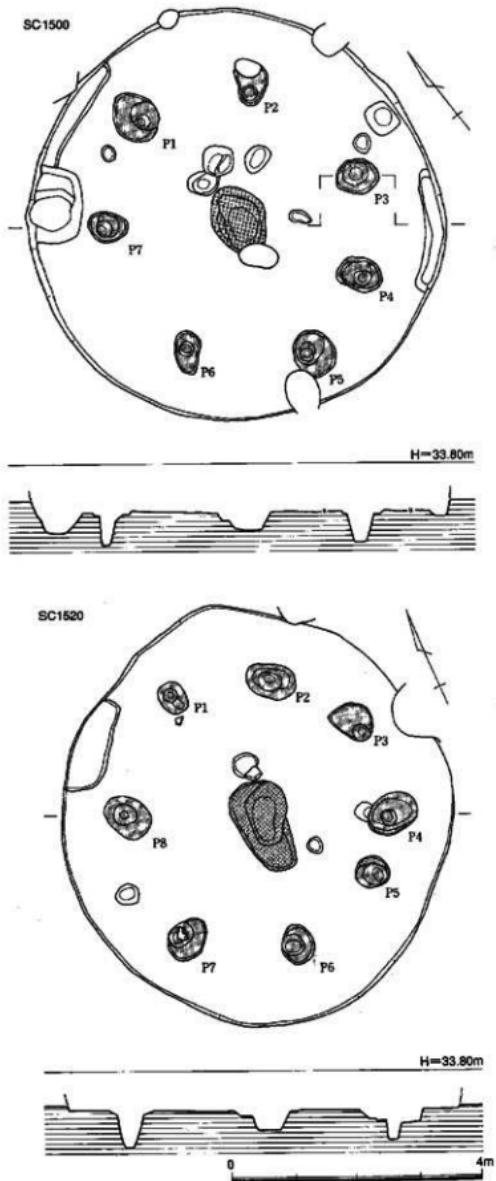
S C 1221（第21図、図版7-2） T-33区、S C 1200の南側で検出した。西側が調査区外にかかる。検出した東側壁から径9.5~10.0mに復元でき、床面積は70m²を越えると推定できる。壁高は10~16cm。覆土は茶褐色土一層である。床面には主柱穴の一部と見られるP 1~P 4がまわる。平面長方形形状で、長さ52~62cm、幅38~47cm、深さは35~47cmである。柱穴間はP 1-170cm-P 2-105cm-P 3-210cm-P 4となる。南東側壁下には長さ240cm、幅144cm、深さ34cmの二段掘りにした土坑があり、そこから南へ幅80cmの周溝がのびる。また東北隅にも長さ250cm、幅82cm、深さ10cmの周溝を設ける。

出土遺物（第26図236~256） 236~238は如意形口縁の壺である。236は口唇部下端にヘラで刻目を入れる。238は口縁下に三角突帯を巡らせ、刻目を入れる。いずれも外面は刷毛目調整を行う。239は逆L字状口縁の壺であるが、口縁部は内傾気味で、外側への張り出しあり。240・241は断面三角形の口縁をもつ壺で、口縁部はやや外側へ長くなる。241は口唇部および口縁下三角突帯の上にヘラで刻目を入れ、突帯下は刷毛目調整を行う。242~245は壺の底部。242は台形状の厚い上げ底で、外面は刷毛目調整。243・244は厚目の浅い上げ底で、244の外面はヘラ研磨を行っているようである。245も上げ底だが、胴部と余り変わらない厚さとなっている。外面は刷毛目調整を行う。246・247は壺。ともに口縁端部を短く外側に引き出す。247の頸部は直線的である。246の頸部外面と口縁部上面はヘラ研磨、口縁下面には指押さえが連続してみられる。247はナデで仕上げているが、頸部外面に



第26図 S C 1221・1360出土遺物実測図 (縮尺1/2, 1/3)

一部粗い刷毛目調整がみられる。248は薄手の器台。外面は刷毛目調整、据端部から内面はナデ調整を行う。249は玄武岩製の打製石斧。折れて、刃部付近だけが残存する。250は台形状の玄武岩剥片の側縁を加工したものである。スクレーパーの類であろう。251は石剣の茎部片か。両側縁に刃を作り出し、また下端には剥離痕がみられる。上面の研ぎは、下面に比べ丁寧さを欠く。頁岩製。252是有脚の剥片鎌。黒曜石製。253は黒曜石製のつまみ型石器。254～256は砥石である。254は赤色の粗い砂岩を用いたもので、折れた両端部を除く四面を砥面として使用する。255は粘板岩を用いた扁平な作りで、目は細かい。すべての面を利用し、研ぎで薄くなったり上端部が折れた後も使用している。256はやや粗い砂岩を用いた砥石で、残存部で利用しているのは上面だけである。246がP2、237・239がP3、236・240・241・243～245・249・253・256が南東側壁下の土坑、他は覆土から出土した。



第27図 SC1500・1520実測図（縮尺1/80）

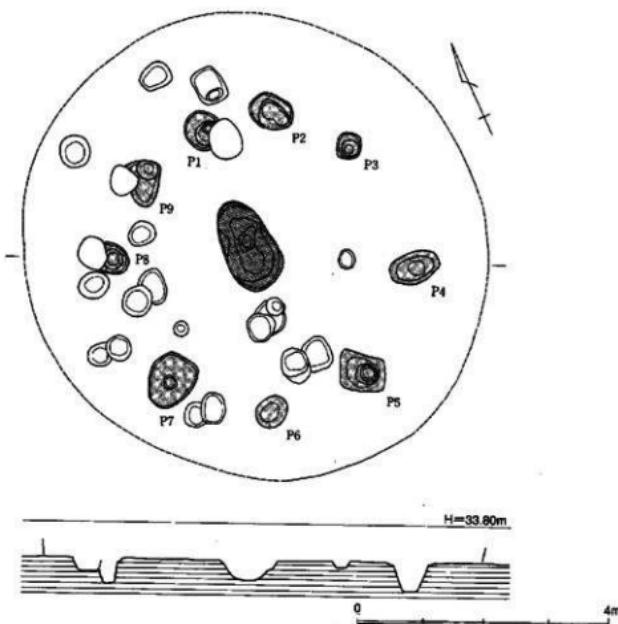
SC1360（第24図、図版7-1）

T-31区。西側の大半が調査区外にかかり、また東側はSC1220と重複しており、はっきりと確認できたのは丸みをもった北側壁の一部だけであった。壁高34cm。床面で確認できる遺構はない。SC1220と覆土が全く同じで、精査したのも間わらず先後関係は確認できなかった。

出土遺物（第26図257） 257は浅い上げ底の壺である。外面はヘラ研磨、内面はナデ調整とともに丁寧に行う。胎土には砂粒が多く、焼成良好。外底部は黒斑がある。覆土からの出土。

SC1500（第27図、図版8-1）

V-25区で検出した。径6.55~6.60m、床面積31m²前後の住居である。壁高は15cm。覆土は褐色砂質土一層である。床面中央に南北長110cm、東西幅90cm、深さ29cmの二段に掘り込む楕円形の炉を設ける。炉内覆土は2層に分かれ、厚さ10cmの下層には炭化物が少量混じる。炉中心から2.0m外を、P1~P7の7本の柱穴がまわる。平面楕円形もしくは円形で、最大規模はP1の長さ86cm、幅73cm、最小はP7の長さ64cm、幅48cmである。深さは43~58cmをはかる。柱穴間はP1-180cm-P2-215cm-P3-170cm-P4-150cm-P5-195cm-P6-230cm-P7-185cm-P1となる。西北側壁下には長さ120cm、幅74cm、深さ36cmの二段に掘られた楕円形小土坑があり、そこから幅30cm、深さ17cmの周溝が北に200cmのびる。またそれと対峙する東南側壁

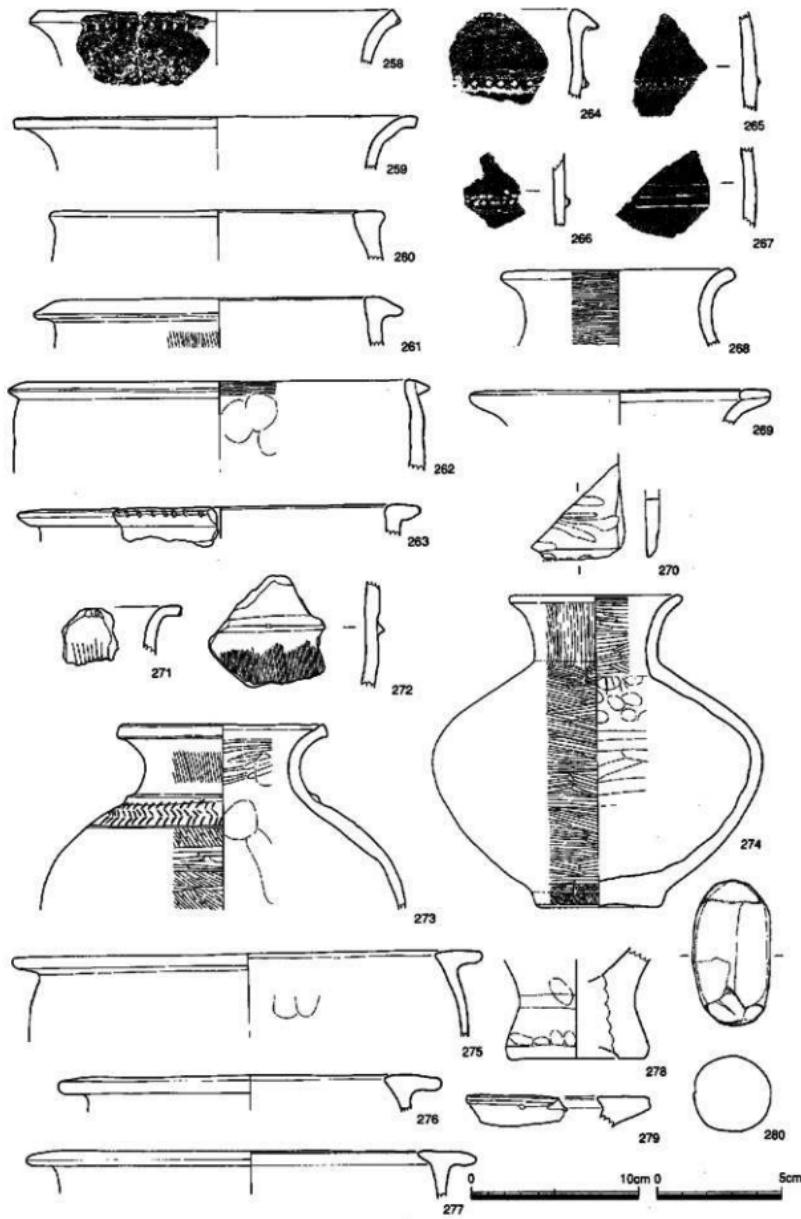


第28図 S C 2051実測図（縮尺1/80）

下にも長さ200cm、幅25cm、深さ10cmの周溝がある。主柱穴内側の床面は踏み固まっている。

出土遺物（第29図258～270） 258・259は如意形口縁の壺。258は口唇部に下端にヘラで刻目を入れる。内外面ともナデで、外面は荒い。259の胴部外面には刷毛目調整がうかがわれる。260～264は断面三角形の口縁をもつ壺。260は厚みのある口縁部で、口縁下にはヘラによる調整痕が残る。263は口縁部が外側に長くなり、口唇部にはヘラで刻目を入れる。264は口縁端部が薄く垂れ下がり気味になる。口唇部と、口縁下の三角突带上に棒状工具で刻目を入れる。261の胴部外面に刷毛目調整を行う他は、いずれも外面横ナデ、内面ナデである。265～267は壺の胴部片。265・266は刻目三角突帯を巡らすもの、267は三条の弦線を巡らすものである。267の外面にだけ刷毛目調整がみられる。268・269は壺。268は口縁部が外反し端部を丸くおさめるもの。内外面ともヘラ研磨を行い、外面は黒塗り。口縁部に初圧痕らしきものがある。269は鋤先状口縁を作る。残存部は横ナデである。270は扁平片刃石斧である。側面の研ぎは難で、また上面には剥離痕がある。安山岩ホルンフェルス製。264は炉、262はP 2、268はP 5、他は覆土からの出土である。

S C 1520（第27図、図版8-2） W-26区で検出した。南北6.70m、東西6.3m、床面積33m²前後の南北にふくらむ住居である。壁高は2～3cmとかろうじて残った状態である。覆土は暗褐色砂質土一層。床面中央に南北長152cm、東西幅76cm、深さ32cmの二段に掘り込む梢円形状の炉を設ける。炉内覆土には炭化物が少量混じる。炉中心から2.0m外を、P 1～P 8の8本の主柱穴がまわる。平面梢円形もしくは円形で、最大規模はP 1の長さ82cm、幅60cm、最小はP 1の長さ40cm、幅31cmであ



第29圖 SC 1500・1520・2051出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）

る。深さは28~68cmとばらつきがある。柱穴間はP 1 - 160cm - P 2 - 170cm - P 3 - 140cm - P 4 - 100cm - P 5 - 180cm - P 6 - 180cm - P 7 - 215cm - P 8 - 210cm - P 1となる。西北側壁下には長さ210cm、幅50cm、深さ2cmの周溝がある。床面は踏み固まる。

出土遺物（第29図271~274） 271は如意形口縁の壺。口唇部下端にヘラで刻目を入れる。外面は縱刷毛目調整、内面は横ナデ。272は壺の胴部で、比較的シャープな三角突帯を巡らす。突帯下は細かい縦の刷毛目調整、内面には指押さえがみられる。273・274は壺。273は丸く張った胴部から頸部が緩やかに立ち上がり、口縁が外反して端部を折り返す。肩部には三角突帯が巡り、その下に三段にわたり二枚貝の腹縁で羽状文を施し、さらにその下に沈線を巡らす。胴部外面と頸部内面はヘラ研磨、頸部外面は刷毛目調整、胴部内面はナデを行う。砂粒の混じった粗い胎土で、焼成良好、外面が赤みをおびた黄褐色、内面は黒色となる。274は扁球形の胴部から口頸部が外反し、端部を丸くおさめる。底部は厚く、わずかに上げ底となる。外面は頸部が縱方向、胴部が横方向のヘラ研磨を行う。底部近くには細い刷毛目調整がある。内面は口頸部が横方向のヘラ研磨、肩部には指押さえがみられ、それ以下はヘラによる強いナデで器面に段がつく。砂粒の混じる粗い胎土で、焼成良好。外面は黒塗りの可能性がある。復元口径10.4cm、器高18.5cm。272は炉、271はP 3、274はP 7、273は覆土からの出土である。

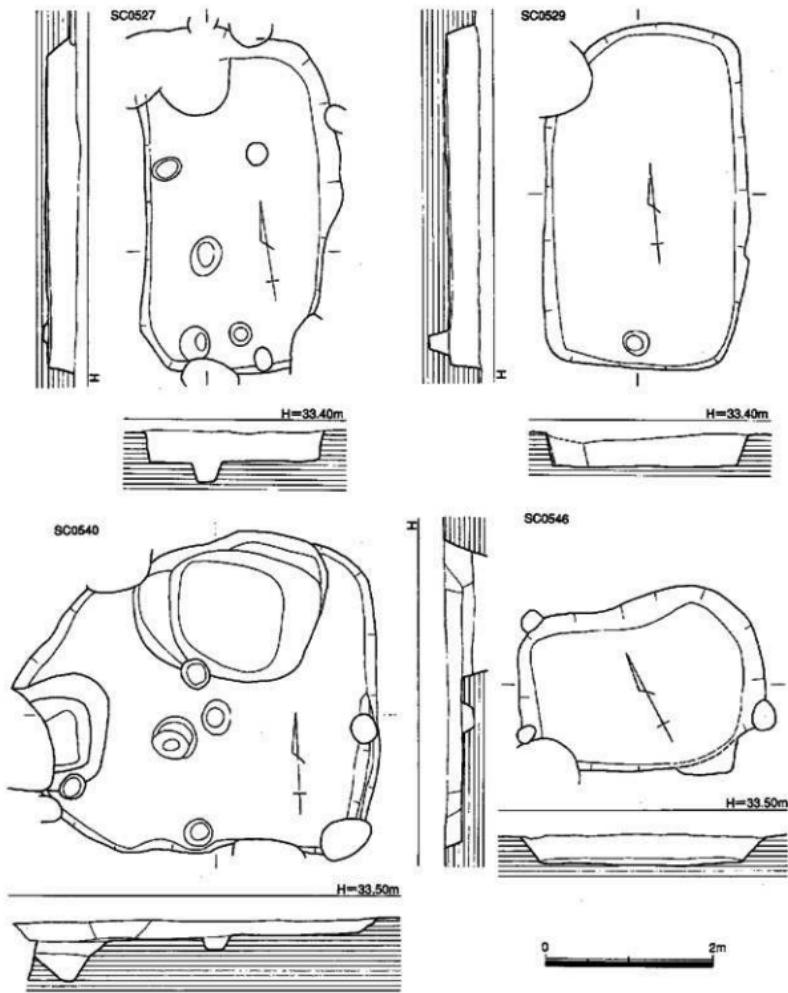
S C 2051（第28図、図版9-1） V-26区で検出した。削平され、側壁は南側の一部痕跡が残るだけである。これと炉・主柱穴の関係をもとに平面規模を復元すると、径7.00m、床面積38m²前後となる。床面中央に南北長148cm、東西幅82cm、深さ32cmの二段に掘り込む楕円形の炉を設ける。さらにその底面に深さ9cmのピットを掘り込んでいる。炉内覆土には炭化物が少量混じるが、壁面に火を受けた痕跡はない。炉中心から2.0~2.50m外を、P 1~P 9の9本の主柱穴がまわる。平面椭円形もしくは円形で、最大規模はP 7の長さ88cm、幅74cm、最小はP 3の長さ42cm、幅38cmである。深さは36~58cmをはかる。柱穴間はP 1 - 105cm - P 2 - 145cm - P 3 - 220cm - P 4 - 185cm - P 5 - 175cm - P 6 - 165cm - P 7 - 215cm - P 8 - 155cm - P 9 - 115cm - P 1となる。

出土遺物（第29図275~280） 275~277は逆L字状口縁の壺である。いずれも口縁部の外側への張り出しが大きく、また277は内側への張り出しも強い。275の外面は刷毛目調整の後、横ナデを行っている。278は壺の底部。台形状の厚い上げ底で、外面には指押さえの痕が残る。胎土には砂粒が多い。279は壺あるいは高杯の口縁部。先端状で、口唇部はくぼむ。残存部は横ナデ。280は花崗岩製の蓋石。長さ5.8cm、径3cm前後。両端部には使用的の痕跡が明らかである。276・279が炉、278がP 5、他は主柱穴以外のピットからの出土である。

(2) 方形住居

S C 0527（第30図、図版9-2） AA-24区。南北に長軸をとる長さ4.00m、幅2.37m、床面積7m²前後の隅丸長方形住居である。壁高は45cm。床面西側壁寄りに径25~50cm、深さ5~25cmの円形ピットがある。西北側をS K537、S K543上坑に切られる。

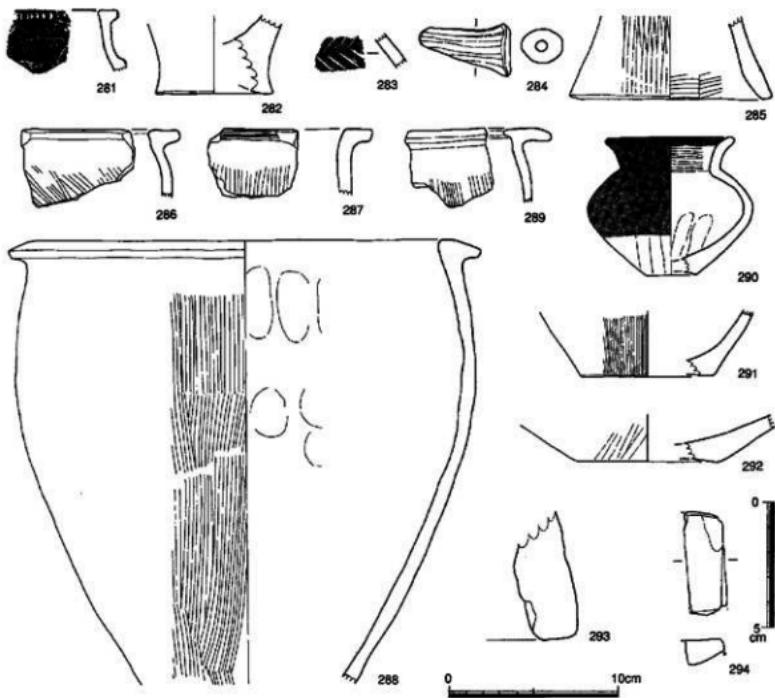
出土遺物（第31図281~285） 281は断面三角形の口縁をもつ壺。口唇部と口縁下に巡らす突帯上にヘラで刻目を入れる。内面には上位には刷毛目調整を行う。282は壺の底部。厚手で上げ底となる。外面はナデで仕上げる。内底には炭化物が付着する。283は壺。肩部にヘラで羽状文を施す。284は注口土器の本体からはずれた注口部分。注口径は付け根で0.7cm、先端で0.5cm。ヘラ研磨で仕上げている。胎土には砂粒が多く混じり、焼成良好、淡赤褐色を呈する。285は薄手の器台。脚端部はくぼむ。外面および内面下端は刷毛目調整を行う。すべて覆土からの出土である。



第30図 S C0527・0529・0540・0546実測図 (縮尺1/60)

S C0529 (第30図、図版10-1) Z-24区。南北に長軸をとる長さ4.12m、幅2.45m、床面積9m²前後の隅丸長方形住居である。壁高は40cm。床面南側壁下に径32cm、深さ25cmのピットがある。

出土遺物 (第31図286~294) 288は断面三角形の口縁をもつ甕。外側は刷毛目調整、内面は指押さえとナデで仕上げる。286・287・289は逆し字状口縁の甕である。286と287の口縁部は外への張り出しが小さく、289は内外とも張り出す。外面はいすれも刷毛目調整、内面は287がヘラによる横ナデ



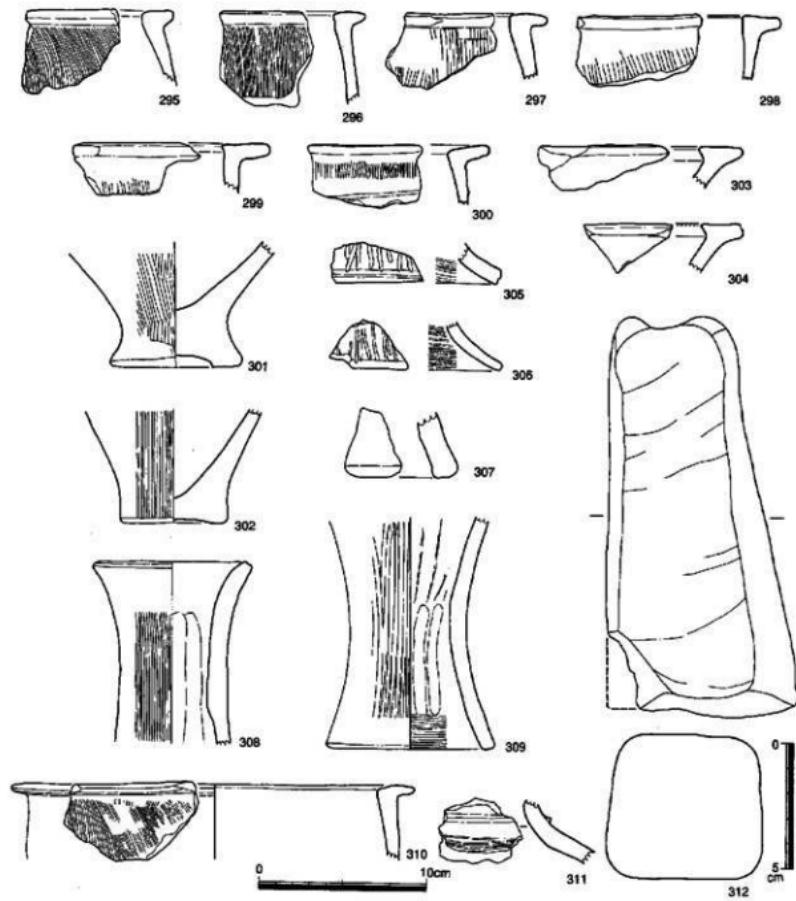
第31図 S C 0527・0529出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）

となる。290は小形壺。中位に張りがある胴部から口頸部が外反し、端部を丸くおさめる。底部は浅い上げ底。外面ヘラ研磨で、頸部が継の暗文風、胴部上位が横方向、胴部下位がやや幅広の縦方向となる。内面は口頸部が横方向のヘラ研磨、胴部はナデで仕上げる。外面丹塗り、胎土には砂粒が多く混じる。復元口径7.6cm、器高8.2cm。291・292は壺の底部。291はわずかに上げ底で、外面は刷毛目調整の後ナデ。292も上げ底で、外面はヘラ研磨、内面はナデだがヘラの痕跡も残る。砂粒を多く含んだ粗い胎土で、内外面とも黒色を呈する。293は厚手の器台。ナデを行うが、くびれ付近にはタタキのような痕跡もある。294は扁平片刃石斧の頭部片である。左側面は欠ける。上面には横方向の研ぎ痕が明瞭である。貢岩製。すべて覆土からの出土である。

S C 0539 Z-23区。南側をS C 0538とS C 0540に切られ、北側から東側は調査区外にかかる。遺構確認を行っただけで未掘だが、東西に長軸をとる長方形住居と考えられる。

S C 0540（第30図、図版10-2）Z-24区。東西に長軸をとる現存長4.30m、幅3.60m前後の不正長方形住居で、西側壁が丸みを帯びる。壁高は20cm。床面中央やや西南寄りに径53cm、深さ46cmのP1があり、その周囲に径30~34cm、深さ13~16cmの小ピット3個がある。北側でS K0541、西側でS K0542を切り、S K0536に切られる。

出土遺物（第32図295~309）295・296は断面三角形の口縁をもつ甕。ともに外面は刷毛目調整、



第32図 S C 0540・0546出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）

内面は指押さえとナデで仕上げる。297～300は逆L字状口縁の壺である。297・298は口縁部の外側への張り出しが小さい。299の口縁部は外側へ長く延び、また内側へも張り出す。300は口縁下に本体とは違う粘土を用いた低い突起を巡らす。いずれも外面は刷毛目調整、内面は横ナデを行う。これまで述べた壺が暗い褐色系の色調をとるのに対し、300だけが明赤褐色となる。301・302は壺の底部。301は台形状で、厚い上げ底となる。302はわずかに上げ底で、厚みは少ない。ともに外面は刷毛目調整、302の内面は黒色を呈する。303・304は鷺先状口縁の壺。303の口唇部が丸くおさめるのに対し、304は丸くぼみとなる。ともに残存部は横ナデ。305・306は高杯の脚裾部。305の端部は中くぼみ、306は丸くおさめる。残存部は内外面ともヘラ研磨を行う。307は厚手の器台。指ナデで仕上げる。胎土

は細かいが、しまりに欠ける。308・309は床面から15cm浮きならんで出土した薄手の器台。ともに外面は刷毛目調整。内面は308が横ナデを行うが、しばり痕は残る。309は裾に刷毛目調整、その後全体にわたり縦の指押さえを丁寧に行い、しばり痕はほとんどわからない。すべて覆土出土。

S C 0546 (第30図、図版11-1) X-24区。ほぼ東西に長軸をとる長さ2.99m、幅2.05m、床面積5m²前後の隅丸長方形住居である。壁高は36cm。覆土は黒褐色粘質土を主とする。床面に造構はないが、中央付近に土器片と礫がかたまっていた。

出土遺物 (第32図310~312) 310は逆L字状口縁の壺である。口縁部は薄い作りとなる。外面刷毛目調整、内面横ナデ。311は壺。肩部に三角突帯を巡らす。外面は横方向のヘラ研磨、内面は横ナデ。胎土には砂粒が多い。312は方柱状の土製品である。底面幅8cm前後、上面幅4.5cm前後、高さ15.7cm。上面はU字状にくぼむ。器表は指押さえ、ナデで仕上げる。胎土は砂粒が混じるもの細かい。焼成はややあまく、黄褐色を呈する。すべて覆土出土。

S C 0547 (第33図、図版11-2) Y-24区。南北に長軸をとる隅丸長方形住居で、北側をS X0200区画溝に、西側をD 0493土壤墓、南側をK 0116甕棺墓に切られる。残存長3.75m、幅2.72m。床面積は11m²を越えると考えられる。壁高は17cm。床面中央北寄りに径64cm、深さ10cmの円形炉があり、中には焼土が堆積する。それを囲むようにして径20~45cm、深さ10~25cmの小ピット5個と径55cm前後、深さ16~23cmの一回り大きいピットがある。さらに東側壁下に幅40cm、深さ13cmの小土坑がある。北側区画溝が形成される以前の住居である。

出土遺物 (第34図313・314) 313は逆L字状口縁の壺である。口縁部の外への張り出しあは小さく、また内傾する。外面は口縁直下から縦の刷毛目調整を行う。内面はナデ調整。床面南側からの出土。314は壺の底部。厚みのある平底で、外面は摩滅しているが、ヘラ磨きと丹塗りの痕跡がみられる。内面はナデ。内外底両方に黒斑がある。砂粒が多く混じる胎土で、淡赤褐色を呈する。覆土出土。

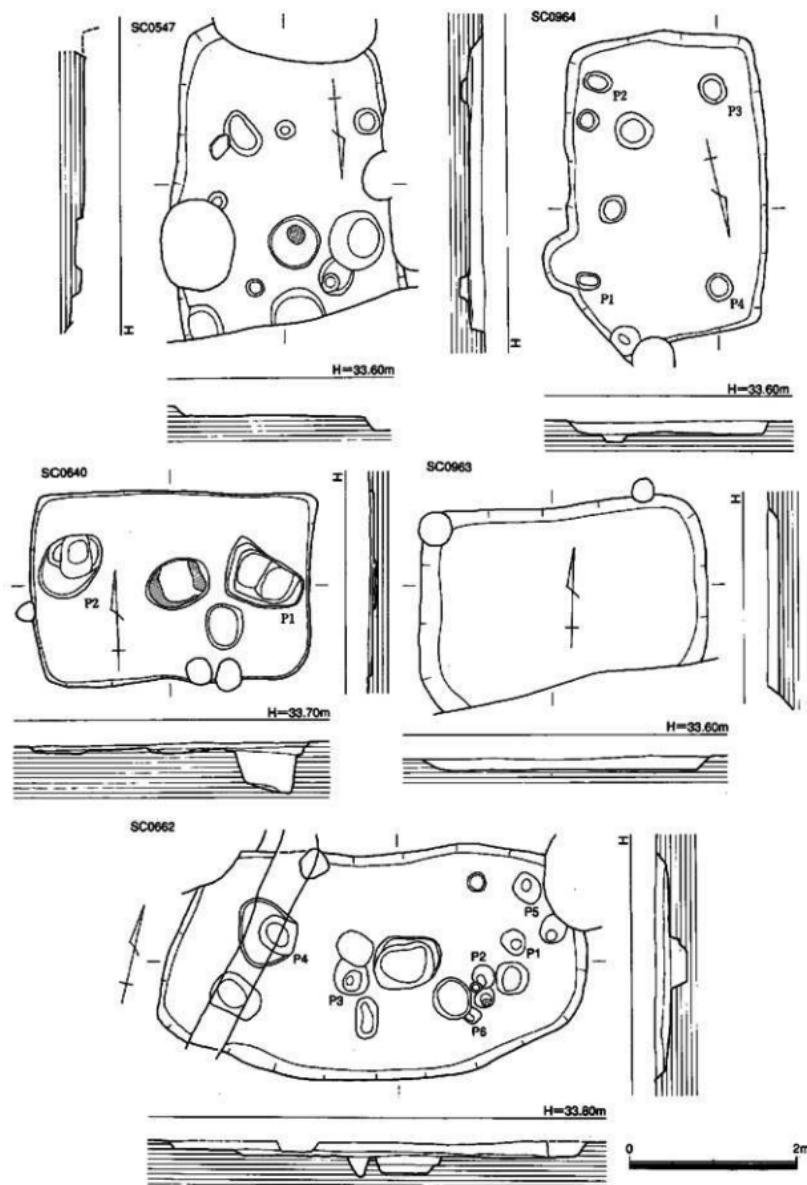
S C 0640 (第33図、図版12-1) V-29区。東西に長軸をとる長さ3.30m、幅2.25m、床面積7m²前後の長方形住居である。壁高は5cm。覆土は暗褐色土。床面中央には長さ78cm、幅59cm、深さ7cmの横円形炉を設ける。炉壁には焼土がわまる。炉を挟んで東西に2柱穴を設ける。P 1はS B0211の柱穴と重複するが、東側の底が相当し、深さ53cm。P 2は長さ65cm前後、深さ40cm。P 1-P 2間は240cmとなる。覆土から壺の細片3点が出土しただけである。

S C 0662 (第33図、図版12-2) U-33区。南北に長軸をとる長さ5.20m、幅2.70m、床面積12m²前後の長方形住居である。東側壁は丸みを帯びる。覆土は黒褐色砂質土を主とする。壁高は45cm。床面中央に長さ70cm、幅60cm、深さ21cmの二段に掘り込んだ炉を設ける。炉内覆土は黒色土。床面には14個のピットがあるが、炉より深く掘られたものにP 1~P 6の番号を振った。P 4が長径80cm、深さ24cmで、他は径20~45cm、深さ32~42cmである。

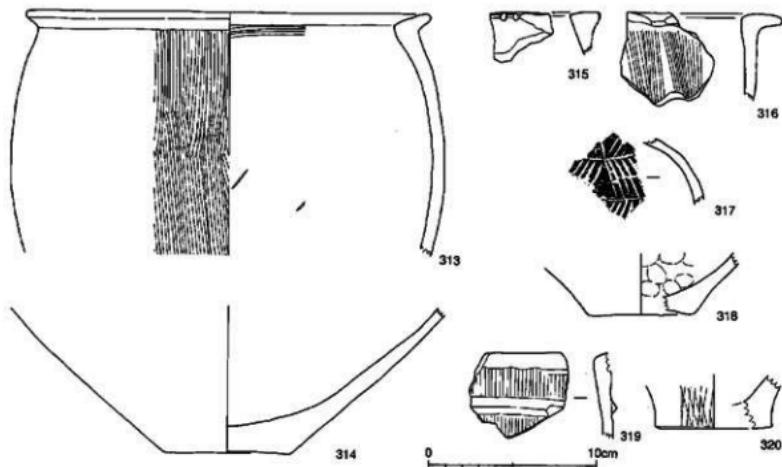
出土遺物 (第34図315~318) 315は断面三角形の口縁をもつ壺。端部には棒状工具で刻目を入れる。316は逆L字状口縁の壺。外面は口縁直下から縦の刷毛目調整を行う。内面は指ナデ。317は壺。肩部に二条の沈線を入れ、その上下および間にヘラで羽状の様な文様を施す。外面はヘラ研磨。318は壺の底部。わずかに上げ底。外面は横ナデで仕上げ、内面には指頭痕がある。すべて覆土からの出土である。

S C 0963 (第33図) AA-26区。南側を第5号古墳に切られる。東西に長軸をとる長さ3.42m、残存幅2.38m、床面積6m²前後の隅丸長方形住居である。壁高は16cm。覆土は上面が褐色土、下層の厚さ10cmが黒褐色粘質土となる。床面に造構はない。

出土遺物 (第34図319・320) 319は口縁部を欠くが逆L字状口縁の壺であろう。口縁下に三角突



第33図 S C0547・0640・0662・0963・0964実測図（縮尺1/60）



第34図 S C 0547・0662・0963出土遺物実測図（縮尺1/3）

帶を巡らす。外面は継の刷毛目調整、内面は横ナデ。淡赤褐色を呈する。320は壺の底部。平底で、外面には粗い刷毛目調整を行う。ともに覆土から出土した。

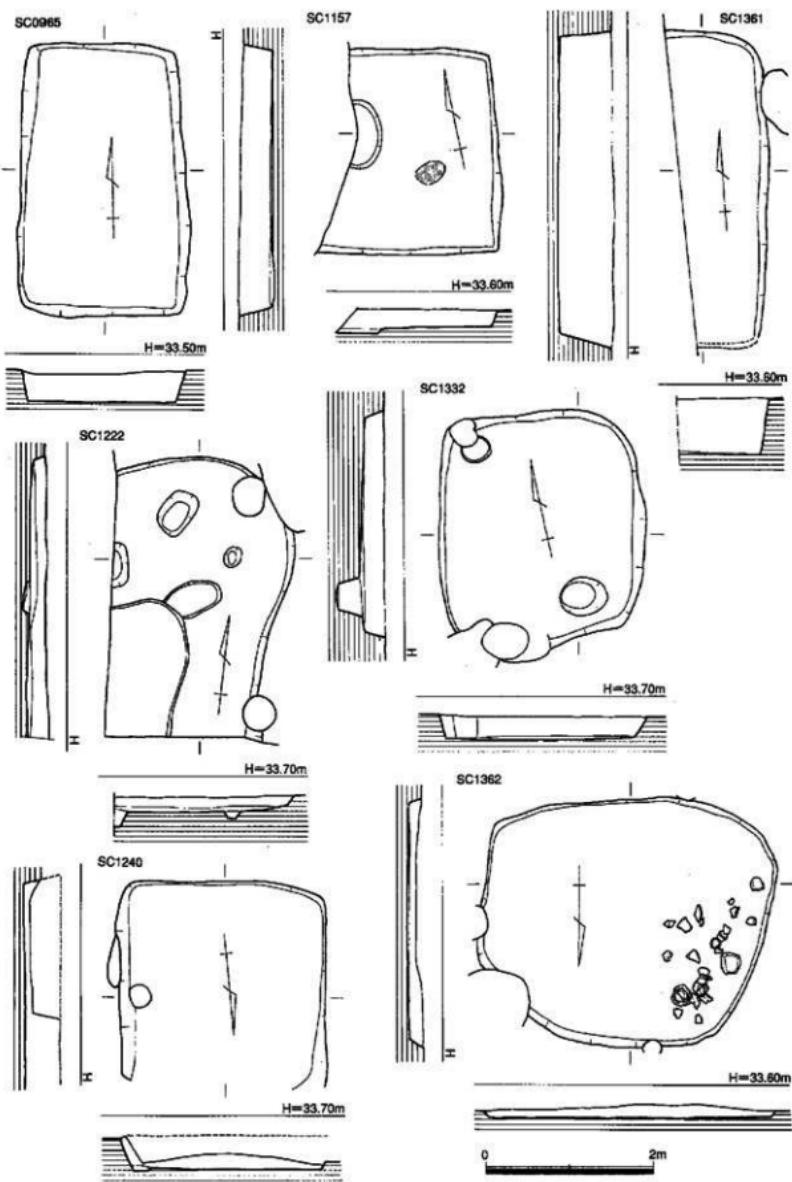
S C 0964（第33図、図版13-1） AA-26区。ほぼ南北に長軸をとる長さ3.70m、幅2.40m、床面積7m²前後の長方形住居である。壁高は19cm。床面各隅にあるP 1～P 4の4個が主柱穴で、径32～38cm、深さ13～18cm。柱穴間はP 1-235cm-P 2-140cm-P 3-235cm-P 4-155cm-P 1となる。他に深さ11～15cmのピット3個がある。出土遺物はない。

S C 0965（第35図、図版13-2） AA-25区。南北に長軸をとる長さ3.23m、幅2.00m、床面積5m²前後の長方形住居である。壁高は43cm。覆土は上部20cmが褐色粘質土、下部20cmが暗褐色粘質土となる。床面に遺構はない。

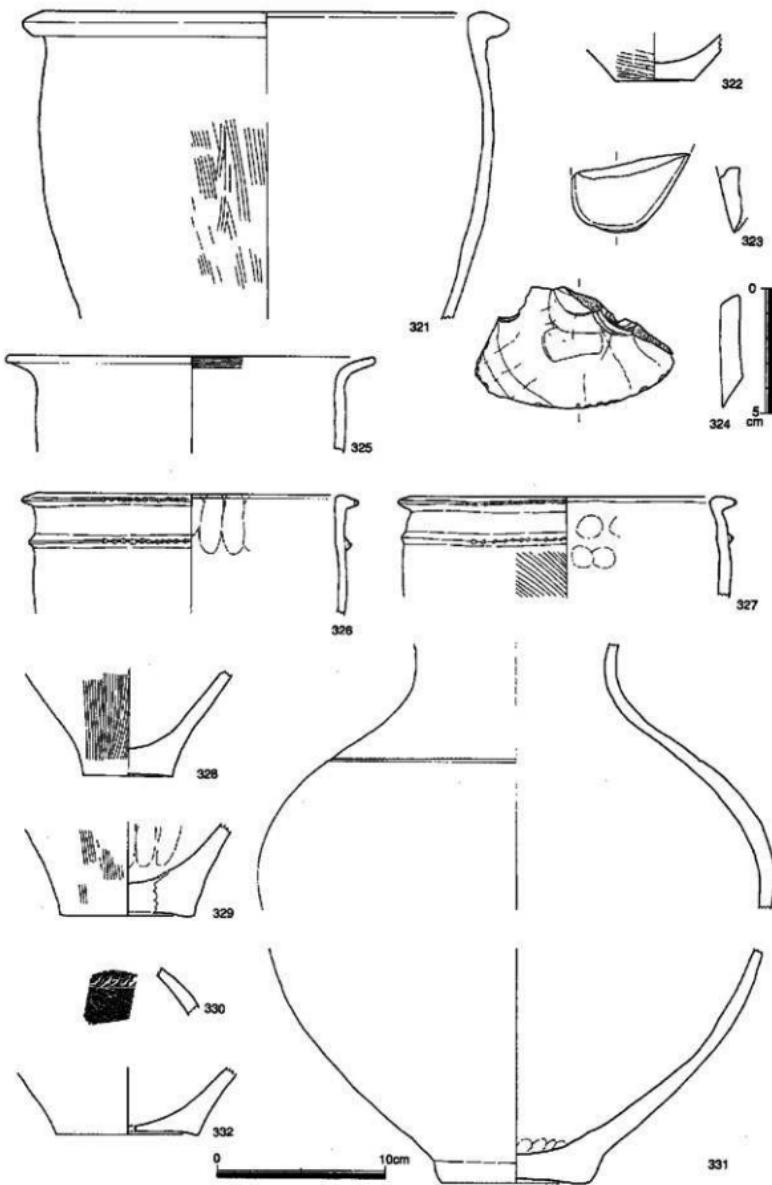
出土遺物（第36図321・322） 321は断面三角形の口縁をもつ壺。上端に厚い三角突帯を貼り付け、口縁部を形成した壺が明瞭である。外面は刷毛目調整の後横ナデを行うが、器面は荒い。内面はナデ。322は壺の底部。わずかに上げ底で、外面はヘラ研磨を行う。ともに覆土からの出土。

S C 1157（第35図、図版14-1） T-30区。S C 1156に西側を切られるが、ほぼ東西に長軸をとる長方形住居と考えられる。南北幅2.24m、壁高20cm。覆土は暗灰褐色土。床面中央に南北幅79cm、深さ6cmの炉があり、中は焼土と炭化物がつまり、また壁面は焼ける。炉西南側床面にも25×35cmの梢円形の範囲に焼土と炭化物がみられる。床面から壺・壺などが出土した。

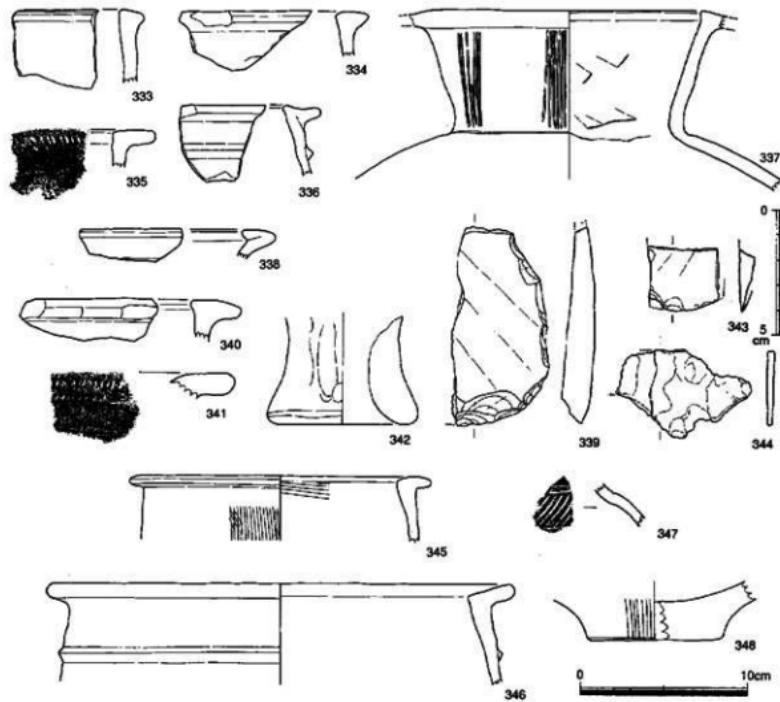
出土遺物（第36図323～332） 325は如意形口縁の壺。薄手の作りで、外面には荒いタッチで刷毛目調整を行う。326・327は断面三角形の口縁部と口縁下に三角突帯を巡らす壺。口縁端部および突帯上には326がヘラ、327が棒状工具で刻目を施す。327の突帯下が刷毛目調整、他は横ナデ、ナデを行う。328・329は壺の底部。ともに浅い上げ底で、外面は刷毛目調整を行ない、内面には炭化物が付着する。330は羽状文を二枚貝腹縁で施した壺。外面はヘラ研磨。331は壺。胴部最大径を上位にとり、肩部には一条の沈線を巡らす。底部は厚めで、上げ底。摩滅が著しく器面調整はほとんどわからない。胎土に



第35図 S C0965・1157・1222・1240・1332・1361・1362実測図（縮尺1/60）



第36圖 S C0965 · 1157出土遺物實測圖 (總尺1/2, 1/3)



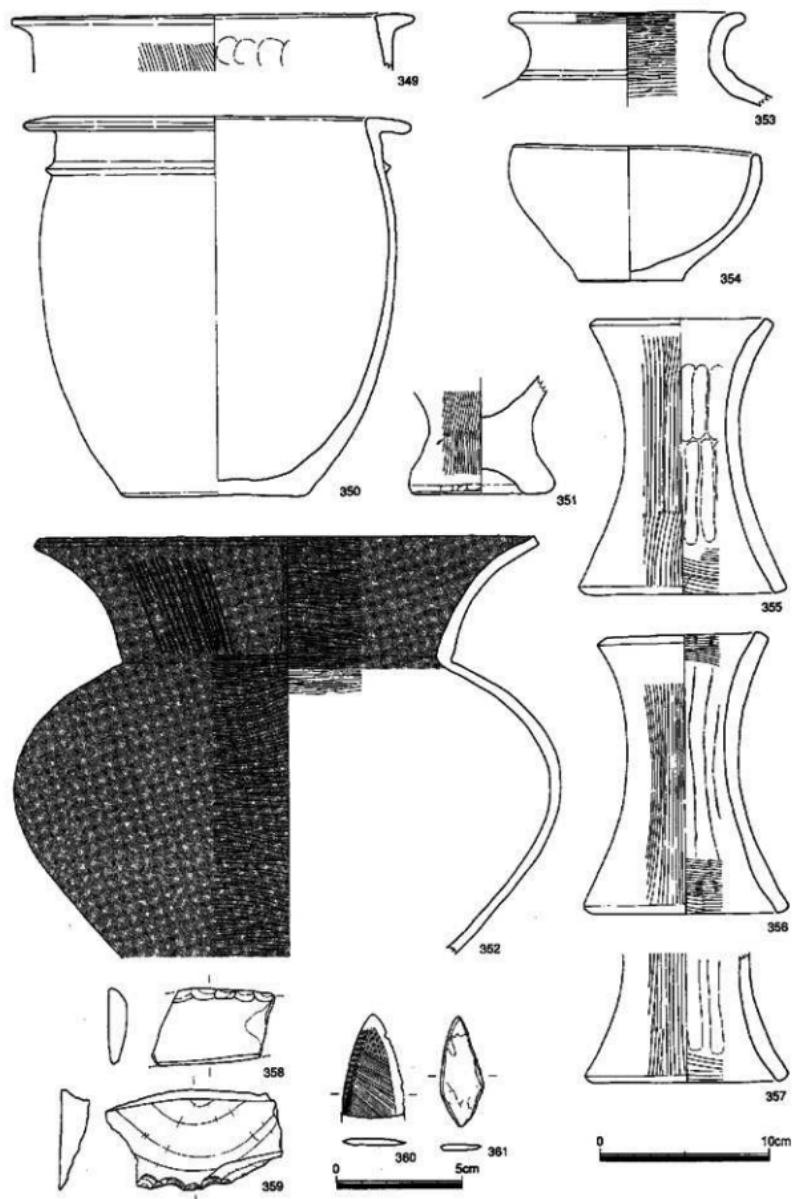
第37図 S C 1222・1240・1332出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）

は砂粒が多い。332は壺の底部。上げ底で、外面はヘラによる横ナデ。内面は黒色となる。323は壺製石斧の上面が剥げたものを再加工したものか。玄武岩製。324は古銅輝石安山岩剥片の側縁を加工したスクレーパー。327・328・331は床面から、他は覆上からの出土である。

S C 1222（第35図） T-33区。調査区西南隅で東と西側壁の一部だけを検出した。北東隅側壁は丸くなる。確認できた南北長は3.40m。壁高は24cm。覆土は褐色土に灰黒色土が混じる。床面には長さ55cm前後、深さ10~22cmの楕円形ピットが3個ある。床面中央はさらに5cm低くなる。

出土遺物（第37図333~339） 333・334は断面三角形の口縁をもつ壺。333の外面が刷毛目調整、他は横ナデ。335・336は逆L字状口縁の壺。335の口唇部にはヘラで刻目を入れる。336は口縁下に比較的シャープな三角突帯を巡らす。ともに残存部は横ナデ。337・338は壺。337は長めの頸部が直線的に外傾し鋤先状口縁を作る。頸部外面には横ナデの後、7~8本単位のヘラ暗文を縱に施す。残存部からすれば頸部の9ヶ所に施したことになる。頸部内面は刷毛目調整の後横ナデ。胴部外面はヘラ研磨。338は頸部が外反するもので、内外面とも横ナデ。339は側縁を加工した安山岩製の石器。すべて覆上からの出土である。

S C 1240（第35図） T-31区。南北に長軸をとる長さ4.00m、幅2.45m、床面積8m²前後の長方形住居である。壁高は40cm。床面に遺構はない。S C 1220を切る。



第38圖 S C1362出土遺物實測圖 (縮尺1/2, 1/3)

出土遺物（第37図340～344） 340・341は逆L字状口縁の甕。341の口唇部上端にはヘラで刻目を入れる。342は厚手の器台。外面は縱方向の指押さえで仕上げる。胎土は比較的細かい。343は扁平片刃石斧の破片。安山岩製か。344は鉄器。刃子の茎部部分とも考えられる。すべて覆土からの出土。

S C 1332（第35図、図版14-2） U-32区。ほぼ南北に長軸をとる長さ2.70m、幅2.46m、床面積6 m²前後の隅丸長方形住居である。壁高は28cm。覆土は暗褐色土に黄色粘土ブロックが混じる。床面西北隅と向かいあう東南隅に深さ35～56cm、深さ10～30cmのビットがある。

出土遺物（第37図345～348） 345・346は逆L字状口縁の甕。345の口縁部は外側への張り出しが小さい。346はわずかに内傾し、口縁下には三角突帯を巡らす。345の外面は刷毛目調整、内面横ナデ、346は摩滅するが、横ナデと思われる。347は有軸羽状文をヘラで描いた甕。上部の沈線は二条になる。外面ヘラ研磨で、丹塗りの可能性がある。348は甕の底部。厚い平底で、外面は刷毛目調整の後、横ナデを行う。すべて覆土からの出土である。

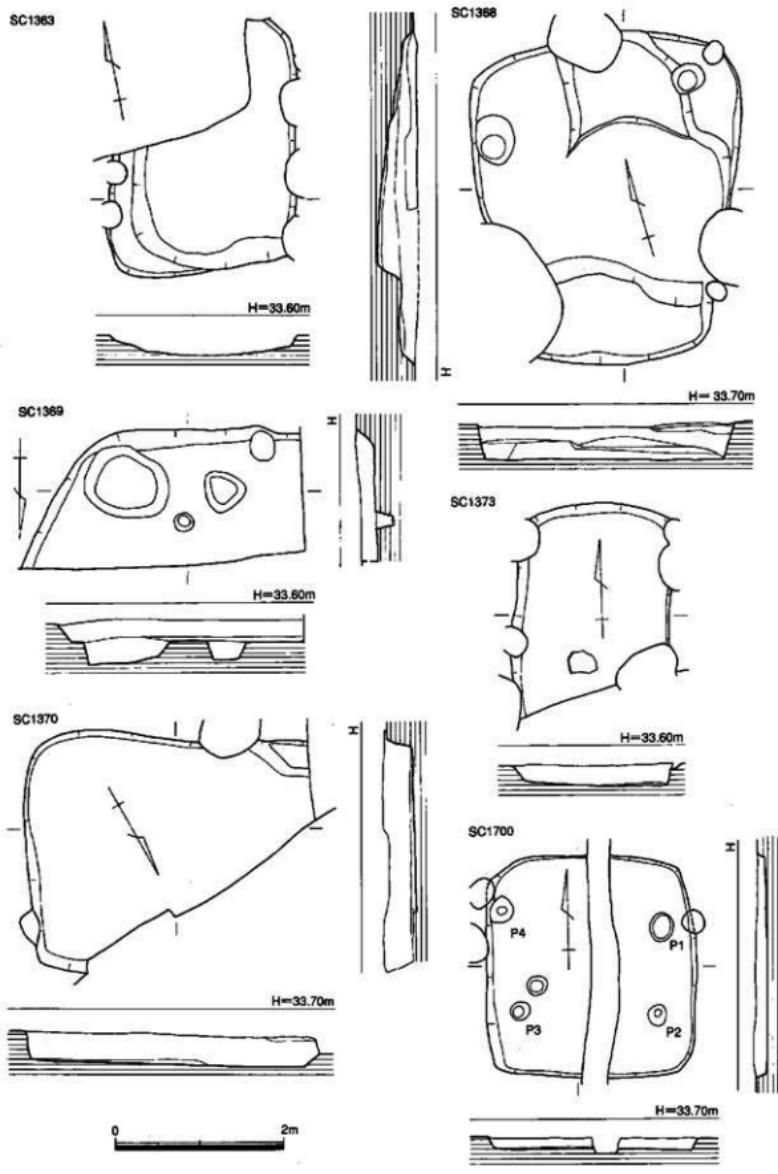
S C 1361（第35図） T-31区。西側が調査区外にかかる。南北長3.86mで、ほぼ南北に長軸をとる長方形住居と想定される。壁高は70cm。床面に遺構はない。前期の甕、甕の細片、黒曜石片などが少量出土した。実測したものはない。

S C 1362（第35図、図版15-1） T-29区。ほぼ東西に長軸をとる長さ3.45m、幅3.00m、床面積9 m²前後の不整方形の住居である。壁高は18cm。覆土は灰褐色土。床面に遺構はない。床面西北側から甕、器台などがまとまって出土した。S C 1155、S C 1363を切る。

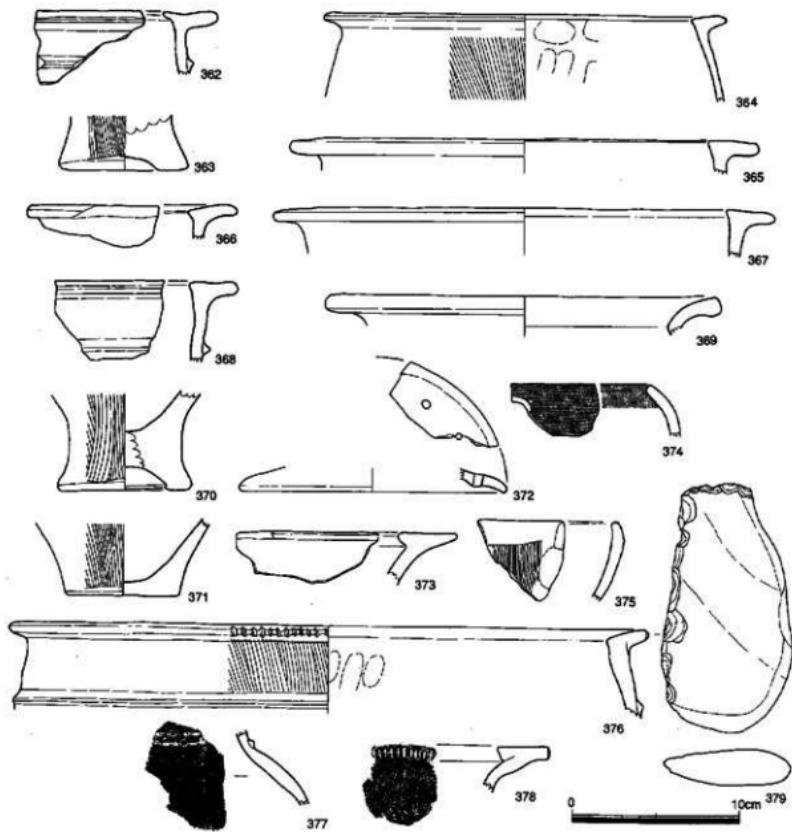
出土遺物（第38図349～361） 349は逆L字状口縁の甕。外面は刷毛目調整、内面は横ナデで指押さえの痕が残る。350は底部の広い樽形の甕。口縁部は逆L字状で口縁下には比較的シャープな三角突帯を巡らす。外面は口縁部から突帯下まで横ナデ、それ以下は板状工具による縱方向のナデ、また内面もほとんど板状工具のナデで仕上げる。胎土には砂粒が混じり、焼成良好、淡赤褐色を呈する。口縁部上面から胴部中位近くまでの黒斑がある。口径23.0cm、器高22.6cm。351は甕の底部。台形状の厚い上げ底となる。352は広口甕。扁球形の胴部から口頸部が大きく開く。口縁端部は中くぼみとなる。外面は胴部が横方向のヘラ研磨、口頸部が横ナデの後15～16本単位のヘラ暗文を縱に施す。残存部からすれば頭部の8ヶ所に施したことになる。内面は口頸部直下まで横のヘラ研磨、それ以下は丁寧な横ナデをおこなう。外面から内面口頸部直下まで丹塗りする。精良な胎土で、焼成良好。353は口頸部が外反し端部を丸くおさめる甕。肩部には作り出しの段がつく。残存部の大半はヘラ研磨で仕上げる。354は鉢。口縁は直立気味で、端部は丸くおさめる。内外面とも横ナデを行う。胎土は細かいが、砂粒が混じる。焼成はややあまく、器表は摩滅気味である。口径14.3cm、器高8.1cm。355～357は薄手の器台。形態、調整ともいずれもほぼ同じである。外面は縱刷毛目調整で、356は上位に横ナデを行う。内面は据部が刷毛目調整、受部が横ナデ（355は刷毛目調整の後横ナデ）、その間のくびれ部分は指押さえである。微砂粒を含んだ胎土で、焼成良好、淡赤褐色を呈する。355は受部径10.9cm、据部径12.3cm、高さ16.4cm、356は受部径10.1cm、据部径12.0cm、高さ16.6cmとはほぼ同様の大きさである。358は玄武岩製の石鎌片。359はサスカイト剥片の側縁を加工したスクレーパー。360・361は頁岩製の磨製石鎌。360は厚さ0.2cmで、研ぎが明瞭である。361は柳葉形で、長さ4.4cm、幅1.7cm、厚さ0.2cm、重量2 g。349・353および石器類は覆土、それ以外は床面からの出土である。

S C 1363（第39図） T-29区。ほぼ南北に長軸をとる隅丸長方形の住居で、確認できた南北長2.90m、幅は2.18m。壁高は25cm。東側は深さ7cmで幅30cm前後のテラスを作る。覆土は灰褐色土。床面に遺構はない。床面西南側に土器片と礫が若干浮いた状態で出土した。S C 1362に切られる。

出土遺物（第40図362・363） 362は逆L字状口縁の甕。口縁部の内側への張り出しも強い。口縁



第39図 S C 1363・1368・1369・1370・1373・1700実測図（縮尺1/60）

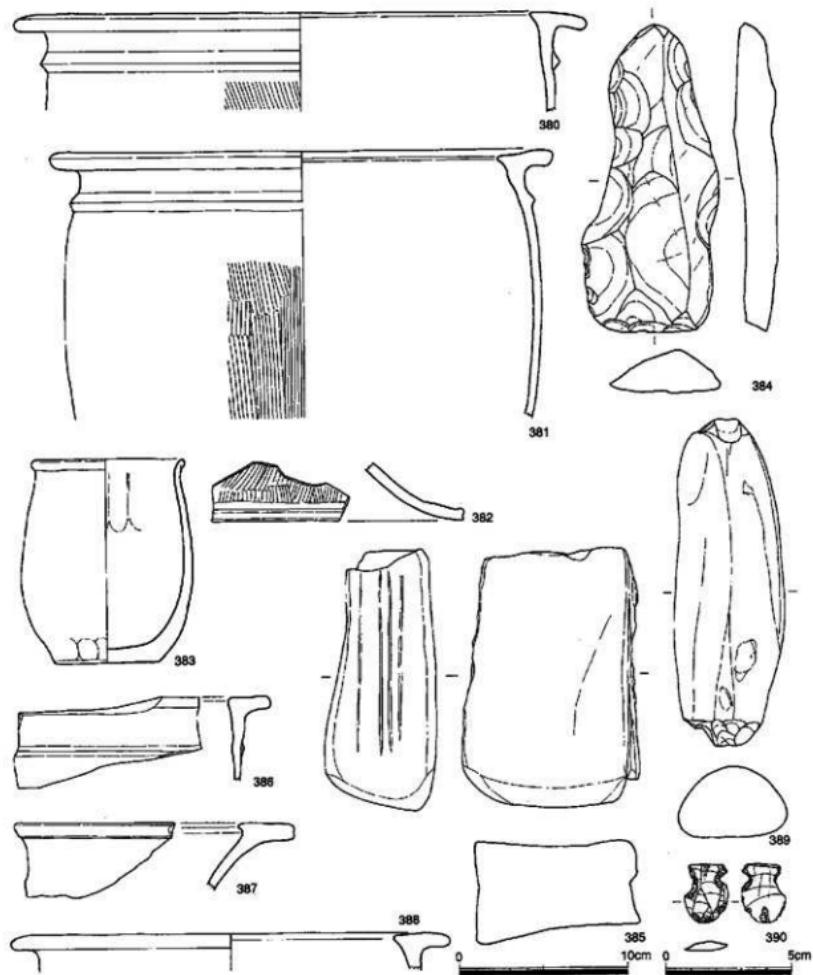


第40図 SC 1363・1368・1369出土遺物実測図（縮尺1/3）

下には三角突帯を巡らす。残存部は横ナデ。363は壺の底部。厚みのある上げ底で、外面は刷毛目調整を行う。覆土からの出土。

S C 1368（第39図、図版15-2） U-28区。ほぼ南北に長軸をとる長さ3.98m、幅3.20m、床面積10m²前後の隅丸長方形の住居である。中央が幅1.8m、深さ20cmの北から南に下がった土坑状になる。貼床を掘りすぎた可能性があり、その直上に焼土面と遺物を確認している。覆土は褐色砂質土を主とする。床面北西、北東に深さ25cm前後のピットが1個ずつある。

出土遺物（第40図364～375） 364～368は逆L字状口縁の壺。364は口縁部の外側への張り出しが小さい。368は口縁下に三角突帯が巡る。364の外面に粗い刷毛目調整がみられる他は、横ナデで仕上げている。369はくの字状口縁の壺。口縁端部は肥厚する。口縁部上面にヘラによる線がある。370・371は壺の底部。370は厚い上げ底、371は平底で、ともに外面は刷毛目調整を行う。また内底には炭



第41図 S C 1370・1373・1700出土遺物実測図（縮尺1/2, 1/3）

化物が付着する。372は無頸壺の蓋。2個の紐かけ孔がある。横ナデで、上面は黒塗りの可能性がある。373は高杯の杯部。勧先状口縁で、内外面とも横ナデを行う。374・375は鉢。374は口縁部が内傾し、外面と口縁内側に丹塗りを行う。外面ヘラ研磨、内面横ナデ。胎土は精良である。375は口縁部がほぼ直立する。外面は細かい刷毛目調整。二次焼成を受けている。

S C 1369 (第39図、図版16-1) S-28区。大半は調査区外にかかり、西南隅を中心に南および

東側壁の一部を確認した。隅丸長方形の住居であろうか。確認できた東西長は3.40m。壁高は27cm。覆土は暗褐色土。床面東南隅に長さ100cm、幅80cm、深さ31cmの楕円形ピットがあり、他に径23~50cm、深さ27~31cmのピットが2個ある。

出土遺物（第40図376~379） 376は逆L字状口縁の壺。口唇部にはヘラで刻みをいれ、また口縁下には三角突帯を巡らす。外面は口縁下から刷毛目調整、内面は横ナデ。377は壺。肩部に三角突帯を巡らせ、ヘラで細い刻目を入れる。外面は横方向のヘラ研磨を行う。378は鋤先状口縁の壺で、口唇部にはヘラで刻目を入れる。内面および口縁部上面はヘラ研磨、外面は横ナデ。379は扁平な疊の側縁を加工したもの。安山岩製か。すべて覆土からの出土である。

S C1370（第39図、図版16-1） T-28区。北側は調査区外にかかり、西側はS C1369に切られる。西北-東南に長軸をとる長方形住居で、残存長3.45m、幅2.87m。壁高は40cm。覆土は3層に分かれ、上面から10cmが灰褐色土、中央20cmが暗灰褐色砂質土、下10cmが暗褐色土となる。床面に遺構はない。

出土遺物（第41図380~385） 380・381は逆L字状口縁の壺で、口縁部の内側への張りも強い。口縁下には三角突帯を巡らす。外面突帯下は継の刷毛目調整、それより上の口縁部までは横ナデ、内面はナデを行う。382は壺の蓋。上面は刷毛目調整を行う。内面は横ナデ。上面に煤が付着する。383はコップ形の鉢。下膨れの胴部で、口縁部は折り返して丸く肥厚させる。内外面ともナデ。胎土には丸味をおびた砂粒が多く混じり、焼成ややあまく、黄褐色から褐色を呈する。無文上器の可能性がある。384は打製石斧か。安山岩製。385是比较的細かい目の砂岩製砥石。1/3の縮尺で図示している。断面長方形で、図上端は欠ける。上面および下面は滑らかな砥面として、側面の三面は細身のものを研いだとみえ、条線が何木も入る。381・383・385は床面から20cm浮いた状態で出土した。

S C1373（第39図） T-29区。南北に長軸をとる隅丸長方形住居である。残存長2.55m、幅1.85m、壁高は36cm。覆土は灰褐色砂質土。床面に遺構はない。

出土遺物（第41図386~387） 386は逆L字状口縁の壺。口縁下には三角突帯を巡らす。器表の摩滅が激しく調整は不明。387は鋤先状口縁の高杯。杯部内面は横ナデ、他は摩滅して調整はわからない。胎土は砂粒が混じり、粗い。ともに覆土からの出土。

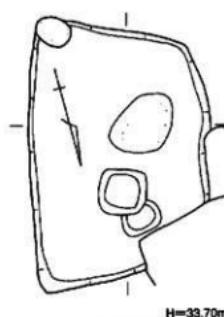
S C1700（第39図、図版16-2） U-31区。四側壁をそれぞれ東西南北にとった一辺2.48~2.62m、床面積6m²前後の隅丸形の住居である。壁高は15cm。覆土は暗褐色土。床面には主柱穴とみられるP 1~P 4があり、径22~34cm、深さ15~28cmをはかる。柱穴間はP 1-100cm-P 2-165cm-P 3-120cm-P 4-190cm-P 1となる。

出土遺物（第41図388~390） 388は逆L字状口縁の壺。口縁部の内側への張りも強い。残存部は横ナデ。389は断面三角形の棒状砾の両端を使用した敲石。砂岩製。390は黒曜石製のつまみ型石器。この他使用痕のある黒曜石片が出土しただけである。

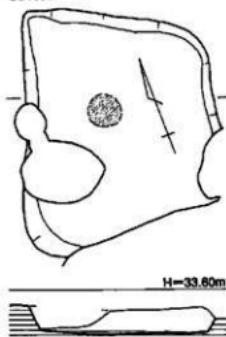
S C1792（第42図、図版17-1） U-28区。ほぼ南北に長軸をとる長さ3.30m、幅2.17m、床面積5m²前後の不整長方形住居である。壁高は19cm。覆土は暗褐色土。床面に北側に径50cm前後、深さ10~20cmのピットが切りあう。この住居に伴うものは不明。

出土遺物（第43図391~395） 391・392は逆L字状口縁の壺。391は口縁部の外側への張りが小さく、外面は継の刷毛目調整を行う。392の残存部は横ナデ。393は壺の底部。平底で、外面は刷毛目調整を行う。内底には炭化物が残る。394は広口壺。口縁部は折り返して厚くし、口唇部上下端にそれぞれヘラで刻目を入れる。外面は横ナデ、口縁部上面から内面はヘラ研磨。胎土には砂粒が混じり、焼成良好、赤褐色を呈する。395は鉢。口縁部は直立する。外面は全面に継刷毛目調整を行った後、

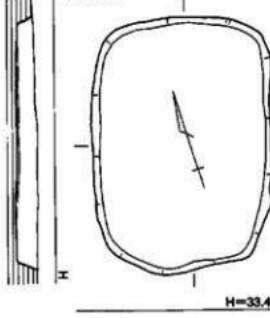
SC1792



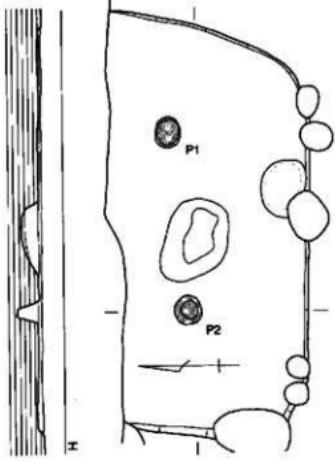
SC1836



SC1972

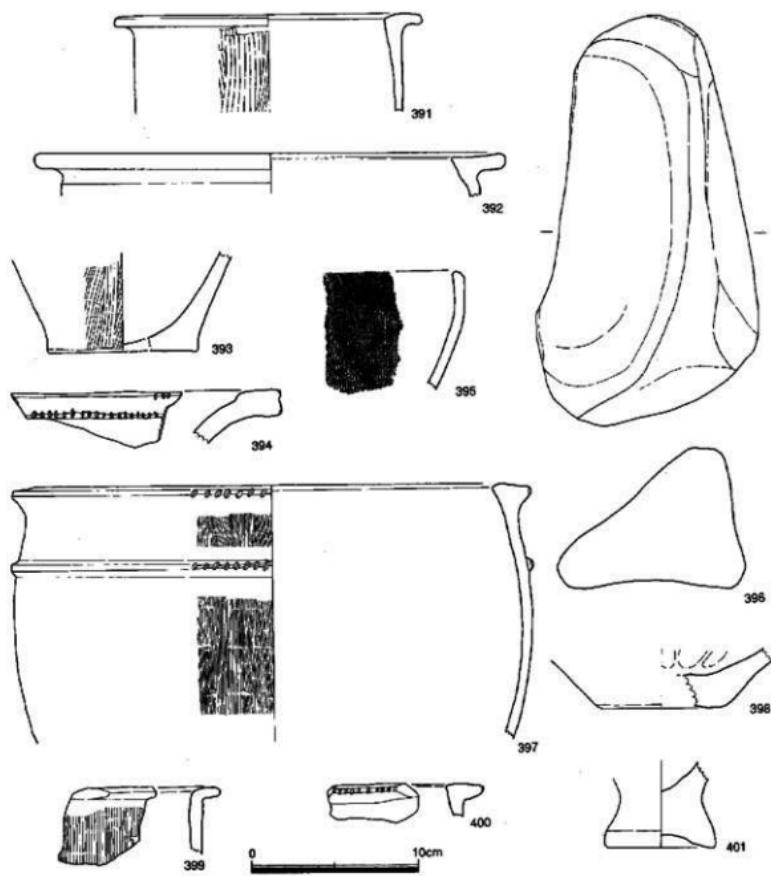


SC1800



1. 黄味褐色土+砂
2. 1に黄色粘土ブロック混る
3. 灰褐色土+黄色粘土ブロック
4. 黑褐色土+黄土+炭化物

第42図 SC1792・1800・1836・1972・2020実測図（縮尺1/60）



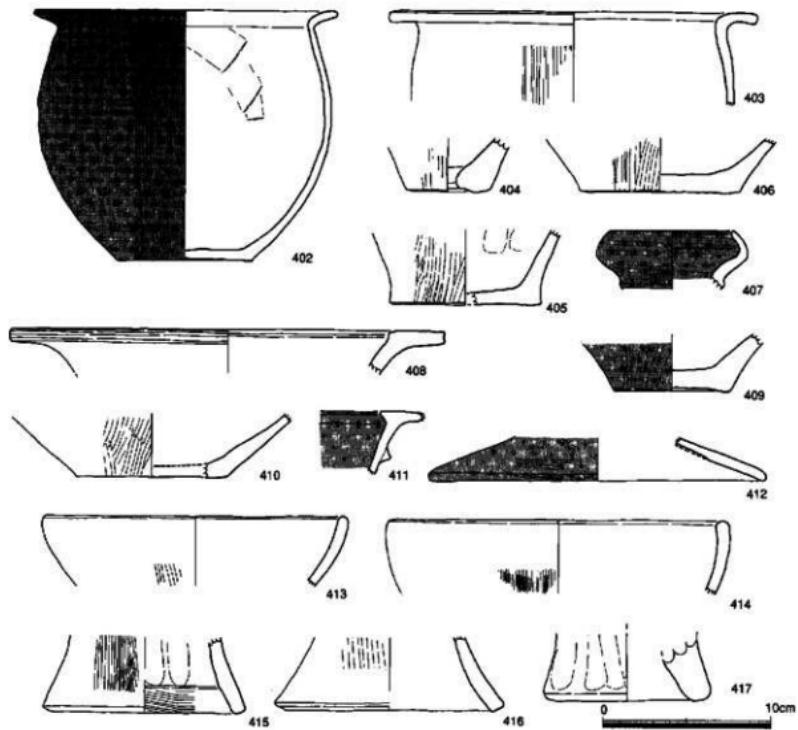
第43図 S C1792・1800・1836・1972出土遺物実測図（縮尺1/3）

口縁部付近を横ナデで消す。内面は横ナデ。外面口縁部にヘラによる線が2本入る。

S C1800（第42図、図版17-2） V-27区。北側を開田により削られるが、ほぼ東西に長軸をとる隅丸長方形住居であろう。長さ4.95m、残存幅2.40m、壁高は6cmと残りが悪い。床面中央に長さ103cm、幅63cm、深さ20cmの炉を設ける。炉内覆土は暗褐色土が主で、下部には炭化物が多くなる。炉を挟んで東に径35cm、深さ42cmのP1、西に径35cm、深さ28cmのP2があり、主柱穴であろう。P1-P2間は215cmをはかる。S B0211に切られる。出土遺物は炉西南床面で検出した大形砥石だけである。

出土遺物（第43図396） 396は断面三角形の大形の砥石である。やや粗い砂岩製で、すべての面を砥面として使用している。1/3の縮尺で図示している。

S C1836（第42図、図版18-1） T-29区。ほぼ南北に長軸をとる長さ3.00m、幅2.30m、床面



第44図 S C 2020出土遺物実測図（縮尺1/3）

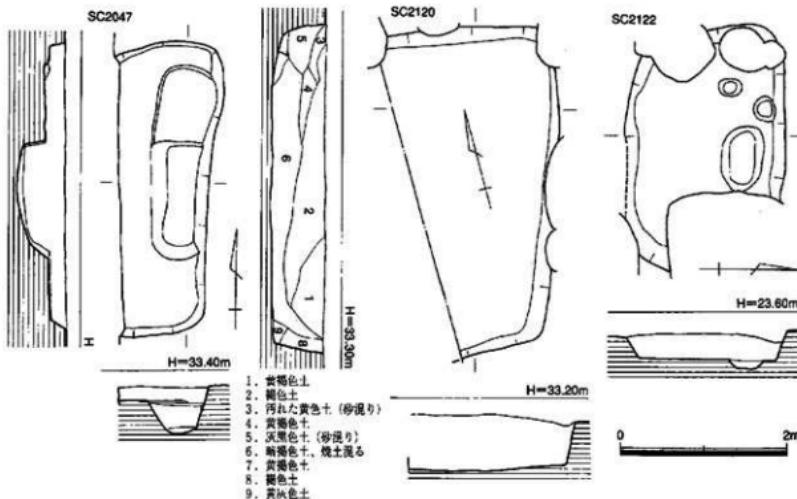
積5m²前後の隅丸長方形住居である。西北隅は角張る。壁高は20cm。覆土は黄褐色土。床面中央やや北寄りの径40cmに炭化物があり、その周囲の床は堅くしまる。S C 2120に切られる。

出土遺物（第43図397・398） 397は断面三角形の口縁をもつ壺。口唇部と口縁下に巡らした三角突起上に棒状工具で刻日を入れる。外面は刷毛目調整、内面はナデ。398は壺の底部。平底で、外面は綫方向のヘラ研磨を行う。覆土からの出土。

S C 1972（第42図、図版18-2） V-24区。ほぼ南北に長軸をとる長さ3.06m、幅2.12m、床面積6m²前後の隅丸長方形住居である。壁高は23cm。覆土は暗褐色砂質土。床面に遺構はない。覆土から若干の遺物が出土した。S C 1500を切る。

出土遺物（第43図399～401） 399は逆L字状口縁の壺。口縁部の外側への張りは小さく、外面は細かい綫の刷毛目調整を行う。400は断面三角形の口縁をもつ壺。口唇部にはヘラで刻日を入れる。残存部横ナデ。401は壺の底部。台形状の厚い平底となる。外面器表は摩滅し、調整不明。

S C 2020（第42図、図版19-1） V-23区。ほぼ南北に長軸をとる長さ2.70m、幅1.95m、床面積4m²前後の隅丸長方形住居である。壁高は66cm。床面直上の覆土には焼土、炭化物がみられる。床面に遺構はない。



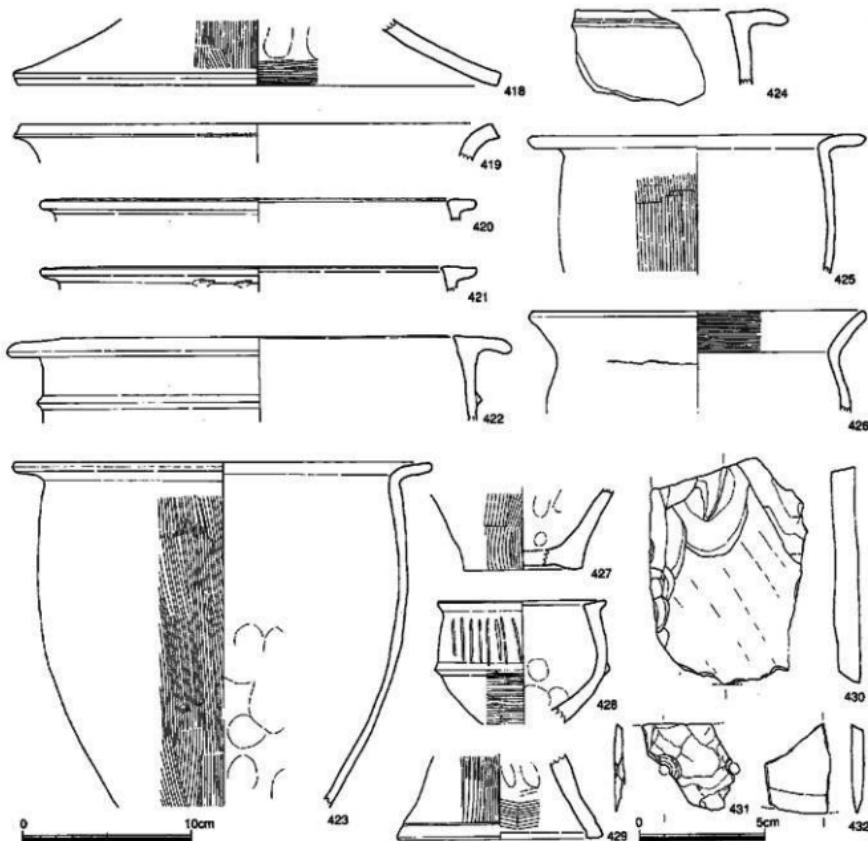
第45図 S C 2047・2120・2122実測図（縮尺1/60）

出土遺物（第44図402～417） 402・403は口縁部がくの字状に近い壺である。402は底部が広く、かなり器壁は薄手に作られる。外面は縦の刷毛目調整、内面はナデで仕上げる。外底も含め外面は丹塗り。胎土は精良で、焼成も良好。二次焼成を受けており、器表が剥落する部分がある。復元口径18.0cm、器高15.0cm。403は外面刷毛目調整、内面ナデ。404～406は壺の底部。404は焼成後穿孔して、瓶として利用する。405・406は平底で、外面刷毛目調整を行う。408は鈍先状口縁の壺。残存部は内外面とも横ナデ。407は袋状口縁の壺。口縁下には突帯を巡らす。摩滅気味だが口縁下には刷毛目調整が残り、また内外面とも丹塗り。胎土は精良である。番号が前後するが、412は無形壺の蓋。残存部に紐かけ孔はみられないが、内外面とも横ナデで、外面は丹塗り。内外面とも黒斑がある。胎土は精良。409・410は壺の底部。409はわずかに上げ底で、外面は丹塗りヘラ研磨。内底にも丹の滴がみられる。410は平底で、外面は粗い刷毛目調整を行う。411は高杯。鈍先状口縁で、口縁下には三角突帯を巡らす。杯部内面は横ナデで、丹塗り。他は摩滅して調整不明。413・414は鉢。ともに口縁部は直立し、丸くおさめる。外面は全体に刷毛目調整を行った後、口縁部付近を横ナデで消す。415・416は薄手の器台。外面は刷毛目調整。415は据部内側にも刷毛目調整を行い、くびれ部との間には段がつく。417は厚手の器台。外面は指押さえで仕上げる。すべて覆土からの出土である。

S C 2047（第45図） U-25区。西側が調査区外にかかるが、ほぼ南北に長軸をとる長隅丸長方形住居であろう。南北長3.40m、壁高は18cm。東側壁下中央の床面に長さ140cm、幅62cm、深さ41cmの土坑を設ける。十坑覆土は暗褐色砂質土。またその北側は床面から3cmほど低くなる。

出土遺物（第46図418～422） 418は壺の蓋。口唇部から内面には煤が付着する。外面は縦の刷毛目調整、内面は口縁部付近が横の刷毛目調整、他はナデを行なう。419は如意形口縁の壺。口唇部下端にヘラで小さな刻印を入れる。420～422は逆L字状口縁の壺。420・421の口縁部は外側への張りが小さい。422は口縁下に三角突帯を巡らせ、外面は縦刷毛目調整の後横ナデを行なう。すべて覆土出土。

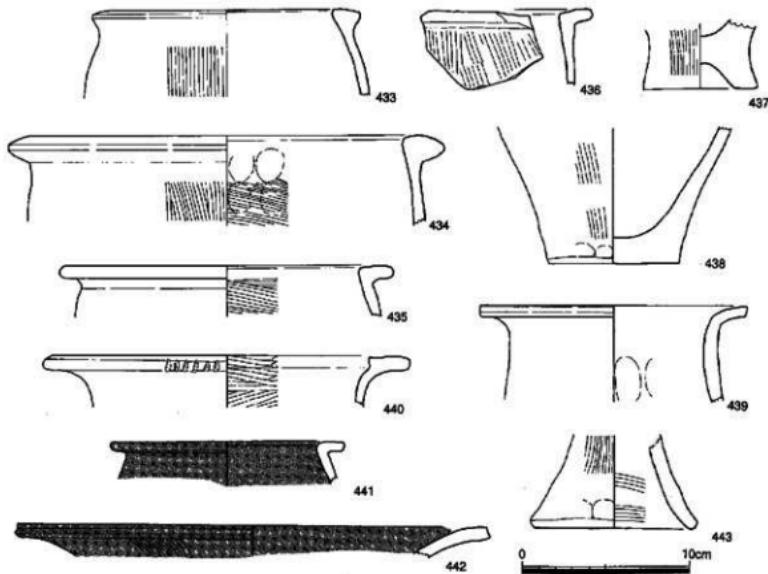
S C 2120（第45図、図版19-2） V-24区。西側が調査区外にかかる。ほぼ南北に長軸をとる長



第46図 S C 2047 · 2120出土遺物実測図 (縮尺1/2, 1/3)

方形住居であろう。南北長3.90m、壁高60cm。覆土は図示したように大きく2層に分かれる。床面に遺構はない。S B 0216に切られる。

出土遺物（第46図423～432） 423・425はくの字状に近い口縁をもつ壺で、口縁端部は丸くおさめる。外面は刷毛目調整、内面はナデ調整となる。424は逆L字状口縁の壺。残存部は横ナデを行う。426はくの字状口縁の壺で、口縁部内面には稜がつく。口縁部内側は刷毛目調整、他は横ナデ。427は壺の底部。わずかに上げ底で、外面は刷毛目調整。428は小型の鉢。口縁部は断面三角形になり、内傾する。胎部には三角突帯を巡らす。外面突帯の上は横ナデの後、継のヘラ暗文、また下は横のヘラ研磨を行う。胎土には砂粒が若干混じる。焼成良好、淡赤褐色を呈する。429は薄手の器台。外面据部直上に沈線を巡らせ、その上は継の刷毛目調整を行う。据部内面は横刷毛目調整、その上位は指押さえとなる。430は玄武岩片の側縁を加工したもの。一部刃を研ぎだしたような磨きがみられ、石鎌



第47図 S C2122出土遺物実測図（縮尺1/3）

の未製品とも考えられる。431・432は頁岩製石包丁の破片である。431の紐かけ孔は両面穿孔。すべて覆土からの出土である。

S C2122 (第45図、図版18-1) T-29区。東西に長軸をとる長さ3m前後、幅1.90mの隅丸長方形の住居である。壁高は35cm。覆土は黒褐色土。床面北側壁下に長さ80cm、幅50cm、深さ25cmの土坑を設ける。他に径25cm、深さ20~22cmのピット2個がある。S C1836を切る。

出土遺物 (第47図433~443) 433・434は断面三角形の口縁をもつ壺である。ともに外面は刷毛目調整を行うが、433はその上に横ナデを行う。434の内面は指押さえの後、刷毛目調整を行う。435・436は逆し字状口縁の壺。口縁部の外側への張りは小さい。435の外面は刷毛目調整後横ナデ、内面は指押さえの後、刷毛目調整を行う。明赤褐色を呈する。436は外面刷毛目調整、内面ナデ。437・438は壺の底部。437は厚みのある上げ底、438は平底で、ともに外面は刷毛目調整。439は口縁部が外反し、壺部が面を作る壺。残存部は横ナデ。胎土には砂粒が混じり、焼成良好、淡赤褐色を呈する。440は箇先状口縁の壺。口唇部には二枚貝の腹線で刻を入れる。内面から口縁部上面はヘラ研磨、外面は横ナデを行う。胎土には砂粒が混じり、暗褐色を主に呈する。441は無頸壺。口縁は平坦になる。調整は不明だが、内外面とも丹塗りする。胎土は精良。442は広口壺。口唇部は中くぼみとなる。内外面とも横ナデで丹塗り。外面には縱方向のヘラによる暗文がある。443は薄手の器台。外面は縦の刷毛目調整、内面は横ナデを行う。すべて覆土からの出土である。

4) 小 結

1991年度に実施した東入部遺跡群第2次調査は、その対象面積が大きく、また地域も分散したため、6区から15区に分けて発掘調査を行った。今回報告を行ったのはそのうちの8区である。8区は調査面積が7,177m²で、調査区の東半分は弥生時代の墓地となり、東側から北側にかけては竪穴住居、土坑などの弥生時代集落が墓地に沿うように営まれている。さらに、この集落部分に5基の古墳、古代の集落、中世の集落が重なっており、発掘調査は時間的な制約もあり困難をきわめた。また整理作業も磐棺の復元、実測などに手間取り、本来なら8区全体を同時に報告すべきところを、今回は整理がすんだ弥生時代の掘建柱建物、竪穴住居の報告にとどまった。以下今回の報告について簡単なまとめを行う。

掘建柱建物は12棟（S B0233は除く）検出した。建物方位を北から東に10°～14°にとり（北端のS B0216・0217が20°前後）南北方向に整然と分布する。建物規模はS B0222が2間×3間、他は梁間1間で、桁行は1間から4間となる。床面積はS B0211が45m²と最大で、S B0219が最小の5m²弱となる。柱穴の掘り方は1m越えるもののが多かった。梁間1間の建物は高床倉庫の可能性が高い。残されたピットから見てまとめてきた建物も相当数あるものと思われる。

竪穴住居は調査区西側から北側にかけて墓地を取り巻くような状態で分布する。当初、竪穴住居を営んでいたところまで墓地が拡張してきたことが、S C0547と北側区画との切り合い状況からうかがわれる。竪穴住居は平面形態が円形と方・長方形に分かれる。円形住居は中央に炉をもち、床面全体を確認できたものでは7～11個の主柱穴をめぐらす。S C0538・1360を除き、床面積が60m²を超えるもの（S C0952・1140・1155・1200・1221）とその約半分の31m²～38m²のものがある。これに対し方形住居は柱穴や炉を作わないものが大半で、床面積は最大でも11～12m²、多くが10m²以下となり、最小はS C2020の4m²である。

以上の掘建柱建物と円形・方形の竪穴住居は調査区内で重複する。掘建柱建物はもとより、竪穴住居についても一部を除き床面に残された遺物は少なく、多くが覆土からの小～細片にとどまつた。これらの遺物を見る限り、8区の集落は前期末から中期後半にかけて営まれており、ほぼ墓地の時期とも一致する。出土遺物からS B0211とS C0983、1500、1520は中期初頭に比定でき、S B0211に切られたS C0640、1800はともに中央に炉をもち、S C1157とともに前期末に相当しよう。最も新しいのは中期後半のS C2020、2120とそれらを切るS B0216である。詳細な遺構変遷は、他の遺構も勘案した上で今後行わねばならないが、大まかには、前期末に炉をもつ方形住居がまず築かれ、中期初頭には円形住居と掘建柱建物が加わり、中期後半まで継続する。集落はさらに北側の9・10区や第11次調査地点まで続いており、また調査区西側にも延びることが確認されている。

東入部遺跡群報告書一覧（発行順）

- 「東入部遺跡群1－東入部遺跡群第4次調査報告－」福岡市埋蔵文化財調査報告書第381集 1994
- 「東入部遺跡群2－東入部遺跡群第5次発掘調査報告－」福岡市埋蔵文化財調査報告書第382集 1994
- 「東入部遺跡群3－東入部遺跡群第6次調査の報告－」福岡市埋蔵文化財調査報告書第383集 1994
- 「東入部遺跡群4－第8次・9次調査報告－」福岡市埋蔵文化財調査報告書第421集 1994
- 「人部VII－東入部遺跡群第3次・第10調査報告－」福岡市埋蔵文化財調査報告書第485集 1996
- 「人部VIII－東入部遺跡群第7次調査報告(1)－」福岡市埋蔵文化財調査報告書第516集 1997
- 「人部IX－東入部遺跡群第1次調査報告(1)・第7次調査報告(2)－」福岡市埋蔵文化財調査報告書第557集 1998
- 「人部X－東入部遺跡群第1次調査報告(2)・第2次調査報告(1)－」福岡市埋蔵文化財調査報告書第613集 1999

図版



第2次調査8区調査風景



8区全景（西から）

図版 2



1 8区南西側（北東から）



2 8区南西側（北から）



1 8区北西側（南から）



2 SB0213（南から）

図版 4



1 SC0538 (南から)



2 SC0952 (北から)



1 SC0983 (北から)



2 SC1140・1140A (北西から)

図版 6



1 SC1155 (北東から)



2 SC1200 (東から)

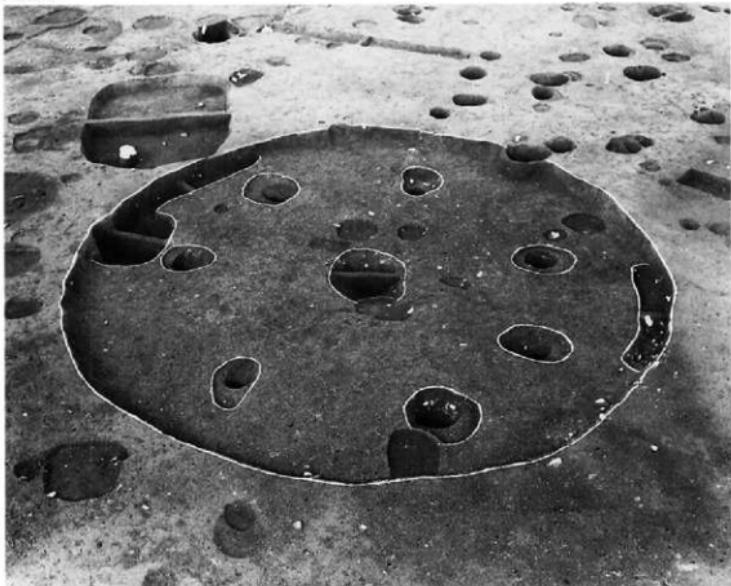


1 SC1220・1360 (南東から)

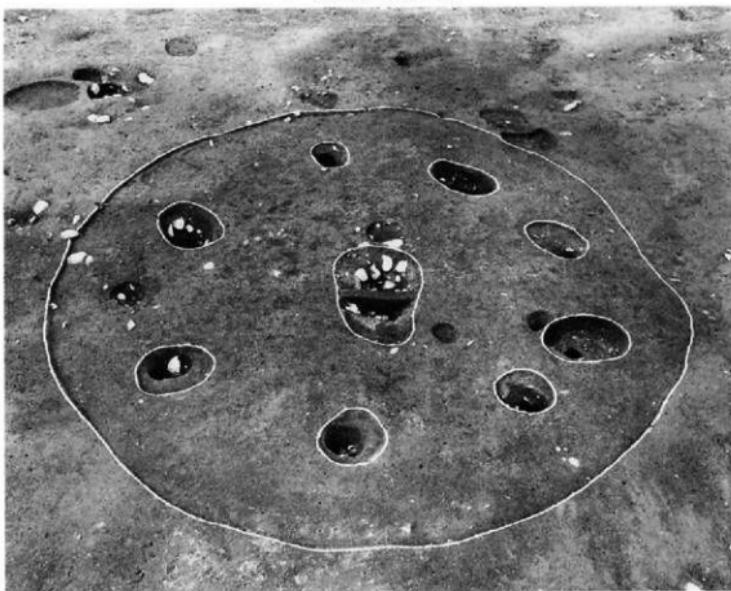


2 SC1221 (東から)

図版 8



1 SC1500 (南から)



2 SC1520 (南から)



1 SC2051 (南から)



2 SC0527 (東から)

図版10



1 SC0529 (南から)



2 SC0540 (南から)

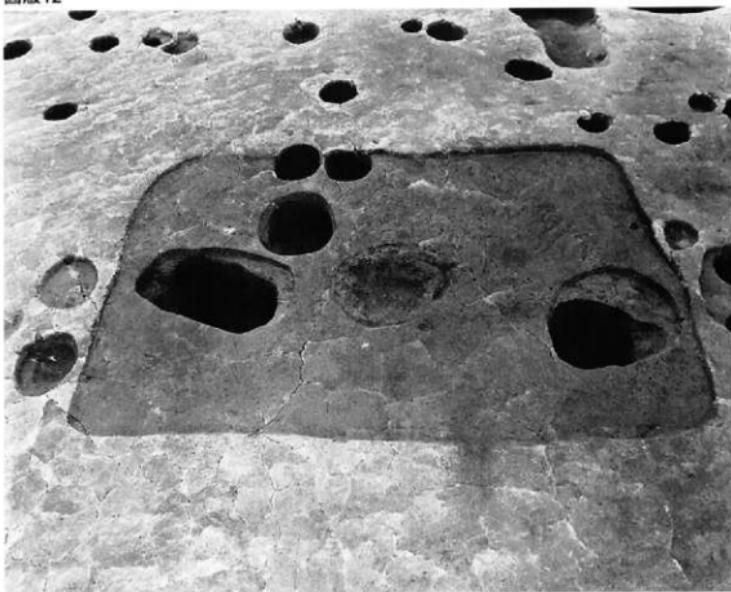


1 SC0546 (北から)

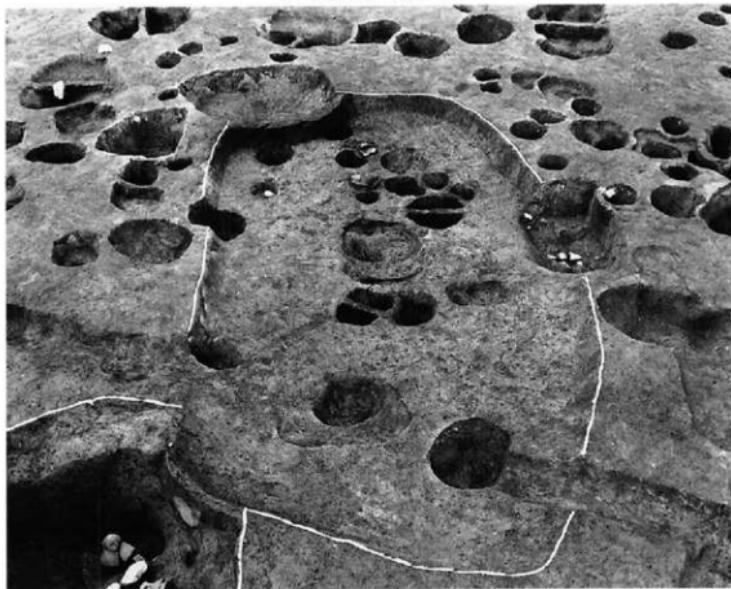


2 SC0527 (北から)

図版12



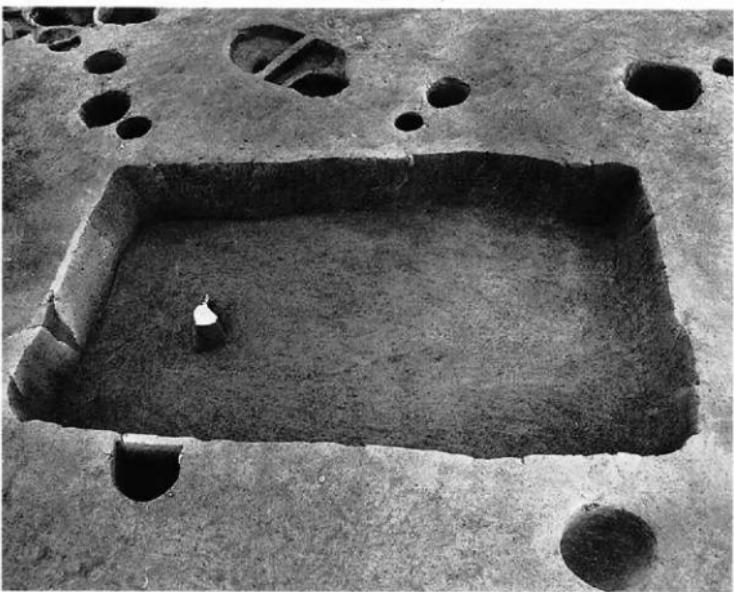
1 SC0640 (北から)



2 SC0662 (西から)



1 SC0964 (西から)

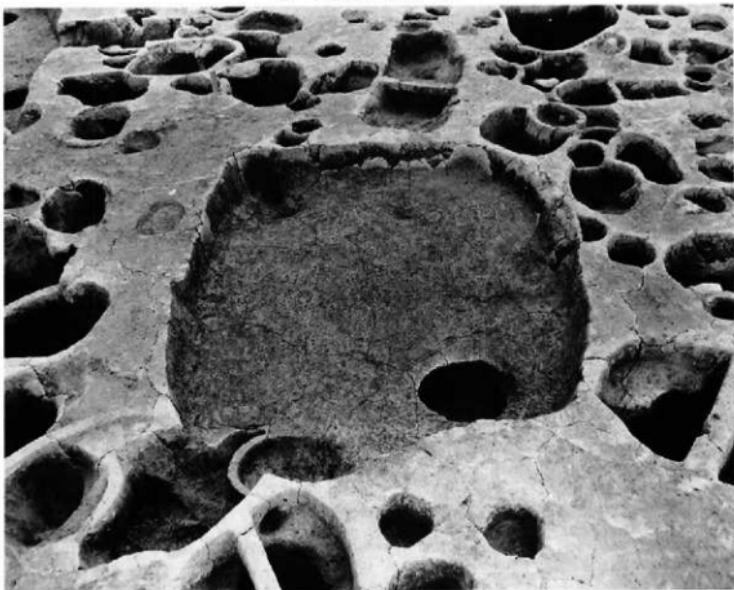


2 SC0965 (西から)

図版14



1 SC1157 (西から)



2 SC1332 (南から)



1 SC1362 (北から)



2 SC1368 (南から)

図版16



1 SC1369・1370 (東から)



2 SC1700 (西から)

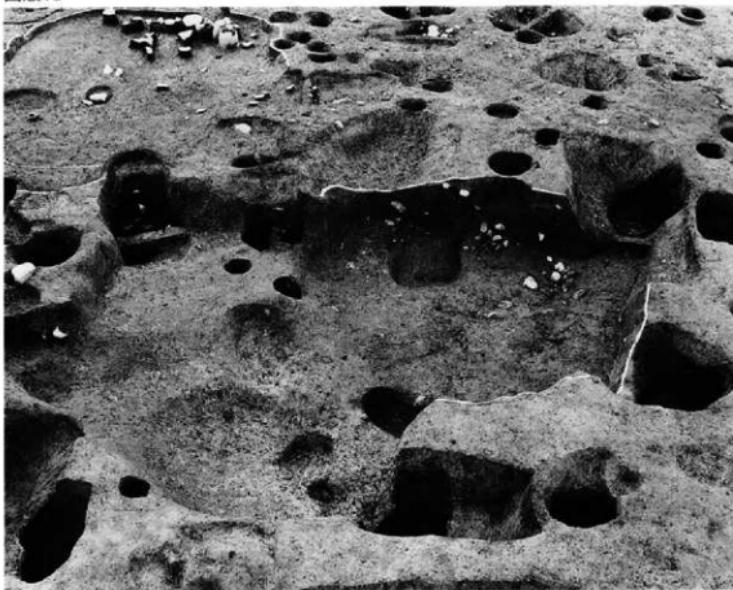


1 SC1792 (南から)



2 SC1800 (南から)

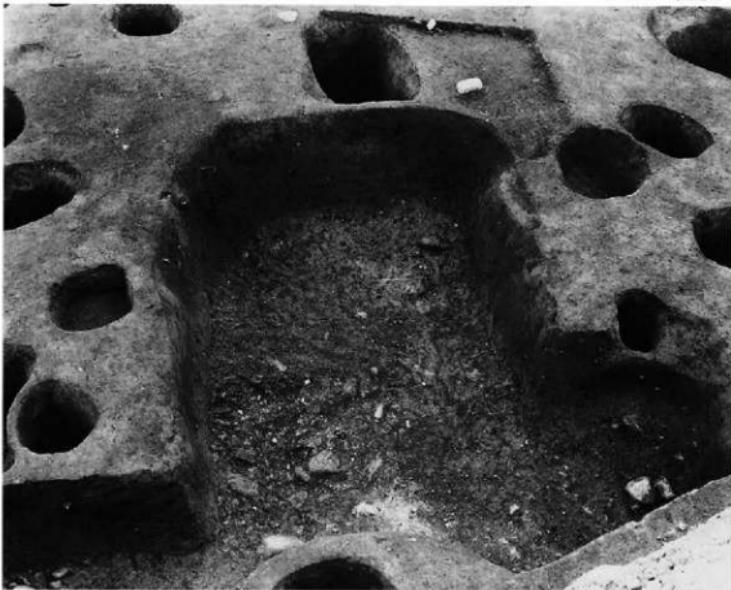
図版18



1 SC1836・2122 (東から)



2 SC1972 (南から)

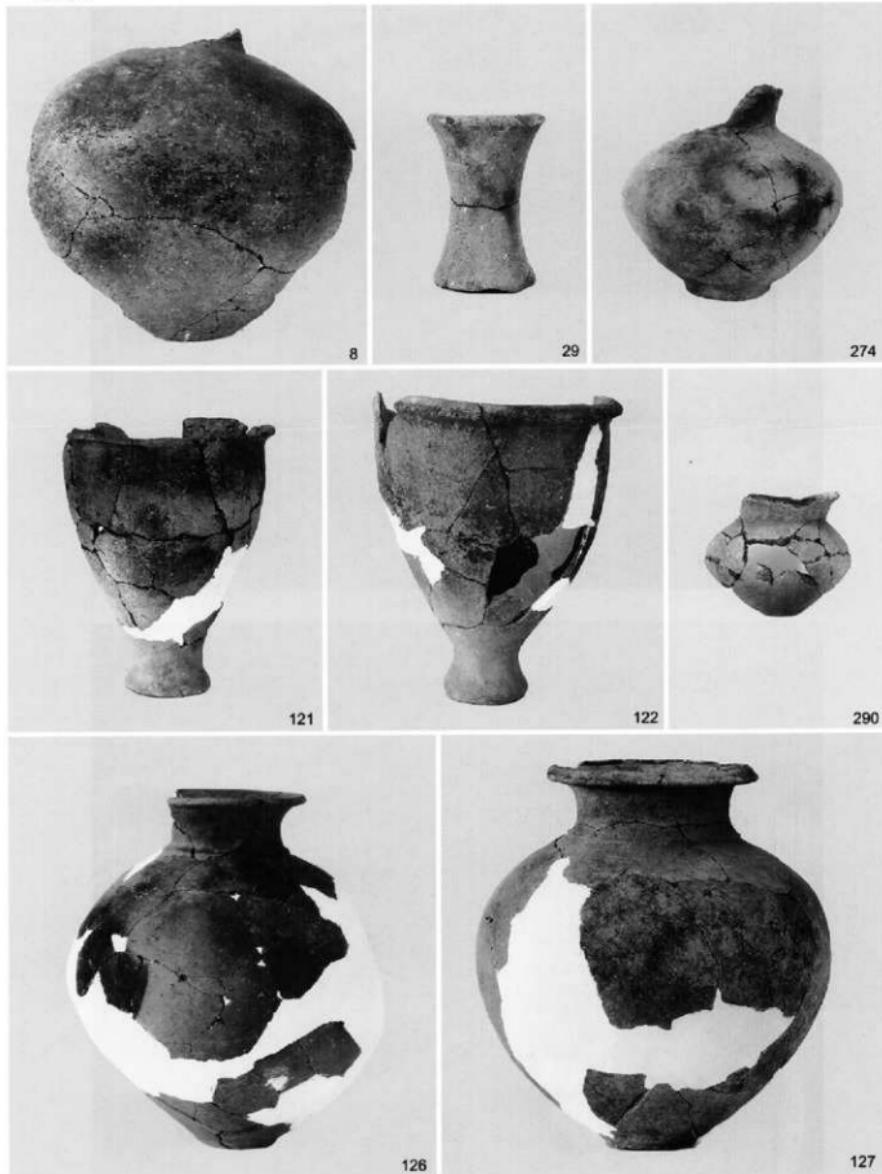


1 SC2020 (北から)



2 SC2120 (北から)

图版20



出土遗物 1



308



309



350



352



356



355



354



383



402

出土遺物 2

図版22



出土遺物 3

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第652集

入 部 X

2000年3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1

印 刷 株式会社 エイコー社
福岡市西区周船寺三丁目19-9

福岡市埋蔵文化財調査報告書第652集

『入 部 X』

付 図

東入部遺跡群第2次調査8区遺構配置図(縮尺1/200)